Ⅲ　2002年度の調査報告

00201　農学部２号館改修工事に伴う調査
（樽味遺跡７次調査）

調 査 地 点　松山市樽味３丁目５番７号
　　愛媛大学樽味団地（図２）
調 査 面 積　170㎡
調 査 期 間　2002年４月３日～５月23日
調査の種別　本格調査
調 査 担 当　田崎博之
調 査 補 助　宮崎直栄

1　調査にいたる経緯

農学部２号館の改修工事に伴い、電気・通信・排水の管路の敷設計画が施設部から埋蔵文化財調査室に提示された。埋蔵文化財調査室では、既往の調査成果から、計画されている管路周辺には埋蔵文化財が分布し、工事により影響が生じると判断し、施設部と協議を重ね、管路部分の発掘調査を実施することとなった。樽味遺跡７次調査（調査番号：00201）である。

2　調査の概要

今回の調査では、電気・通信・排水の管路を埋設するため、細長い調査区となっている。そのため、以下のように、敷設される管路を北からⅠ～Ⅴ区とし、さらに日本測地系平面直角座標系Ⅳ系に基づいた５ｍ毎に区割し、調査を進めることとした（図20）。

Ⅰ区：樽味団地の正門西にある守衛室西側から農学部２号館までをつなぐ電気・通信管路部分の調査区。幅1.5ｍ、長さ48ｍを測る。ＩＡ～ＩＪ区に区画される。

Ⅱ区：農学部本館と２号館に囲まれた中庭北西部に埋設される汚水管路部分の調査区。

Ⅲ区：Ⅱ区と同じく、農学部本館と２号館に囲まれた中庭の南西部に敷設される汚水管路部分にあたる調査区。

Ⅳ区：三科実験室建物と農学部本館をつなぐ電気・通信管路部分の調査区。

Ⅴ区：Ⅳ区東側に位置する汚水管路部分の調査区。

今次調査では、狭い調査範囲にもかかわらず、古墳時代後期および古代後期～中世前期の多くの遺構が出土した。調査区ごとに表６に整理した。これらは、後述するように、樽味団地基本層序のⅢ層を掘り下げ中に確認できた灰褐色系の埋土をもつ土壙・小穴と、樽味団地基本層序のⅣ層上面で検出できた黒褐色～暗褐色の埋土の土壙・小穴・自然河道などに大別できる。

表６　00201調査（樽味遺跡７次）遺構一覧

調査区	調　査　区	遺　構　番　号	総数	備　　考
Ⅰ区	竪穴式住居（SC） 掘立柱建物（SB） 土壙（SK） 溝（SD） 自然河道（SR） 土器溜まり（SX） 小穴（SP）	SC-17・28・50 SB-77（SP-54・56で構成） SK-１・７・19・51・55・61・63・64・69 SD-８・18 SR-13 SX-29 SP-２～６・11・12・14・15・20～24・26・27・30～48・53・54・56～60・65～68・70～71・74～76・78～89	3 1 9 2 1 1 63	※９・10・16・25・49・52・62・72・73号遺構は欠番。
Ⅱ区	竪穴式住居？		1	
Ⅲ区	遺構は検出されていない。			
Ⅳ区	自然河道（SR）	SR-101・102	2	
Ⅴ区	掘削予定の深度までには遺構は検出されていない。			

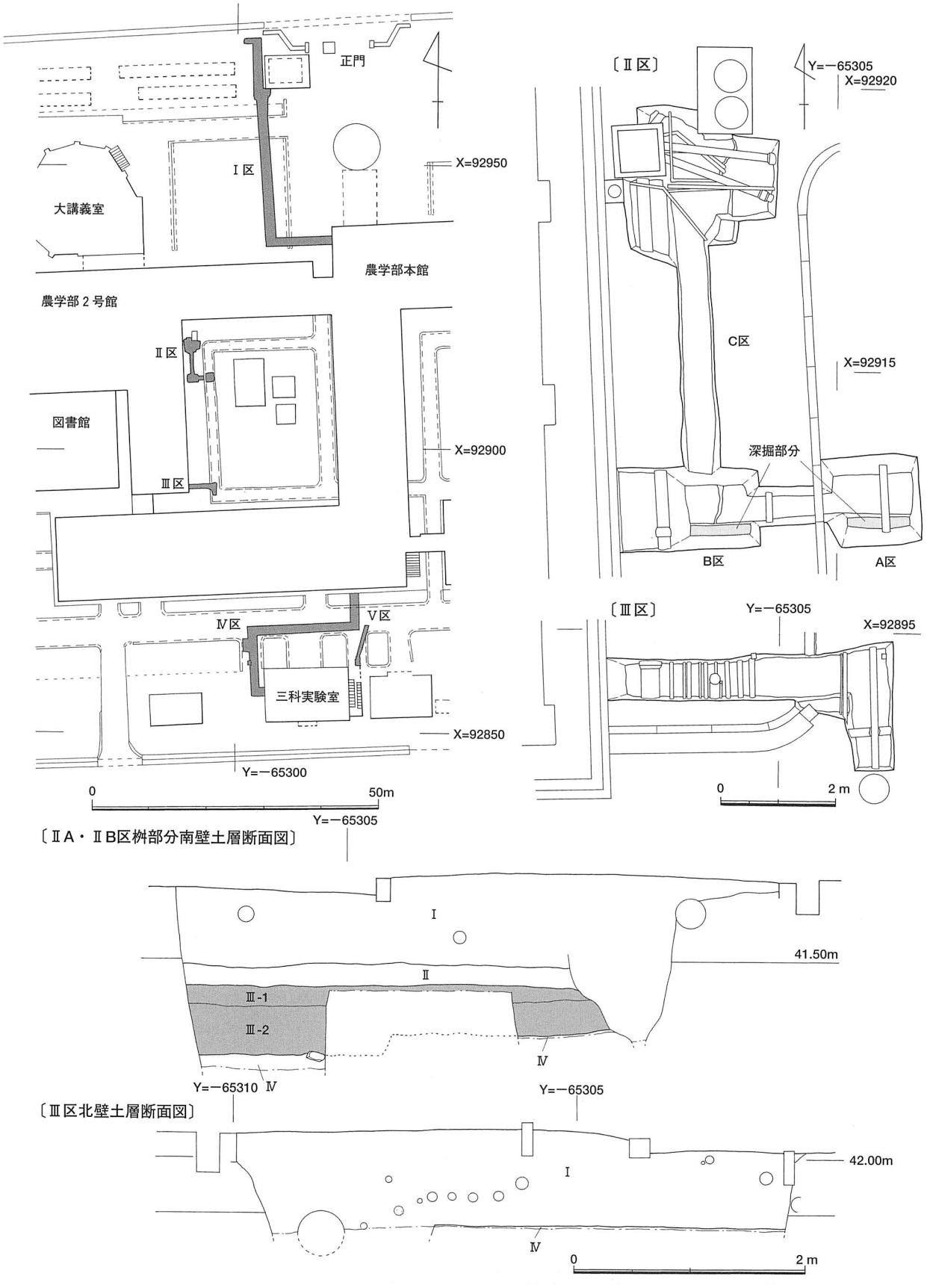

図20　00201調査（樽味遺跡７次）位置図、Ⅱ・Ⅲ区全体図およびⅡ・Ⅲ区土層断面図（縮尺 1/1,000、1/100、1/50）

前者からの出土遺物は、土師器や陶磁器の碗皿類などがあり、古代～中世の遺構である。後者の遺構からは、基本的には古墳時代（５～６世紀）の須恵器や土師器が出土し、当該期の遺構と考えられる。この他、Ⅲ層からは、弥生時代中期の土器や８世紀代の須恵器が出土したが、５～６世紀の遺物がもっとも多い。

（１） Ⅰ区の概要（図21、写真65～78）

Ⅰ区は南北に長く、大講義棟や自転車置場への通路を確保するために、ⅠA～ⅠF区とⅠG～ⅠJ区に二分して調査を進めざるを得なかった（写真65・67・69）。そのため、SR-13の最上層に堆積する土層（後述するSR-13①層と②層）をⅢ層と誤認するなどの混乱が生じた。そこで、Ⅰ区の調査の最終段階に、層序関係の再検討を行い、現地で層序番号や出土遺物の取り上げ層序の読み替えを行った。そのⅠ区の層位は、以下の通りである。

Ⅰ層：表土層にあたる瓦礫を含む造成土。

Ⅱ層：造成以前の近世～近代の水田層で、上部の灰オリーブ色砂質シルトの耕作土層にあたるⅡ-１層と、下部の同質・同色であるがマンガンが沈着した床土層にあたるⅡ-２層に分層できる。

Ⅲ層：黒色～黒褐色系の土層で、後述するSR-13①層によってⅢ-１・Ⅲ-２層とⅢ-３層に分層できる。

Ⅲ-１層は暗灰黄色砂質シルト、Ⅲ-２層は砂礫が多く混じる暗灰黄色砂質シルトである。Ⅲ-１・Ⅲ-２層は、Ⅲ層に区分したが、土色はⅡ層に近似し、層序的にはSR-13の上部に堆積した土層で、本来Ⅱ′層として分層することが適当な堆積物である。また、土質的には水田層の可能性が高い。また、Ⅲ-１層とⅢ-２層からは、弥生時代～中世までの遺物が混在する状態で出土している。

Ⅲ-３層は、暗褐色砂質シルトで、下半部はⅣ層の砂礫を含む褐色シルトが混じり、Ⅳ層へ漸移的に移行する。ⅠG～ⅠJ区のⅢ層は、土質・土色の特徴がⅢ-３層と共通し、これに対応する堆積物と考えられる。Ⅲ-２層上面で遺構検出に努め、中世以降の灰褐色系の埋土をもつ土壙・小穴を確認できた。Ⅲ-３層中から出土する遺物は、古墳時代後期の須恵器・土師器が圧倒的に多いが、これに弥生土器甕の底部片、古代～中世の土師器皿、土鍋の脚部片、緑釉陶器片が混じる。

Ⅳ層：小指先～拳大の円礫や小礫を多く含む褐色シルトで、基本層序Ⅳ層でも下部を構成する堆積物である。Ⅳ層上面で、Ⅲ層を掘り下げ中に見逃した灰褐色系の埋土をもつ中世の小穴の一部と、黒褐～暗褐色の埋土の古墳時代～古代の土壙・小穴・自然河道を検出した。Ⅳ層自体には遺物は含まれていない。

Ⅴ層：SR-13はⅣ層下に堆積したⅤ層まで削り取っている。SR-13下半部の壁面では、標高40.5～41.0ｍで、人頭大の花崗岩の円礫が混じる褐色の礫層であるⅤ層を確認できた。Ⅴ層からは遺物は出土していない。

Ⅰ区で出土した遺構には、１～89の遺構番号を付したが、この中で、９・10・16・25・49・52・62・72・73号遺構は、他の遺構の埋土の一部を誤認したり、重複して遺構番号を付したために、欠番とした。したがって、Ⅰ区で検出した遺構の総数は80である（表６）。

さらに、これらの遺構は、以下のａ～ｄの類型の埋土をもつ遺構に区分できる。

ａ：やや白っぽくツヤのある灰色シルト質土や、灰色みを帯びた褐色砂質シルト質土ないし暗褐色シルトを埋土とする。層位関係から判断すると、近世以降の遺構である。

ｂ：灰色みを帯びる埋土をもつ遺構で、灰褐色微細砂が混じって全体に灰色みがかった埋土のSD-18も含まれる。層位関係と出土遺物から、古代後半期～中世の遺構と考えられる。

ｃ：黒みの強いシルトないし砂質シルトを主体とする埋土をもつ遺構。出土遺物は、弥生時代中期～後期の土器が混じるが、古墳時代後期の土師器や須恵器が大半で、古代以降の遺物は出土していない。古墳時代以前の遺構である。

ｄ：クロボク土のサラサラしてしまりがない埋土の遺構。

①　近世の遺構

ａ類型の埋土をもち近世以降と考えられる遺構には、SK-１・７、SP-２～６・11・12・22・23・81・84・85がある（写真66）。

②　古代・中世の遺構

ｂ類型の埋土をもつ古代～中世の遺構には、SD-８・18と、SP-14・15・21・27・31～48・57・74～76・

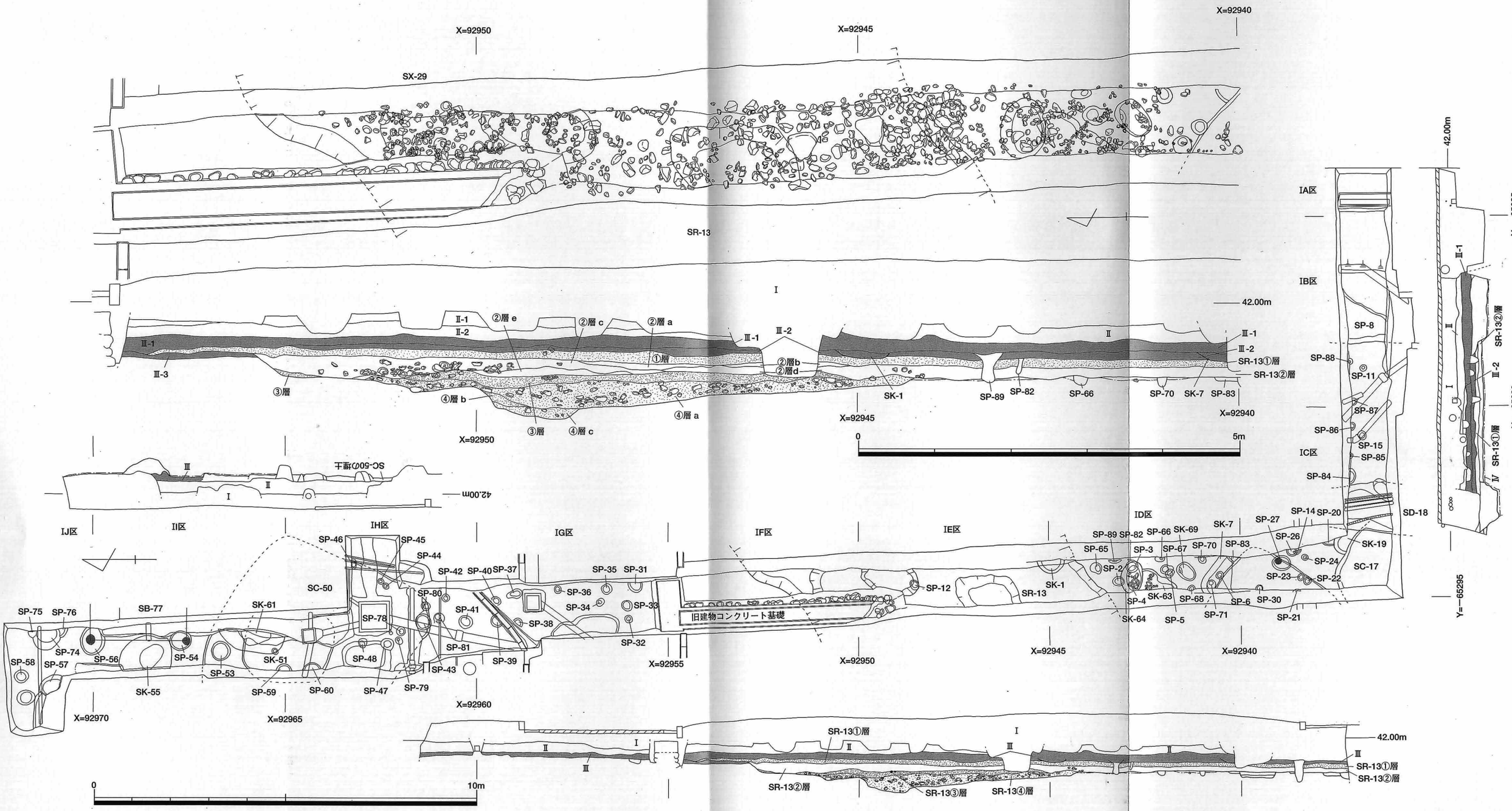

図21　00201調査（樽味遺跡７次）Ⅰ区実測図およびSR-13・SX-29実測図（縮尺 1/100、1/50）

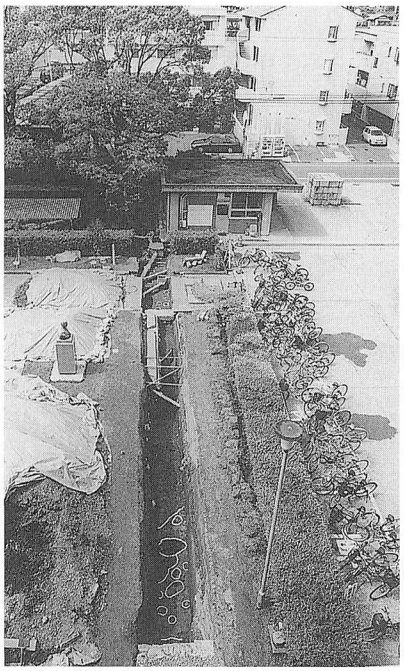

写真65　00201調査（樽味遺跡７次）
ＩＣ～ＩＪ区完掘（南から）

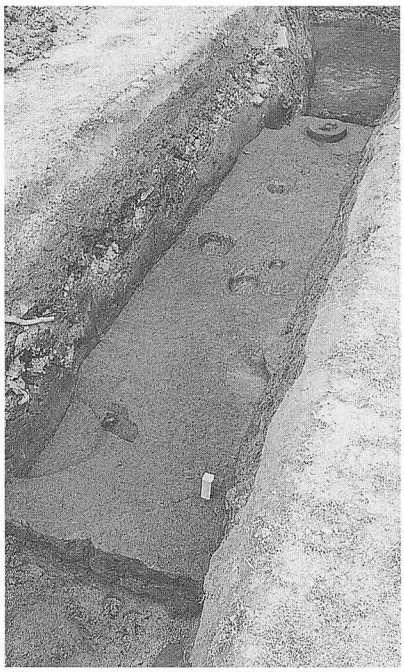

写真66　00201調査（樽味遺跡７次）
ＩＤ・ＩＥ区Ⅲ－１層
上面検出遺構（北から）

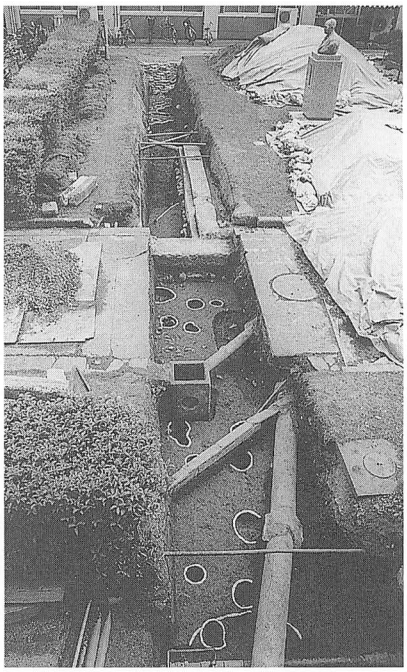

写真67　00201調査（樽味遺跡７次）
ＩＣ～ＩＧ区完掘（北から）

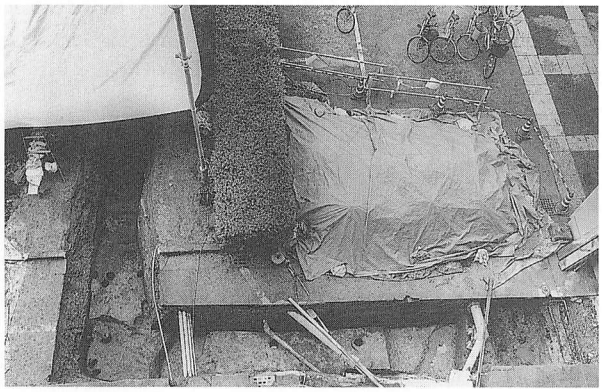

写真68　00201調査（樽味遺跡７次）
ＩＡ～ＩＣ区完掘（南から）

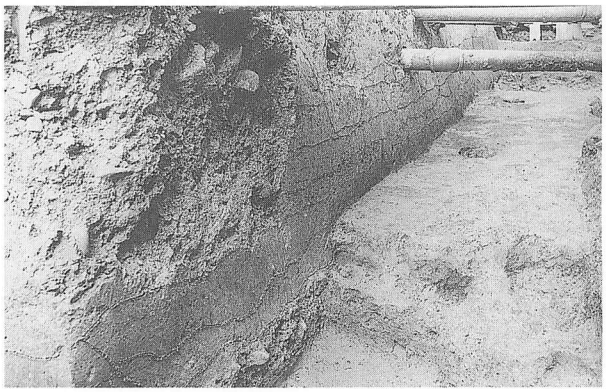

写真69　00201調査（樽味遺跡７次）
ＩＢ・ＩＣ区北壁土層（南西から）

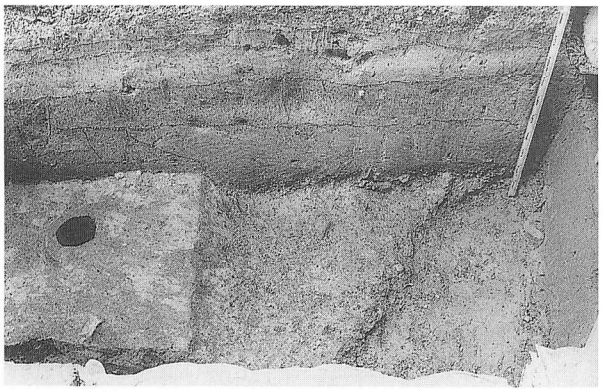

写真70　00201調査（樽味遺跡７次）
Ｉ区SD－８（南から）

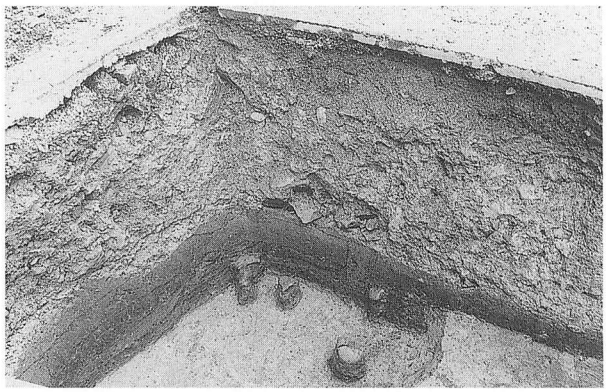

写真71　00201調査（樽味遺跡７次）
Ｉ区SC-17土層（北東から）

86・88・89がある。

その中で、SD-８・18は、ＩB区とＩC区で南北方向に延びる溝である。SD-８は、自然流路の可能性もあるが、Ⅲ-１層とⅢ-２層の層界部分から掘り込まれ、SR-13の埋土を切る。溝底には暗灰褐色砂層が幅20cm前後帯状に南北に延びる。埋土下部の砂礫層は、粗砂や細砂の薄いレンズ状のラミナが確認でき、流水があったものと考えられる（写真70)。

SD-18は、SR-13①層を除去後、SR-13②層を掘り下げ中に確認した。調査区北壁面では、SR-13①層下面から掘り込まれている。また、SC-17を切り、調査区北壁面でSK-19を切ることが確認できる。溝の断面形は逆台形で、溝幅は1.3ｍ前後、検出面からの深さは45cmほどを測る。埋土上部には、砂礫混じりの暗褐色砂質シルトの①層、暗褐色砂質シルトに薄いレンズ状の灰色細砂層を含む②層が見られ、下部には灰褐色微細砂層の③層、径３～５cmの花崗岩や砂岩の円礫が多く混じる砂礫層が堆積する。

柱穴・小穴のうち、SP-27では立柱痕跡を確認でき、SP-39の底面からは、黒色土器の比較的大きな破片２点が折り重なって出土した（写真75)。

③　古墳時代以前の遺構

ｃ類型の埋土をもつ古墳時代以前と考えられる遺構には、竪穴式住居（SC-17・28・50)、掘立柱建物(SB-77)、土壙（SK-19・51・63・64・69）および倒木痕（SK-55・61)、自然流路（SR-13)、土器溜まり(SX-29)、小穴（SP-20・24・30・54・56・59・60・65～68・70・71・78～80・83）がある。

SC-17は、ＩC区の管路が折れ曲がる部分で、SR-13②層を除去後に検出した。角が丸いやや矩形の竪穴式住居と考えられる。SD-18に切られる。埋土中から、古墳時代後期の土師器甕口縁部片や須恵器坏などを含む須恵器・土師器の細片が出土している。また、貼床部分からも、古墳時代後期の須恵器坏身口縁部片が出土している（写真71)。

SC-28は、ＩC区とＩD区の境界部に位置する隅丸方形と考えられる竪穴式住居である。SP-30が床面から掘り込まれているが、柱穴とするには小さすぎる。埋土中からは、拳大の花崗岩の円礫が多く出土するとともに、土師器甕胴部片、須恵器坏胴部片が出土。貼床部分からは、須恵器坏身の底部の大形破片が出土。

SC-50は、ＩH・ＩI区で、SP-48・SK-51などを挟んで確認できた落ち込みラインをつなぎ、一辺５ｍほどの隅丸方形の竪穴式住居を考えた。調査区壁面で、Ⅲ層の途中から、掘り込みを確認できる。床面は２～５cmほどの緩やかな凹凸に富む。床面でSP-78・79を検出したが、小さく柱穴とは考えられない。床面で検出したSK-51から弥生土器や古墳時代後期の土師器の甕胴部片、SP-48からは古墳時代後期と考えられる土師器の胴部破片が数点と、滑石製有孔円盤１点が出土した。

また、ＩI区北半部でSP-54と、ＩI区とＩJ区の境界部でSP-56を、Ⅳ層上面で確認したが、ほぼ同径の柱痕跡が確認され、近接して他に柱痕跡を持つ小穴が見あたらないので、SB-77とした。柱痕跡間は2.5ｍを測る（写真76～78)。

自然流路SR-13は当初、ＩB～ＩF区でⅢ-１・Ⅲ-２層を掘り下げ、ＩF区以南で砂礫混じりの暗灰黄色砂質シルト（後述のSR-13①層）の広がりとして確認した。それを除去した後、ＩF区中央部でⅢ-３層を切る落ち込みラインを検出した。しかし、南側では対応するラインを検出できず、Ⅲ層が自然に落ち込んだ可能性を考え、前述の砂礫混じりの暗灰黄色砂質シルト層をⅢ-１～３層、ＩF区中央部以南の落ち込みを埋める黒褐色土層をⅢ-４・５層として、10cmごとに人工的に層位を区切って調査を進めることとした。黒褐色土層を掘り下げると、ＩB～ＩD区中央部では基本層序のⅣ層があらわれ、ＩD区北端部でＩF区中央部に対応する落ち込みラインを検出できた。この幅６～７ｍほどの間は、黄灰色粗砂と大量の拳～人頭大の花崗岩・砂岩の円礫が埋積されている（写真72)。そこで、自然流路SR-13として、以後、調査を進めることとした。しかし、混乱を避けるため、それまでⅢ-２～５層に続け、黄灰色粗砂層をⅢ-５層最下部、拳～人頭大の花崗岩・砂岩からなる砂礫層をⅢ-５層下砂礫層とし、調査終了後に、以下のようにSR-13埋土①～④層に振り替えた。

①層：調査時にⅢ-２・Ⅲ-３層とした砂礫混じりの暗灰黄色砂質シルトである。ＩF区中央部より南側全面に広がり、SR-13の最上面を覆う。

②層：調査時にⅢ-４・Ⅲ-５層とした黒褐色土層。①層と同じく、ＩF区中央部より南側全面に広がる。さらに、ａ～ｅ層に分層できる。

②-ａ層：砂礫混じりの黒褐色シルト層。

②-ｂ層：薄くレンズ状に堆積する灰黄色粗砂層。

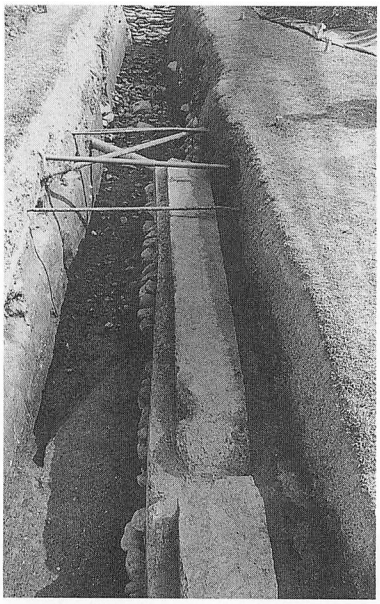

写真72　00201調査（樽味遺跡７次）Ⅰ区SR-13④層上面の礫群検出状況（北から）

写真73　00201調査（樽味遺跡７次）Ⅰ区SR-13②層中検出のSX-29（北から）

写真74　00201調査（樽味遺跡７次）Ⅰ区SR-13完掘（南から）

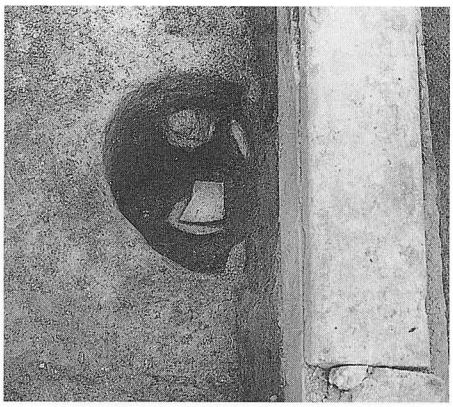

写真75　00201調査（樽味遺跡７次）Ⅰ区SP-39遺物出土状況（西から）

②-ｃ層：ＩＦ区のSR-13が南に向かって落ちる部分に堆積する黒褐色粘質シルト層。

②-ｄ層：砂礫が多く混じる黒褐色砂質シルト。灰黄色粗砂の薄いレンズ状のラミナを観察できる。

②-ｅ層：②-ｄ層と同じく、砂礫が多く混じる黒褐色砂質シルトで、灰黄色粗砂の薄いレンズ状のラミナを観察できる。

③層：調査時にⅢ-５層最下部とした黄灰色粗砂層。

④層：調査時にⅢ-５層下砂礫層とした拳～人頭大の花崗岩・砂岩の円礫からなる砂礫層で、土石流による堆積物である。

この中で、SR-13の埋土上部にあたる①・②層は、ＩＦ区より南側に広く分布する。出土遺物は古墳時代後期の遺物が圧倒的に多い一方で、古代～中世の遺物が少量混じる。当初、古代～中世の遺物は①・②層の掘り下げ中に見逃した小穴などの小規模な遺構の遺物である可能性を考えたが、②層の下面で検出したSP-26やSP-27から中世の土師器が出土することから、①・②層の堆積時期は古代～中世と判断した。

これに対して、埋土下半部にあたる③・④層は、ＩＤ区北端部～ＩＦ区中央部の幅６～７ｍほどの落ち込み内に堆積している。古墳時代後期の土師器の甕・高坏・把手、須恵器の短頸壺・坏蓋・坏身・底部破片、弥生時代後期中葉の甕底部片、砥石、緑泥片岩片など、弥生時代中～後期と、古墳時代後期の遺物が出土している。とくに、古墳時代後期の遺物が圧倒的に多く、それ以降の遺物は含まれていない。また、②-ｃ層が堆積するSR-13が南へ向かって落ちるＩＥ区とＩＦ区の境界付近では、完形に近い須恵器・土師器が集中して投棄されていた。上流部から流されてきた弥生中期土器の小片も混じるが、一括して投棄された状況なので、SX-29とした（写真73）。

こうした堆積物の分布状況と出土遺物から、SR-13は古墳時代後期に埋没する自然河道である（写真74）。SR-13は、古墳時代後期に土石流によって③・④層が堆積することで埋没し、その後、長期間、窪地状態が続き、そこに古代～中世に①・②層が堆積し、平坦な

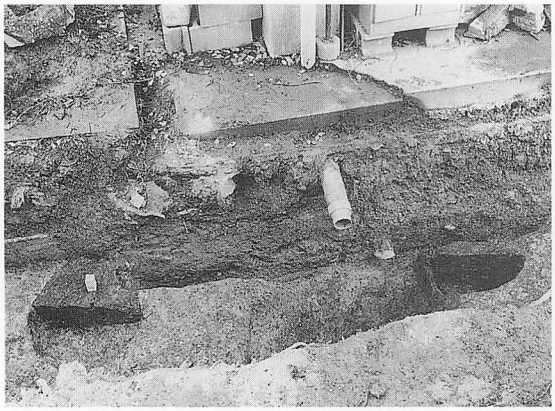

写真76　00201調査（樽味遺跡７次）Ⅰ区
SB-77（西から）

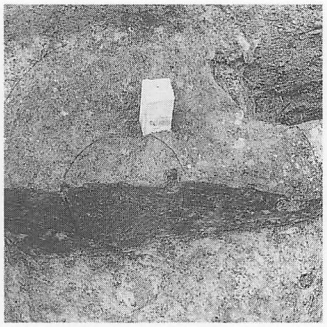

写真77　00201調査（樽味遺
跡７次）Ⅰ区SP-56
土層（西から）

写真78　00201調査（樽味遺
跡７次）Ⅰ区SP-54
土層（西から）

写真79　00201調査（樽味遺跡７次）
Ⅱ区調査状況（北東から）

写真80　00201調査（樽味遺跡７次）
Ⅲ区完掘（南西から）

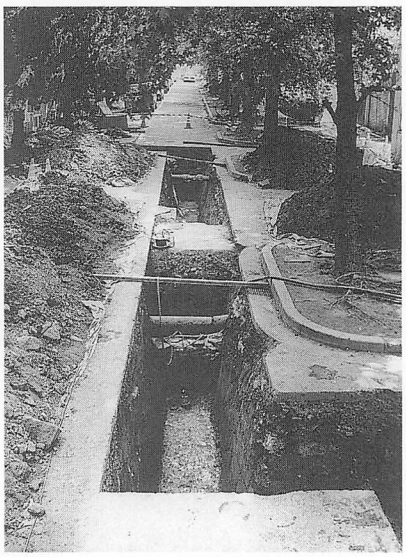

写真81　00201調査（樽味遺跡７次）
Ⅳ区完掘（東から）

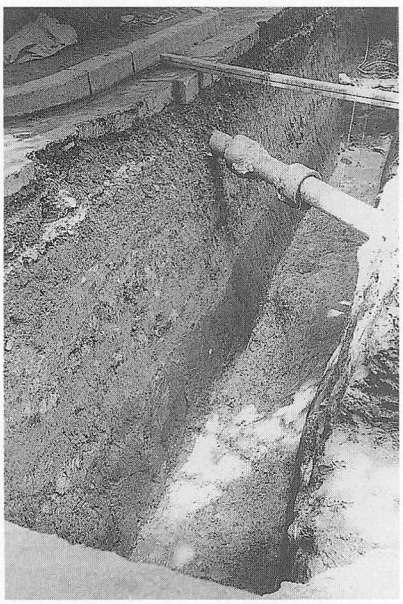

写真82　00201調査（樽味遺跡７次）
ⅣC・ⅣD区SR-101土層
（北東から）

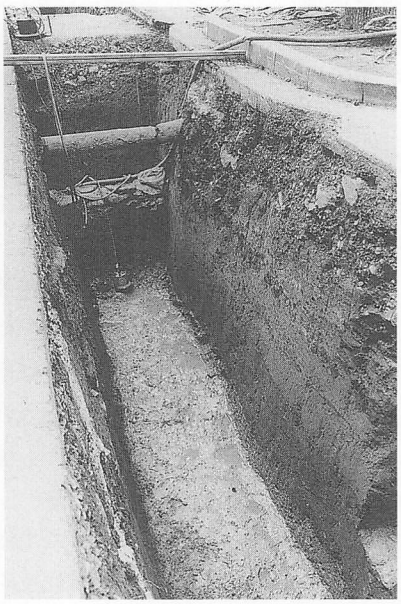

写真83　00201調査（樽味遺跡７次）
ⅣE・ⅣF区SR-102土層
（北西から）

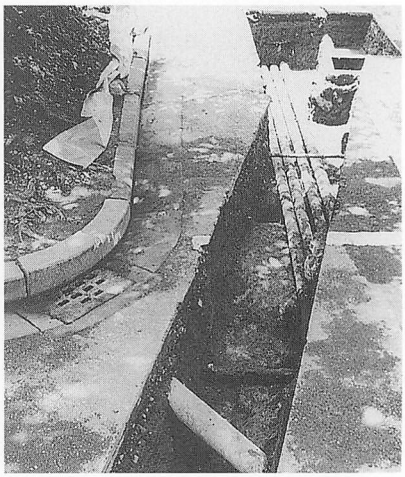

写真84　00201調査（樽味遺跡７次）
Ⅴ区完掘（北から）

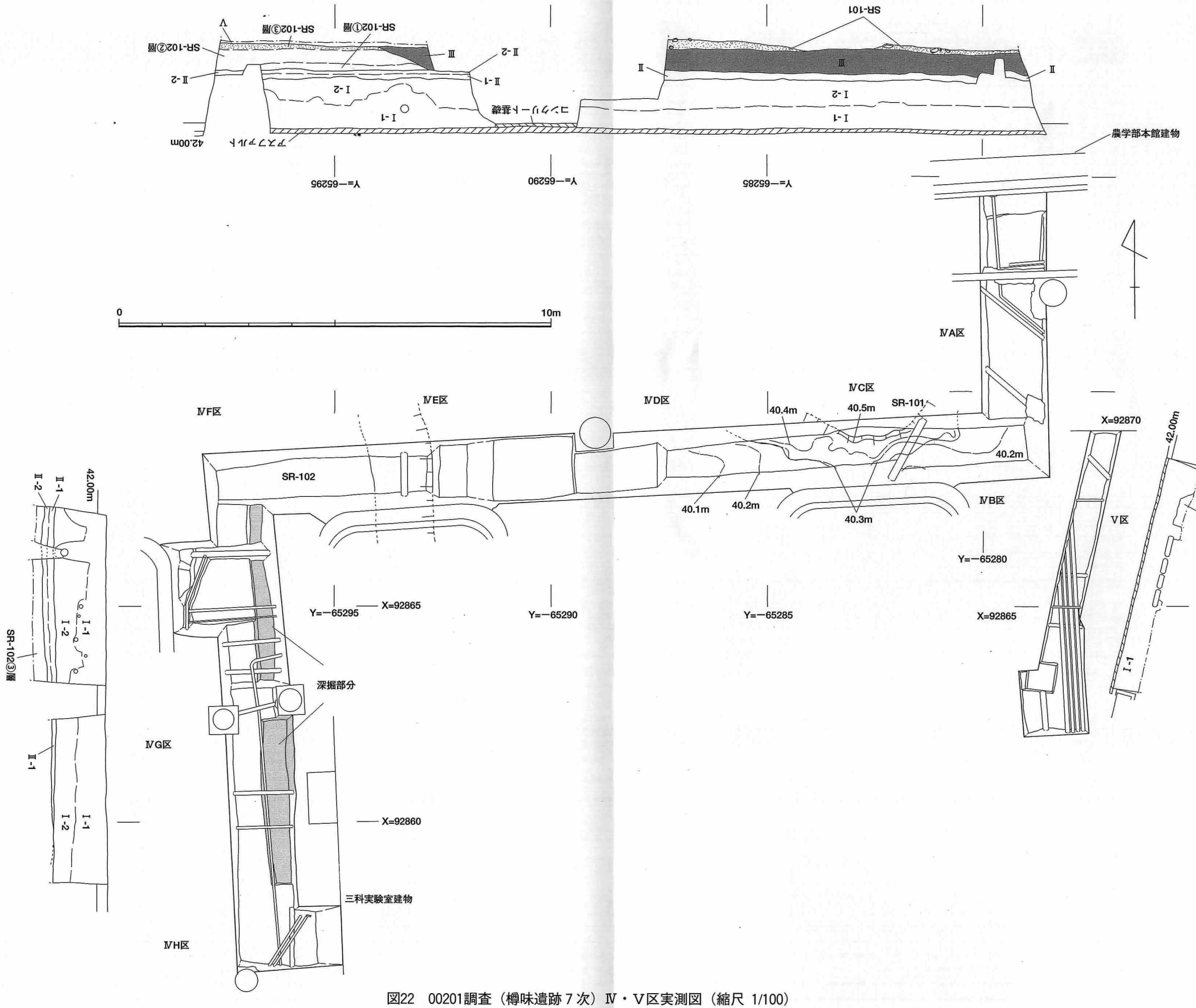

図22　00201調査（樽味遺跡７次）Ⅳ・Ⅴ区実測図（縮尺 1/100）

地形面となると考えた。

この他、d類型の埋土をもつ遺構としてSK-55・61がある。埋土の堆積状況から倒木痕と考えた。出土遺物はなく、時期不明。

（2）　Ⅱ区の概要（図20、写真79）

ⅡA区とⅡB区では、造成土層であるⅠ層が地表下65～70cmまで見られ、その下層に樽味団地が造成される以前の灰色系の近世～近代の水田層があらわれた。また、ⅡC区では既設の配管が多数見られ、地表下70cmで調査を終わった。いずれも表土層であるⅠ層の途中までに留まる。今回の工事で計画されている掘削深度は道路面から70cmで、工事による影響が及ばないが、将来予想される工事に対応するため、ⅡA区とⅡB区でⅢ層の深度や遺構の有無を確認することとした。

その結果、ⅡA区では、地表下85cmでやや灰色みを帯びた暗褐色粘質土層であるⅢ-1層、105cmで暗褐色粘質土層であるⅢ-2層を検出した。さらに、南壁に沿って、幅25cmほどを深掘りし、ⅡA区では地表下145cm、ⅡB区では125cmで、樽味団地基本層序のⅣ層があらわれた。

ⅡA区では、Ⅲ-1層から中世の土師器Ⅲ、土鍋口縁部片が出土している。Ⅲ-2層からは古墳時代後期の土師器・須恵器の破片が見られ、とくにⅢ-2層下部では、須恵器坏蓋、高杯、土師器甕の口縁部など、比較的大型の破片が集中して出土した。これに対して、ⅡB区では、Ⅲ-1層から古墳時代後期～中世の土師器・須恵器の細片が出土し、Ⅲ-2層からは古墳時代後期の須恵器・土師器の胴部片が出土するが、ⅡA区と比べて細片化したものばかりで、量も少ない。こうした遺物の出土状況と、Ⅳ層があらわれる高さに約20cmの違いがあることから、ⅡA区深掘り部分が何らかの遺構であることが考えられる。近接する樽味遺跡3次調査地点では、古墳時代後期を中心とする竪穴式住居が発見されており、Ⅲ-2層下部は、それらと同じ時期の遺構の埋土と考えられる。

ⅡC区では、土師器の胴部片1点がⅠ層中から出土したのみである。

（3）　Ⅲ区の概要（図20、写真80）

Ⅲ区では、表土剥ぎを開始すると、地表下30～40cmで給水・排水・ガス管が多数あらわれた。工事掘削が計画されている地表下70cmまで掘り下げたところ、Ⅳ層があらわれた。Ⅳ層上面を精査し遺構検出に努めたが、遺構・遺物ともに出土しなかった。

（4）　Ⅳ区の概要（図22、写真81～83）

ⅣD区西半部～ⅣE区東半部に調査区を横断してコンクリート床が貼られ、これを撤去できないため、調査を行ったのは、ⅣB区～ⅣD区東半部と、ⅣE区西半部～ⅣF区である（写真81）。

表土剥ぎの時点でのⅣB区東端の深掘りでは、地表下125cmでⅡ層があらわれた。ⅣG区で近代陶器片、古墳時代後期の土師器・須恵器の胴部片が数点出土。また、地表下140cmでⅢ層があらわれた。ⅣB区～ⅣD区東半部のⅢ層下では、北から南に向かって落ち込むⅣ層を検出した。Ⅳ層の落ち込み部分には、15～25cmの厚さで暗褐色粗砂層が堆積している。自然流路と考え、SR-101とした（写真82）。古墳時代後期の須恵器甕胴部片・土師器甕の胴部片が10片程度出土し、当該期に埋没するものと考えられる。

一方、ⅣE区西半部～ⅣF区では、Ⅲ層を切り込む自然流路SR-102を検出した。流路底は基本層序のⅤ層に対応する砂礫層に達する。Ⅲ層上面から流路底までは、ⅣF区西端で30cmを測り、ごく緩やかに西に向かって深くなる（写真83）。埋土は①～③層に分層できる。ⅣF区の②層下部から、古代末～中世前期の土鍋の口縁部片をはじめ古墳時代の須恵器や土師器の細片、ⅣE区の②層と③層の層界部から、古代末の土師器椀・古墳時代須恵器坏蓋天井部の比較的大型の破片が出土している。最下層の③層の砂礫層中からは、器面の荒れが著しい土師器細片が1点出土したのみである。古代末～中世前期に埋没する自然流路である。

（5）　Ⅴ区の概要（図22、写真84）

Ⅴ区では、地表下60cmまで掘り下げたところ、多くの管路があらわれた。工事で掘削される深度は地表下100cmであるが、近接するⅣB区の土層観察では、地表下120cmまでⅠ層の表土である造成土層が続くので、慎重工事を行うことを依頼し、調査を終了した。遺物は出土していない。

3　調査のまとめ

今回は、細長い管路部分と限られた範囲の調査であったが、これまで点的な調査しか行われていなかった樽味団地西半部における遺跡の分布の実態を検討できるデータを得ることができた。

まず、Ⅰ区では古墳時代後期、古代後半～中世前期、近世以降の数多くの遺構、Ⅱ区では古墳時代後期の遺構と考えられる落ち込み、Ⅳ区では古墳時代後期と古

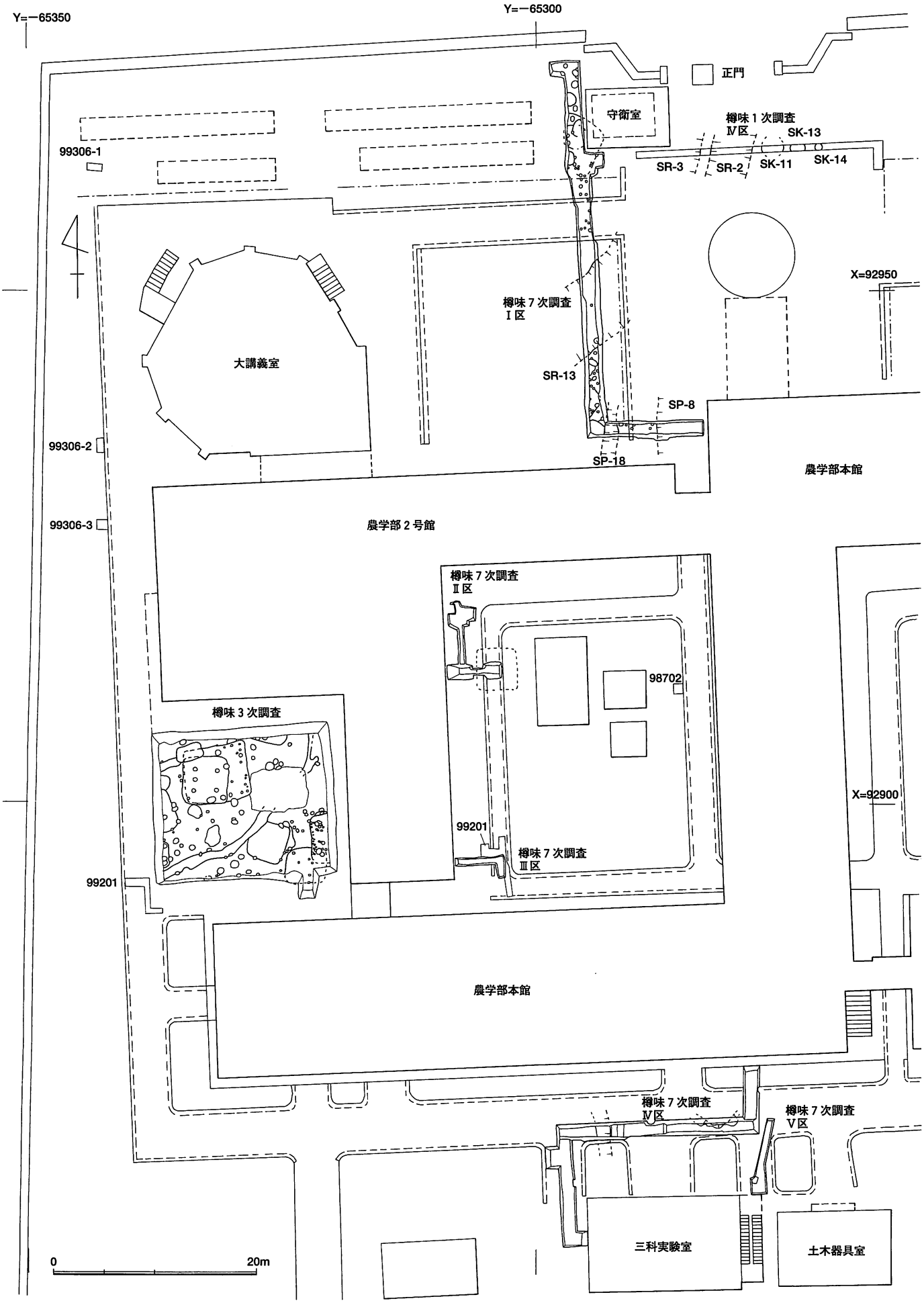

図23　樽味団地北西部の検出遺構分布図（縮尺 1/500）

代後半～中世前半に埋没する自然流路を確認できた。遺跡は、樽味団地を越えて、北側の樽味立添遺跡、西側の樽味高木遺跡や樽味四反地遺跡まで、面的に連続して拡がることが確実視される。

とくに、古墳時代後期には、ほぼ同時期の竪穴式住居や掘立柱建物などが、今次調査区だけではなく、樽味遺跡３次調査や、樽味立添遺跡、樽味高木遺跡でも確認され、東側に位置する１次調査Ⅳ区では、古墳時代後期に埋没するSR-２・３が発見されている。この中で、SR-２・３は、埋積土が灰色砂礫土であること、遺物がそれほど摩滅していないことから、Ⅲ～Ⅳ層を切り込みながら一時的に流路を変更しながら流れていたことが指摘されている。今次調査Ⅰ区で確認できたSR-13も同様な堆積状況で、これに対応する自然流路と言える（図23）。

さらに、古代後半～中世前期には、Ⅰ区SR-13が埋没した窪地に砂礫混じりの暗灰黄色砂質シルトが埋積し、平坦な地形面が形成される。この土層は、ほぼ水平に堆積し、窪地に自然堆積する土層とは考えられず、水田層である可能性が高い。　（田崎）

00202　（城北）情報教育棟新営工事に伴う調査（文京遺跡25次調査）

調 査 地 点　松山市文京町３番
　　愛媛大学城北団地（図１）
調 査 面 積　1,022㎡
調 査 期 間　2002年６月１日～12月18日
調査の種別　本格調査
調 査 担 当　吉田広・三吉秀充
依 頼 文 書　施設部施設部長発事務連絡
　　（平成14年４月５日付）

１　調査にいたる経緯

総合情報処理センター北側に、情報教育棟が新営されることとなった。総合情報処理センター新営時の文京遺跡18次調査（調査番号：99802）では、古代末から中世にかけての水田遺構が確認されており、情報教育棟新営地点においても、この水田遺構の広がりが予測され、情報教育棟新営地全域を対象として、事前全面調査を行うこととした。文京遺跡25次調査（調査番号：00202）である。

２　調査の概要

調査地点は、文京遺跡18次調査北側に連続し、調査面積は1,022㎡。

城北団地基本層序であるⅠ・Ⅱ層を重機で取り除いた後、以後手作業で掘り下げを行った。Ⅰ層は地表下150cm前後まで及び、一部は練兵場時代の演習用塹壕で深く掘り返され、演習用薬莢などが出土している。Ⅱ層は近代の遺物を含む水田層で、浅黄色からにぶい黄色砂質土。調査区東壁で30cm前後の厚さがあり、以下の中世水田層と土層的には連続する。

近代の遺物を含まなくなり、土質もややしまり始めるのが中世以前の水田層で、黄褐色砂質～シルト質土。先の18次調査で確認していた３枚の水田面を、ほぼ全域で確認した。

水田層以下は、下層水田の床土となるシルト質土層があり、10世紀後半までの遺物を含む。さらにその下に、砂・砂礫層が厚く堆積し、一部ではⅣ層の高まりを認められるものの、調査域の大半は、建物基礎掘削深度である地表下300cmにいたっても、まだ遺物を含む砂・砂礫層が続く。

以下、３枚の水田遺構と、その下の自然流路と旧地形について、概述する。

（１）　水田遺構

水田遺構は、18次調査で確認した上層・中層・下層の３枚がやはり今回の調査でも確認できた。

①　上層水田（図24、写真85）

13世紀頃の水田遺構で、調査区全面に遺構が広がる（SS-１～４・６～14・17～20・24～40・42・43，SX-15，SD-５・23・41）。ただし、練兵場時代の塹壕などの攪乱が多く残ること、Ⅱ層との分離が一部不分明なこと、加えて水田面の比高差が調査区内で15cm程度と小さいこともあって、水田の畦畔が明確でなく、並びが不整。南側18次調査検出の水田遺構と整合しない箇所もある。

DT区以東の調査区東部は、南北に階段状に水田が

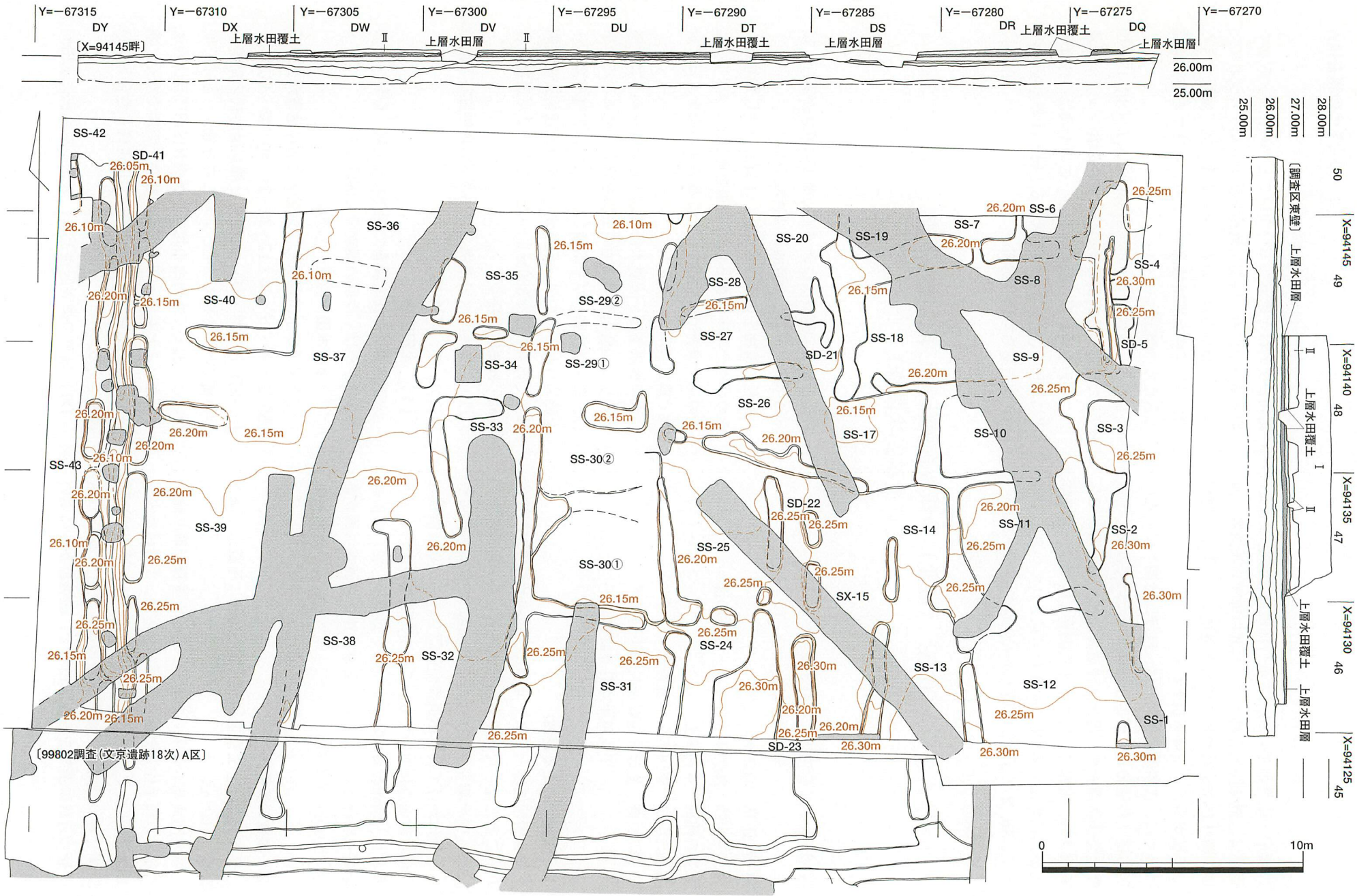

図24　00202調査（文京遺跡25次）上層水田（縮尺 1/200）

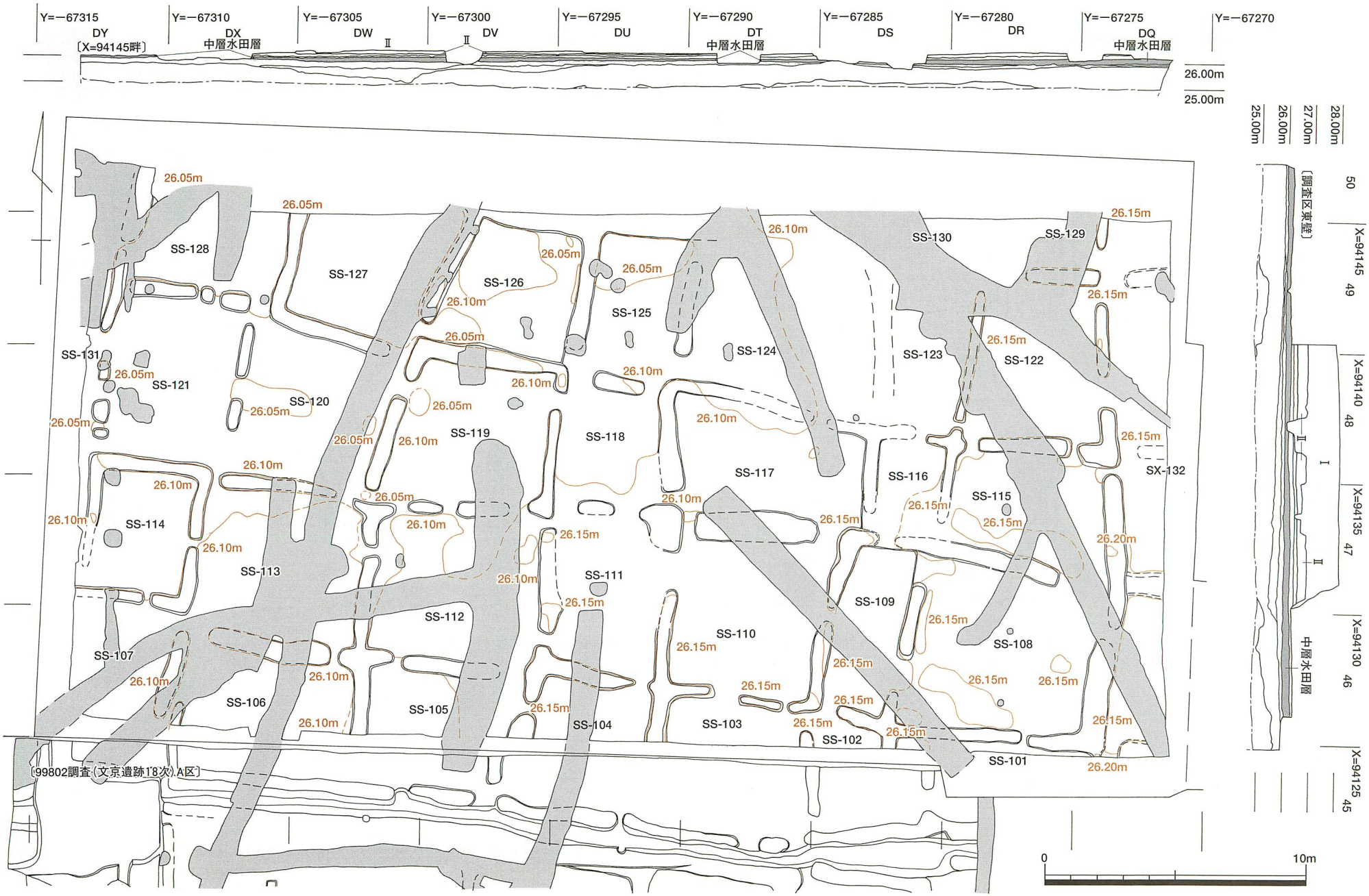

図25　00202調査（文京遺跡25次）中層水田（縮尺 1/200）

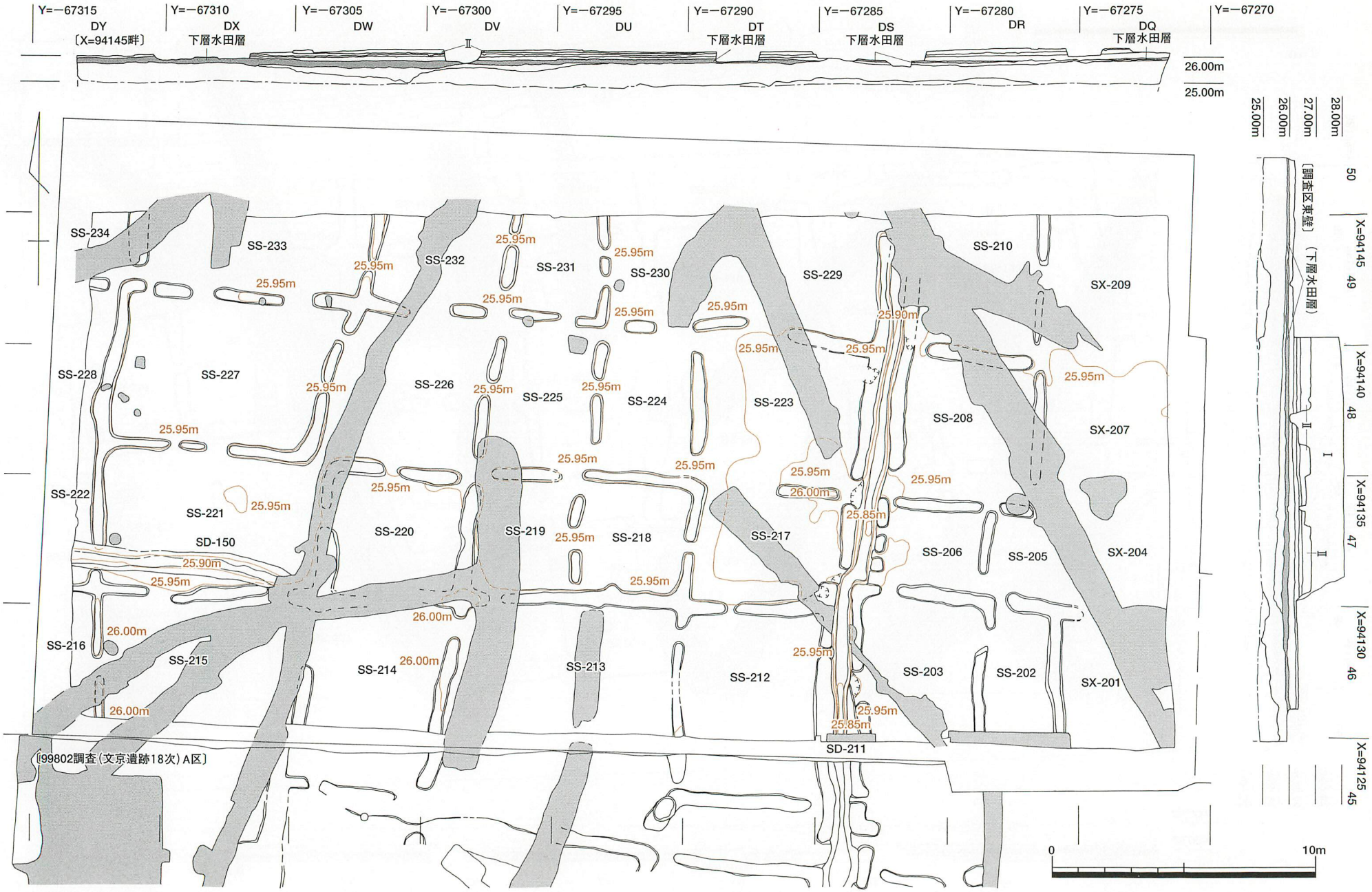

図26　00202調査（文京遺跡25次）下層水田（縮尺 1/200）

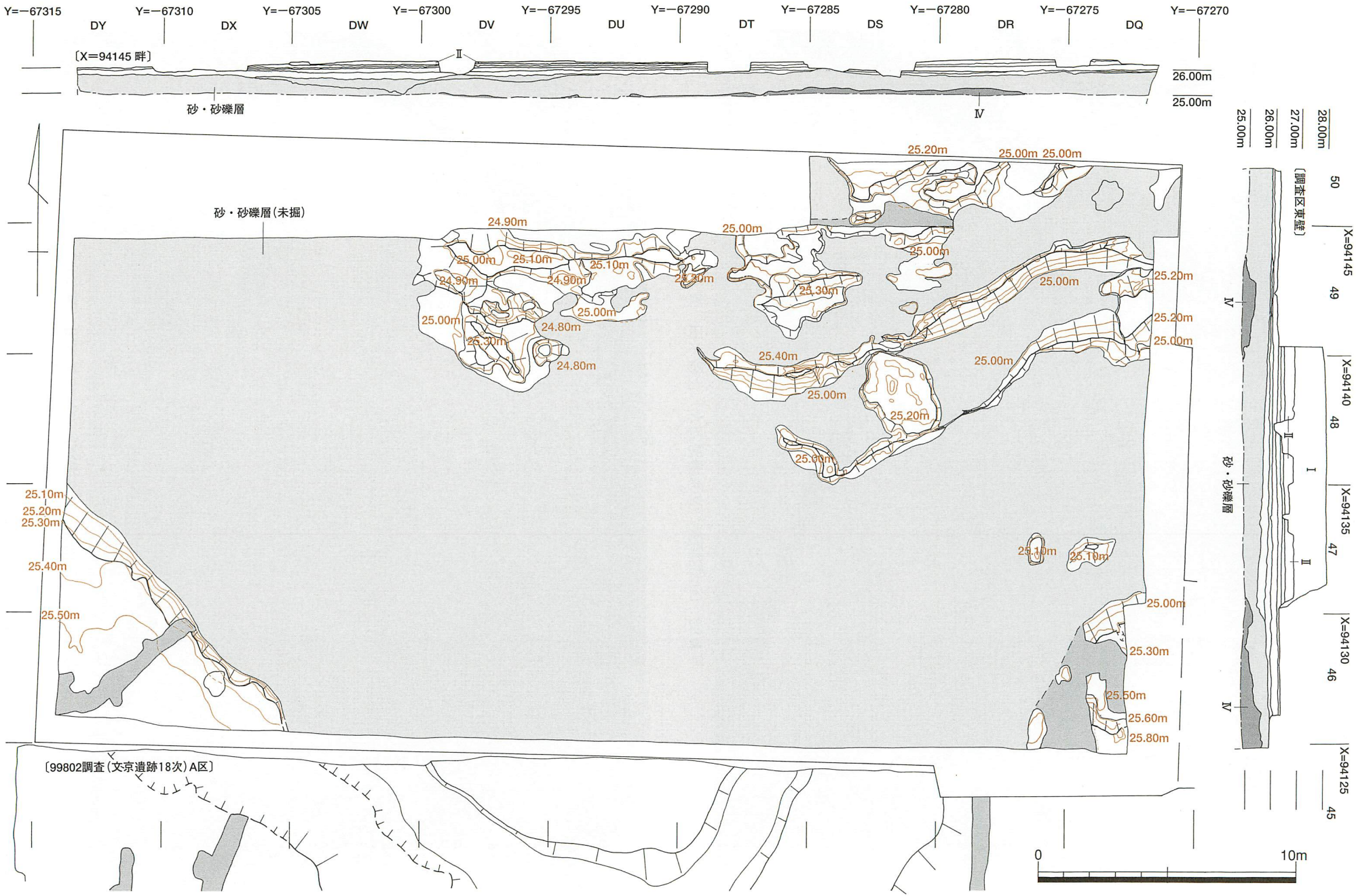

図27　00202調査（文京遺跡25次）水田下の自然流路（縮尺 1/200）

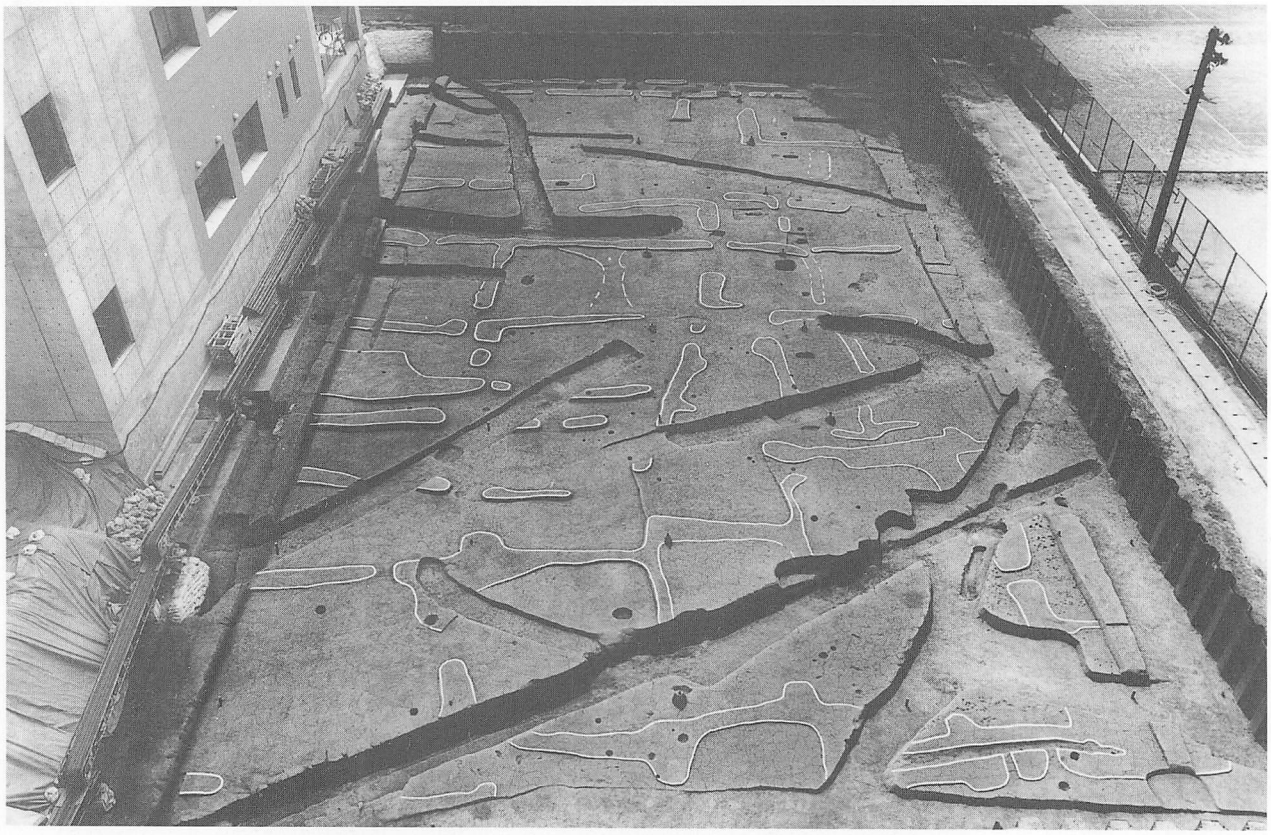

写真85　00202調査（文京遺跡25次）上層水田（東から）

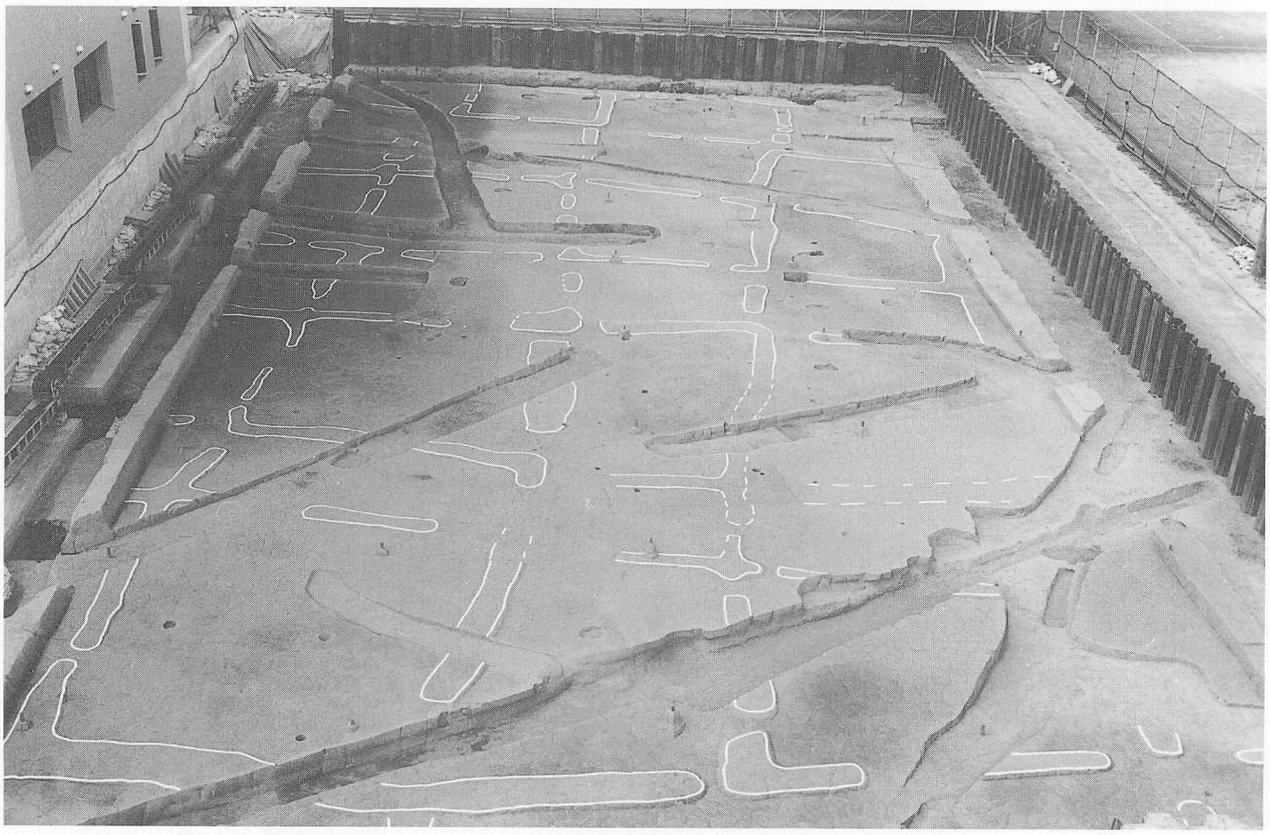

写真86　00202調査（文京遺跡25次）中層水田（東から）

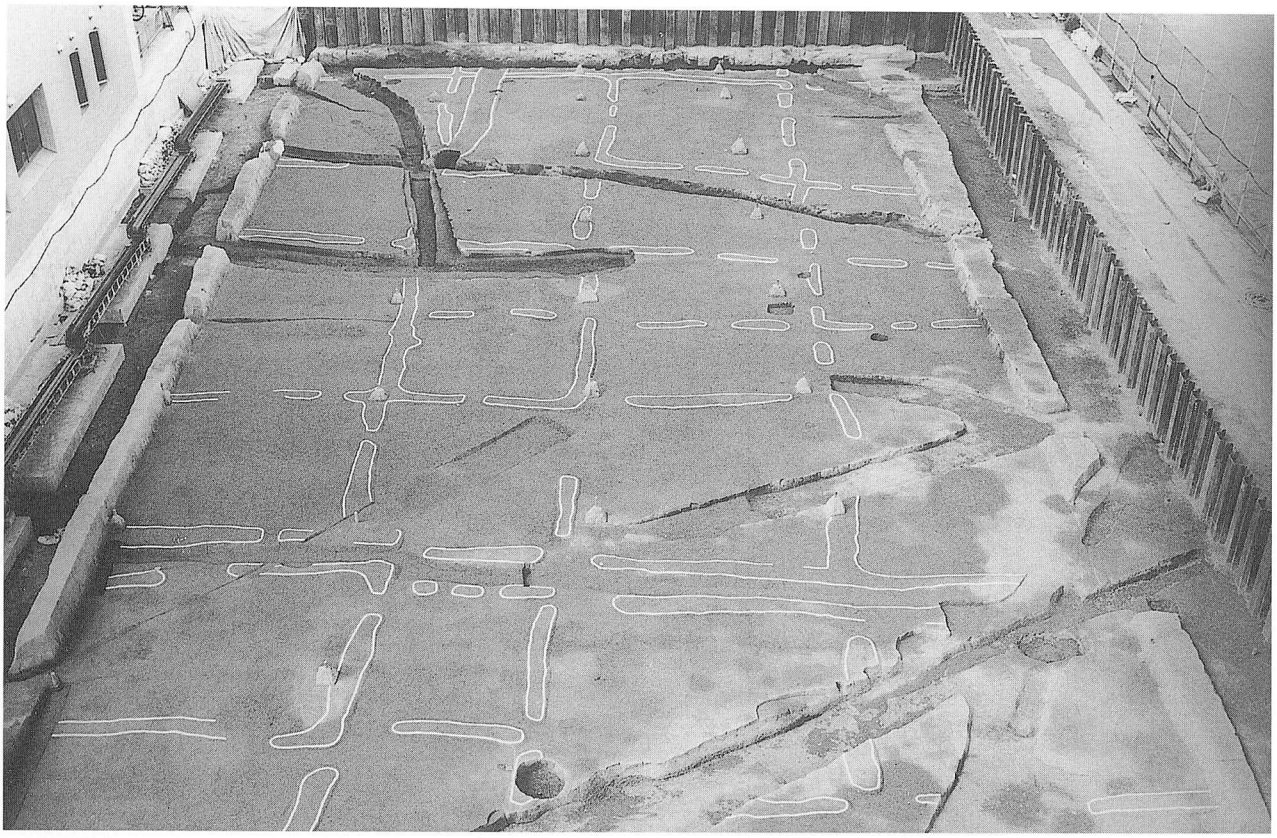

写真87　00202調査（文京遺跡25次）下層水田（東から）

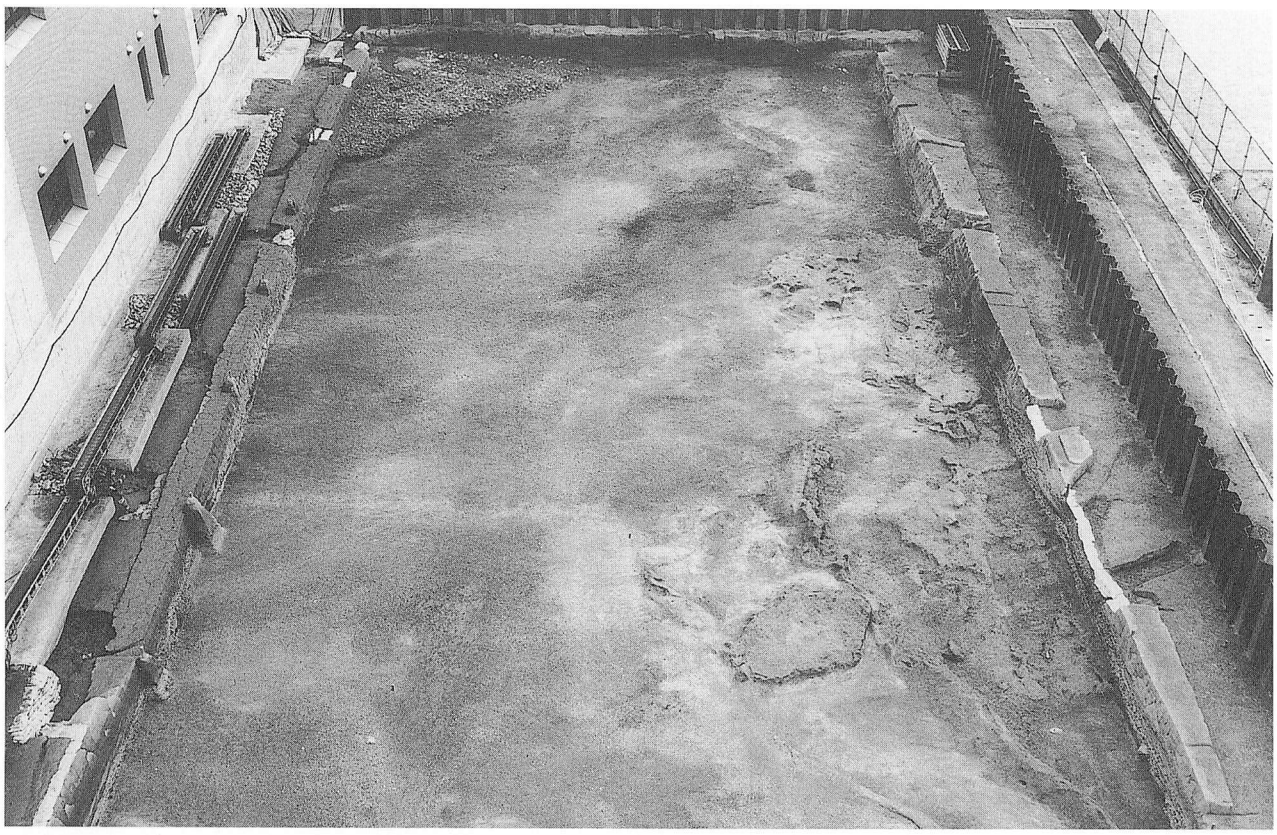

写真88　00202調査（文京遺跡25次）水田下の自然流路（東から）

並ぶとともに、斜行する東西畔や、幅広の畔もあって、水田の並びが一定しない。調査区中央部のDU・DV区で南北方向に並びが整うものの、DW・DX区では、畦畔が明確でない。DW・DX区を除いて、水田１枚は10～25㎡と小区画である。

一方、水路はいずれも南北方向のもので、18次調査で見られた、等高線に沿うような東西方向の基幹水路は認められない。また、調査区西端のSD-41は調査区を南北に横断しているものの、SD-5・23は調査区内に留まっている。

② **中層水田**（図25、写真86）

12世紀から13世紀初め頃の水田で、調査区全面に水田が営まれる（SS-101～131、SX-132）。ただし、調査区内で中層水田に伴う水路は見出せず、水田面の比高差も10cm程度と小さい。水田はやや斜行するものの、調査区内で南北に５列、東西に９列と整然と連なる。水田南北幅は一部で減じる部分があるが、ほぼ５ｍ前後で一定する。対して、東西幅は５ｍ前後を平均としながら、2.5～７ｍと差が大きい。水田１枚も９～40㎡と小区画ながら、やや格差がある。

③ **下層水田**（図26、写真87）

11世紀の水田で、水田の広がりは調査区全域には及ばない（SS-202・203・205・206・208・210・212～234、SX-201・204・207・209、SD-211）。とくに、DS区の南北水路SD-211以東は、耕作土および床土がかなり砂粒を混じえ保水性が低い。それでも畦畔による区画が認められた範囲は水田としたが（SS-202・203・205・206・208・210）、当初水田の広がりを予測していた調査区東端部（SX-201・204・207・209）は、水田耕作土が存在しないとして、水田外とした。

SD-211以西は、北東部で一部保水性の低い箇所が見られるものの、中層水田同様の整った配列を呈する（SS-212～234）。調査区内での比高差は10cm以下。やや斜行するが、調査区内で南北に幅５ｍ前後で一定した４列、東西に幅３～８ｍとやや差のある６列を確認できる。結果、水田１枚は小区画ながら、15～40㎡とやや開きがある。

なお、中層水田検出面の下、下層水田面検出途中で、調査区西寄りで東西方向の水路１条（SD-150）を検出している。先の18次調査でも、中層水田と下層水田の間で遺構を検出しており、明確な面として捉えることができなかったが、もう１枚の水田遺構が存在したと考えられる。

（２） **水田下の自然流路**（図27、写真88）

水田遺構の下層は、下層水田を営む条件のシルト質土の堆積が、調査区東部を除いて、平均20cm程度認められた。出土遺物から10世紀後半の堆積とみられる。以下は砂質土あるいは砂・砂礫堆積である。最上層を細かな砂層堆積が覆い、その下は主に砂・砂礫堆積が占め、人頭大の円礫も多く含む。とは言え両者の堆積時間に大きな差はなく、ともに最新相の遺物は９世紀初頭を示す。他に、縄文時代中期から、古墳時代中期を除いて、ほぼ連綿と遺物を包含するが、８世紀代の遺物が目立ち、布目瓦や赤塗土師器、須恵器円面硯、さらには奈良二彩などを含むことが特筆される。

このような古代の自然流路は、調査区の大半にわたって、工事掘削深度である地表下300cmまで続き、自然流路の底までは完掘していない。Ⅳ層と認められる堆積は、調査区東北部で、南に傾斜するⅣ層上面を東北東－西南西に延びる低平な尾根線状に確認している。そして、調査区中央部で屈曲して東南東－西北西に転じ、DW区辺りで北壁に消えていく。他方、調査区南東隅部でもⅣ層の高まりが認められる。また、調査区南西部では、人頭大の川原石の堆積が、北側に傾斜をもった高まりを形成する。その直上には、ブロック状のⅢ層とⅣ層が堆積し、しまりもやや強い面をなす。

以上の状況から、古代において自然流路が、東北東から西南西方向に調査区内に流入し、調査区中央で屈曲して、東南東から西北西方向へと流れを転じていたと復元することができる。

3　調査のまとめ

今回の調査では、旧石手川扇状地上を走る網の目状の自然流路が埋没し、水田として利用されていく様を具体的に復元できる成果を得た。

まず、調査範囲内の大部分は、地表下300cmでもまだ９世紀初頭の河川堆積が続き、それ以前はさらに深い谷を形成していたことが窺える。したがって、南側の微高地上に弥生時代の大集落が営まれた頃は、比高差２～３ｍに及ぶ谷であり、しかも上層の砂・砂礫堆積からして、水流も安定していないような状態であったことが推測される。すると、このような調査所見による限り、大規模な弥生時代集落の食料を賄えるだけの開田を、この谷部に求めることはできない。

河川の水流が安定し、水田の床土となり得るシルト質土が堆積するのは、ようやく10世紀後半頃である。

以降、11世紀から13世紀にかけて３枚の小区画水田が営まれていく。これらは、先の18次調査で確認された３枚の水田に相当するが、今回の調査区内では、いずれの水田面も比高差は小さく、東西方向の等高線に平行するような水路も見られない。したがって、今回の調査地点は、水田が営まれた頃は谷状の凹地内でも、南側微高地から一段落ち切った、比較的平坦なところに位置していたものと考えられる。ただし、北側の文京遺跡22次調査（調査番号：00005）での所見からは、今回の調査地点が谷底平坦面となるのではなく、さらにもう一段深い窪地が北側には控えていることが窺える。（吉田・三吉）

00203　（城北）情報教育棟用地埋蔵文化財調査に伴う土木工事に伴う調査

調 査 地 点　松山市文京町３番
　　愛媛大学城北団地（図１）
調 査 期 間　2002年５月15・17日
調査の種別　立会調査
調 査 担 当　吉田広・三吉秀充
依 頼 文 書　施設部施設課長発事務連絡
　　（平成14年５月14日付）

1　調査にいたる経緯

文京遺跡25次調査（調査番号：00202）に先行して、シートパイル打ち込み作業を、南辺以外の調査区周囲に行うこととなった。ところが、調査区北辺には、ほぼこれに平行して既設雨水排水管路があり、この管路の正確な位置を特定して、作業を進める必要が急遽生じた。既設管路の再掘削ではあるが、２ｍを超える深度でもあるため、埋蔵文化財調査室では、掘削に際し

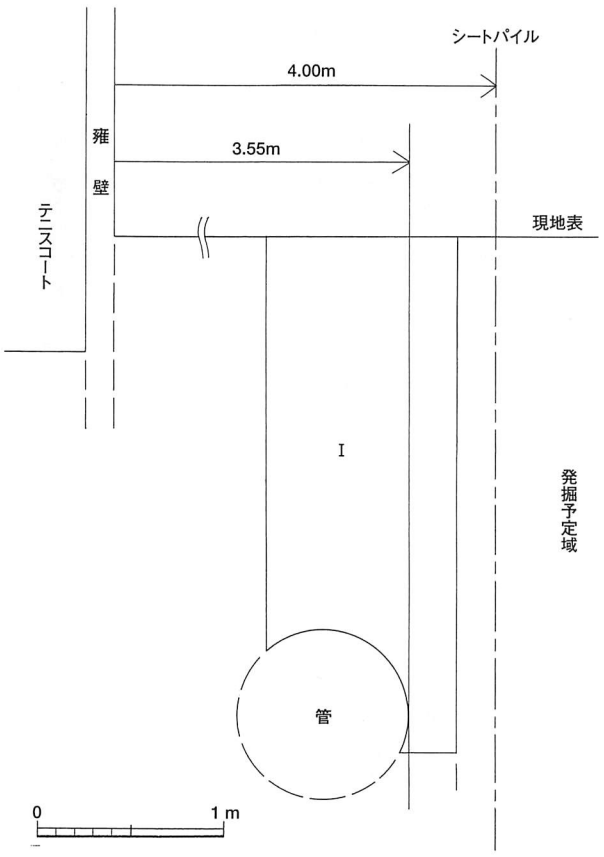

図28　00203調査土層柱状模式図（縮尺 1/40）

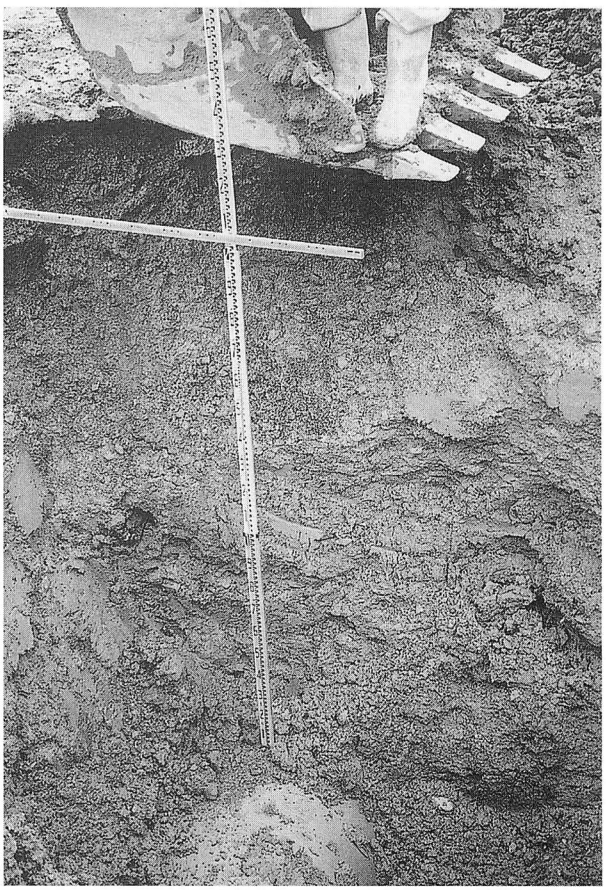

写真89　00203調査地点東壁土層（西から）

て立会調査を実施することとした。

2　調査の記録（図28、写真89）

25次調査の調査区に基づき、その北西隅部に位置する桝に連なる管路を、発掘調査区北東隅部で確認する掘削を行うこととなった。

結果、調査地点においては、北側テニスコート擁壁から3.55mの地点で既設管路の南端を検出し、管上端の深度は現地表下205cmであることが判明した。

3　調査後の対応

シートパイル打ち込み位置は、テニスコートの擁壁から4m南になり、打ち込みに要する余掘り幅を勘案しても、既設管路に影響ないものと判断できたため、以後のシートパイル打ち込み作業に対して慎重工事を依頼して、調査を終えた。（吉田）

00204（城北）総合研究棟等改修工事に伴う調査（文京遺跡26次調査）

調 査 地 点　松山市文京町3番
　　愛媛大学城北団地（図1）
調 査 面 積　144.7m²
調 査 期 間　2002年7月19日～8月9日
調査の種別　本格調査
調 査 担 当　田崎博之
調 査 補 助　宮崎直栄
依 頼 文 書　施設部施設課長発事務連絡
　　（平成14年4月25日付）

1　調査にいたる経緯

工学部の一部移転に伴って、旧工学部本館を総合研究棟とする改修工事が行われることとなった。旧工学部本館は、昭和38～40年の建設時に、弥生時代後期を主体とする遺物が採集され、附属図書館2階ホールに出土遺物が展示されている。また、南側の地域共同研究センターやベンチャー・ビジネス・ラボラトリー建設に伴う文京遺跡13・20次調査（調査番号：99506・99910）など、周辺では弥生時代～中世の遺構と遺物が出土している。

改修工事にあたっては、電気・通信・排水の管路の敷設計画がたてられており、埋蔵文化財への影響ができるだけ少なくなるように、施設部との協議を重ねた。しかし、一部の管路や枡部分では、掘削深度を浅く調整できず、これらを文京遺跡26次調査（調査番号：00204）として、全面調査することとした。

2　調査の概要

今回の調査では、旧工学部本館建物へ電気・通信・排水管を引き込むため、調査地点は建物北側で4箇所、南側で2箇所と点在する。そこで、Ⅰ～Ⅵ区の調査区を設定し、城北団地全域で日本測地系平面直角座標系Ⅳ系を利用して設けた5m方眼の区割によって調査を進めることとした（図29）。

表7　00204調査（文京遺跡26次）遺構一覧

地区	遺構の種別・数量
Ⅰ区	竪穴式住居　1　(SC-2) 掘立柱建物　1　(SB-11) 土壙　3　(SK-1・4・27) 炉　1　(SF-22) 柱穴・小穴　22 (SP-3・7・8～10・12～16・18～21・23～26 28・29・31・33)
Ⅱ区	竪穴式住居　1　(SC-50) 土壙　3　(SK-41・44・45) 溝　3　(SD-53～55) 柱穴・小穴　8 (SP-42・43・46～49・51・52)
Ⅲ区	土壙　1　(SK-61) 柱穴・小穴　3　(SP-62～64)
Ⅳ区	遺構は出土していない。
Ⅴ区	竪穴式住居　1　(SC-89) 土壙　7 (SK-74・78・79・91・92・95・97) 溝　1　(SD-71) 柱穴・小穴　20 (SP-72・73・75～77・80～88・90・93・94 96・98・99)
Ⅵ区	土壙　1　(SK-106) 柱穴・小穴　6　(SP-101～105・107)

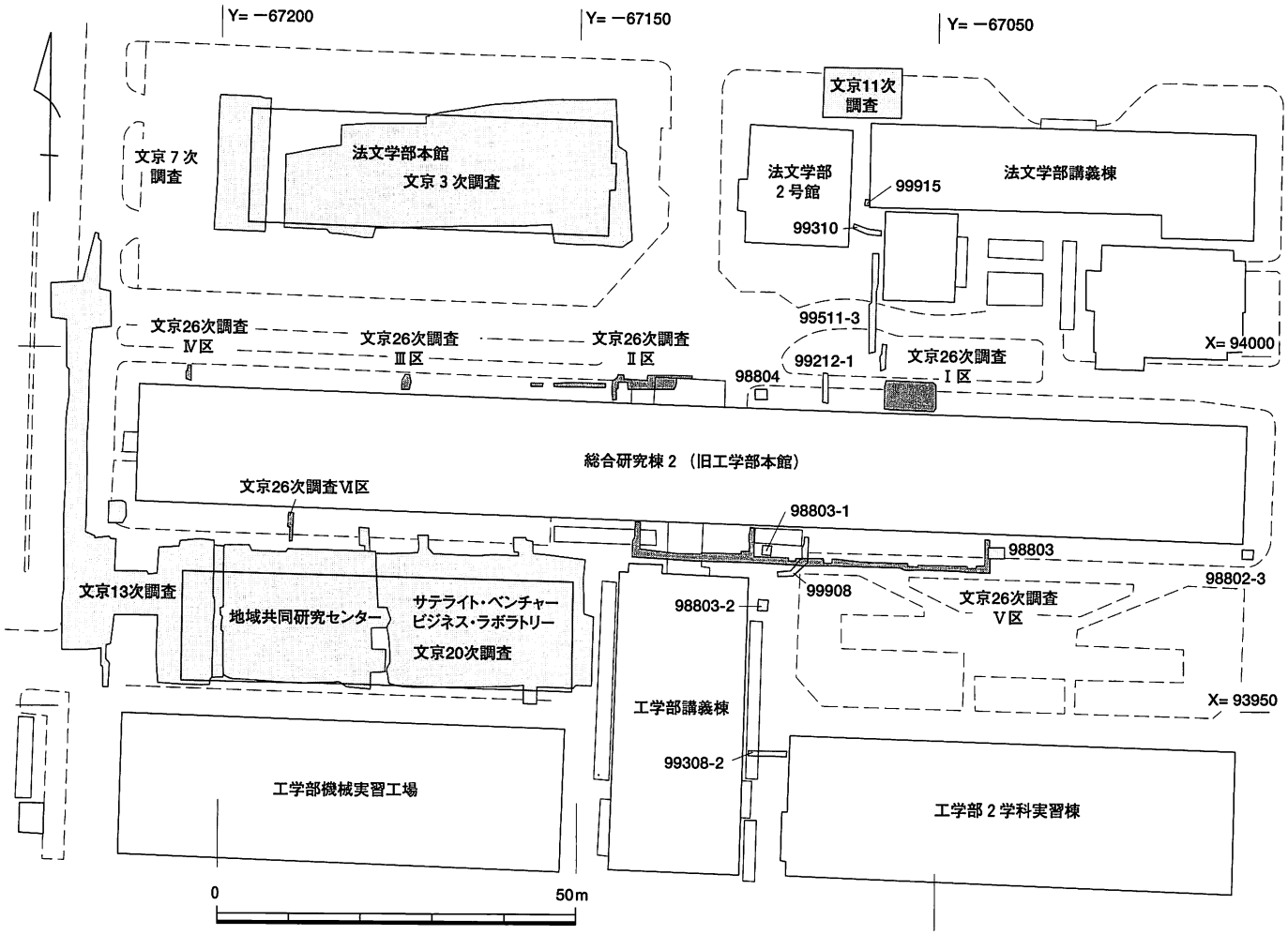

図29　00204調査（文京遺跡26次）調査位置図（縮尺 1/1,000）

Ⅰ区：旧工学部本館建物北側の東よりの共同溝から管路を引き込む部分で、CI・CJ-19・20区に位置する。

Ⅱ区：建物北側のほぼ中央の管路部分で、CO～CT-19・20区に位置する。

Ⅲ区：建物北側の西よりの管路部分で、CW-19・20区に位置する。

Ⅳ区：建物北西部の管路部分で、DC-19・20に位置する。

Ⅴ区：建物南東側に計画された管路部分で、CG～CQ-14～16区に位置する。

Ⅵ区：建物南西部で引き込まれる管路部分で、CZ・DA-15・16区に位置する。

今回のいずれの調査地点でも、城北団地基本層序のⅠ～Ⅴ層の関係を確認できた。しかし、個々で基本層序を構成する土層群の特性は異なるため、調査区ごとに、その詳細を記すこととした。なお、今回の調査で出土した遺構の埋土を観察すると、以下のａ～ｃに分類できる。

ａ：やや灰色みを帯びる暗褐色土の埋土。

ｂ：砂礫や小礫が混じる黒褐色の砂質シルトもしくは砂質土の埋土。

ｃ：黒褐色の砂質シルトもしくは砂質土であるが、ｂと比べて、砂礫や小礫はほとんど混じらず、場合によっては部分的に粘性を帯びるシルトの埋土。

文京遺跡13次調査に代表される周辺の調査成果から、ａは中世、ｂは古墳時代後期、ｃは弥生時代～古

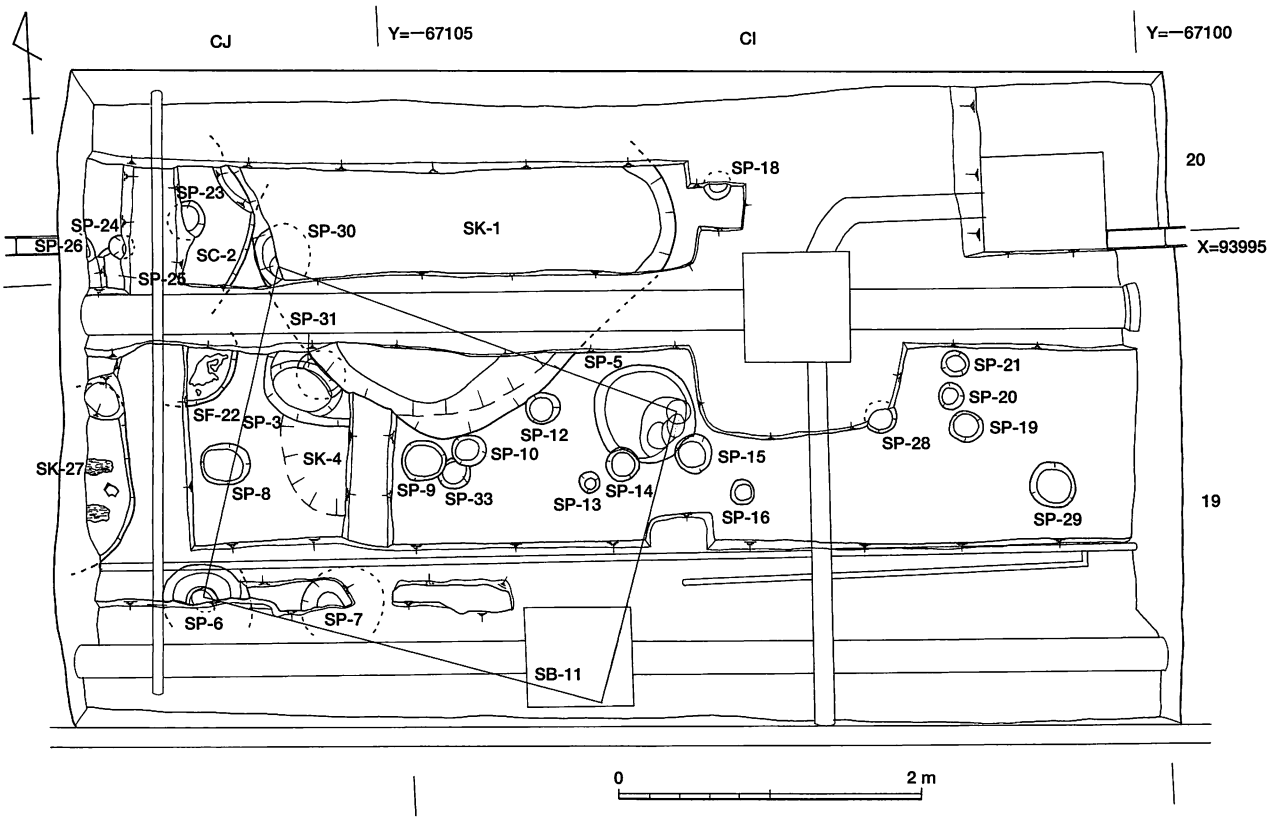

図30　00204調査（文京遺跡26次）Ⅰ区全体図（縮尺 1/50）

墳時代中期の遺構と考えられる。また、cの埋土をもつ遺構は、出土遺物から弥生時代中期後葉～後期である可能性が高い。

今回の調査では、調査範囲が狭く、既設の管路などによる攪乱が著しいが、比較的多くの遺構が出土した。Ⅰ区では1～33、Ⅱ区では41～52、Ⅲ区では61～64、Ⅴ区では71～99、Ⅵ区では101～107の遺構番号を与え、これに遺構略号を冠して種別を示した。ただし、Ⅰ区17・30・32号遺構は、遺構検出時にⅣ層上面に染み込んだⅢ層部分を誤認したもので、欠番とした（表7）。

（1）　Ⅰ区の遺構・遺物（図30、写真90～96）

Ⅰ区では、地表下50cmでⅡ層、65～70cmでⅢ層があらわれた。Ⅱ層はにぶい黄褐色砂質土で、径3～5㎜の小礫が多く混じる。下部ほどきめが細かくなる。Ⅲ層は、共同溝の余掘部分と建物に沿って埋設されている管路の間、約3mの幅に残存し、15cm前後の厚さで、径1～3㎜の小礫が少量混じる黒褐色砂質シルトである。下部ほど黒みが強い。このⅢ層を掘り下げ中に比較的多くの遺物が出土した（写真92・93）。

Ⅲ層下のⅣ層上面で多くの遺構を検出した。遺構には、SC-2、SB-11、SK-1・4・27、SF-22、SP-3・7・8～10・12～16・18～21・23～26・28・29・31・33がある（図30、写真90・91）。とくに、Ⅰ区西半部で、竪穴式住居や掘立柱建物、土壙が密集して出土した。これらの中で、SP-23・24は、やや灰色みを帯びるa類型の埋土をもち、中世の遺構である可能性が高い。以外の遺構は、いずれもc類型の埋土をもち、さらに出土遺物から、弥生時代中期後葉～後期前葉と考えられる。

この中で、SC-2は、CJ-19·20区に位置する竪穴式住居である。調査区が狭く、攪乱で破壊された部分も多いが、Ⅳ層上面で、SK-1に切られる深さ5cmほどの黒褐色シルトの広がりを確認した。底面から壁が比較的立ち上がることから、竪穴式住居の一部と考えた。SP-25・26を床面で確認したが、柱穴か否かは判然としない。

また、SB-11は、SP-5・6・30から構成される1間×1間の掘立柱建物である。それぞれで柱痕跡を検出した。桁行の柱痕跡間2.77m、梁間の柱痕跡間2.2mを測る。

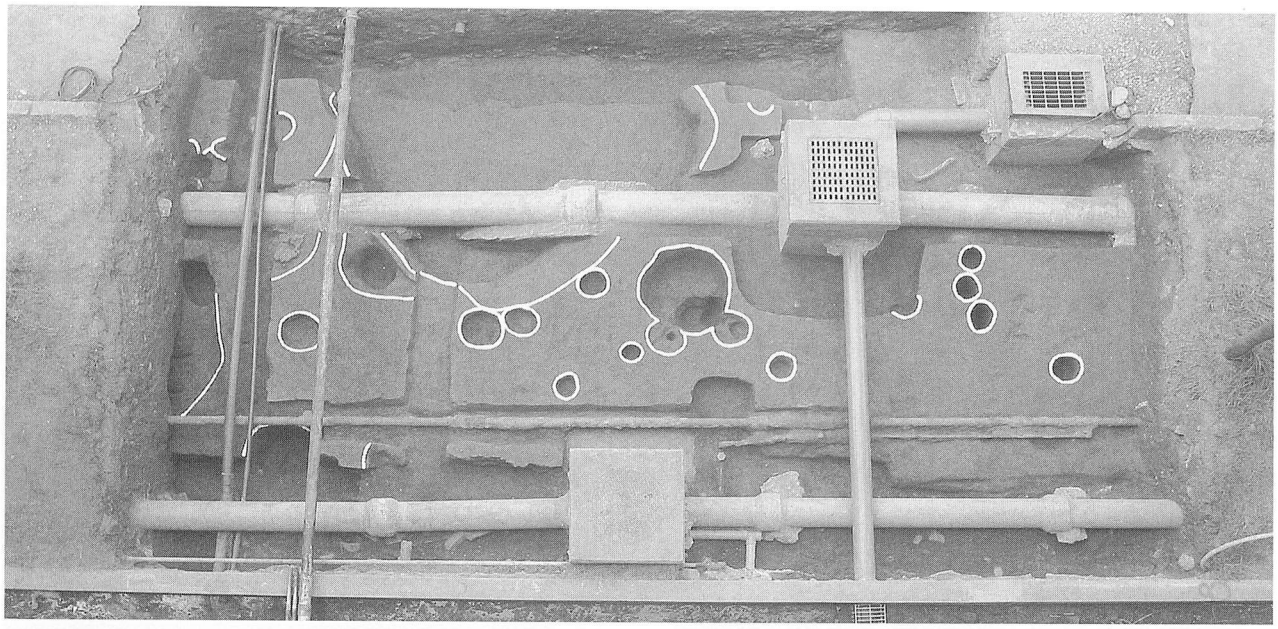

写真90　00204調査（文京遺跡26次）Ⅰ区完掘全景（南から）

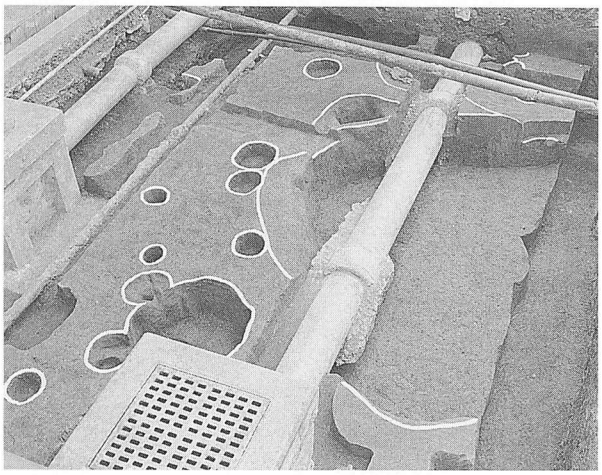

写真91　00204調査（文京遺跡26次）Ⅰ区完掘（東から）

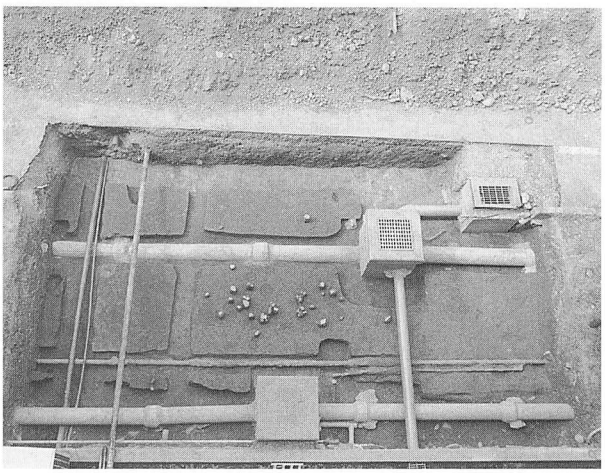

写真92　00204調査（文京遺跡26次）Ⅰ区Ⅲ層除去後全景（南から）

写真93　00204調査（文京遺跡26次）Ⅰ区Ⅲ層中遺物出土状況（西から）

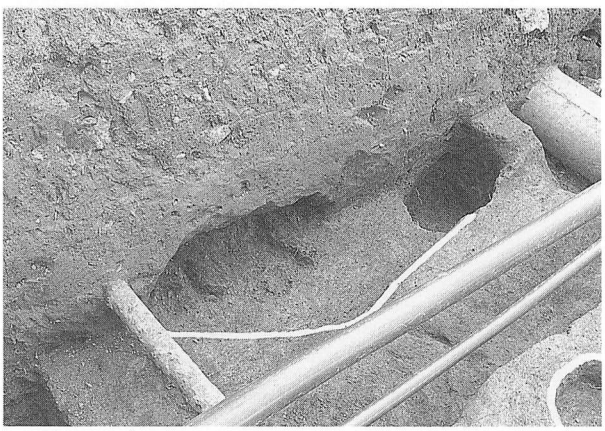

写真94　00204調査（文京遺跡26次）Ⅰ区SK-27炭化板材出土状況（南東から）

写真95　00204調査（文京遺跡26次）Ⅰ区
SF-22検出状況（西から）

写真96　00204調査（文京遺跡26次）Ⅰ区
SF-22完掘（西から）

写真97　00204調査（文京遺跡26次）Ⅱ区
全景（東から）

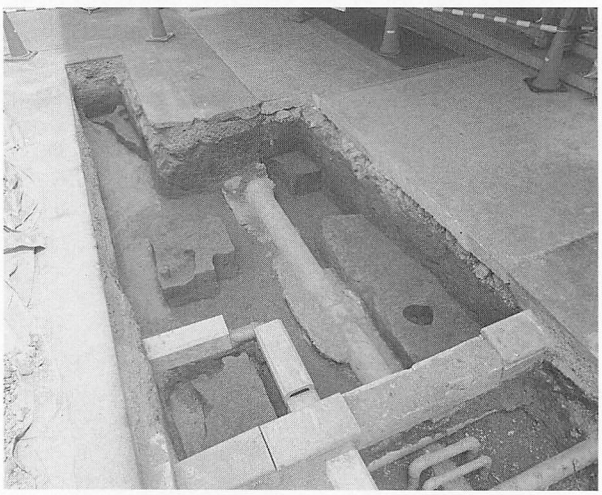

写真98　00204調査（文京遺跡26次）Ⅱ区
東端完掘（西から）

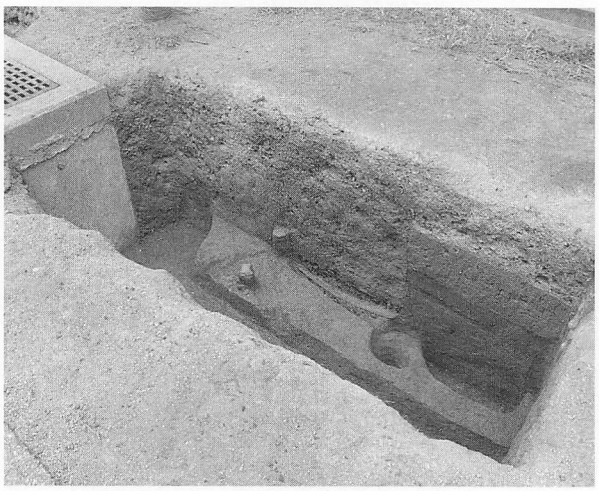

写真99　00204調査（文京遺跡26次）Ⅱ区
SC-50（北西から）

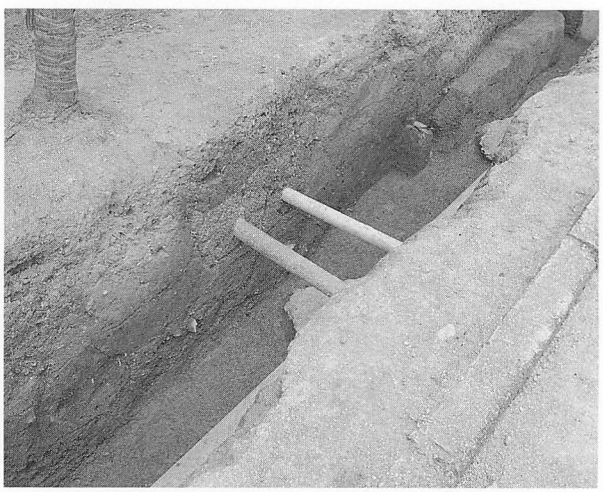

写真100　00204調査（文京遺跡26次）Ⅱ区
SD-53・54土層（北東から）

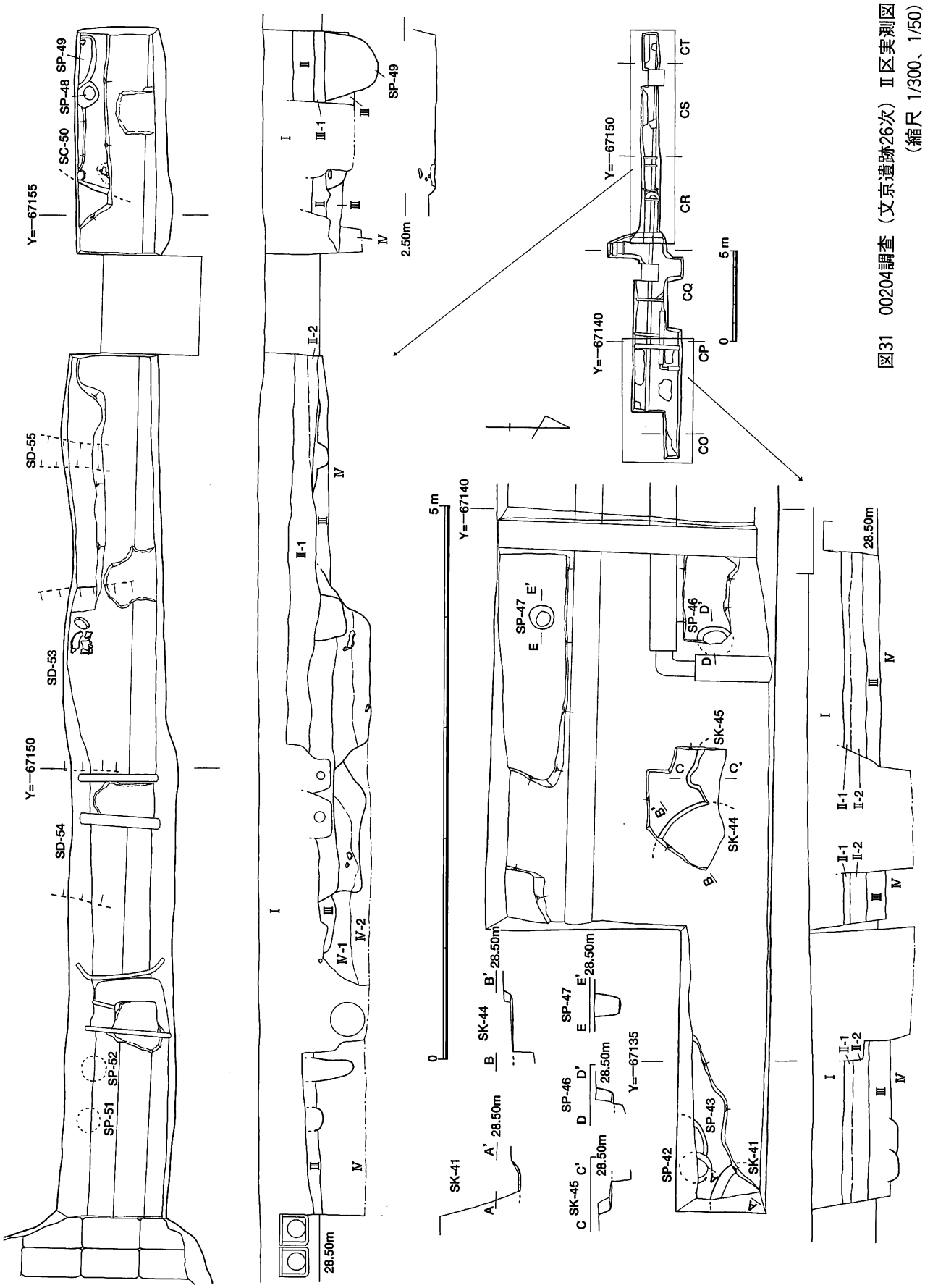

図31　00204調査（文京遺跡26次）Ⅱ区実測図
（縮尺 1/300、1/50）

土壙の中で、SK-１は、短径2.5ｍほどの隅丸長方形の土壙である（写真91）。文京遺跡12次調査でも、同様な規模と形態の土壙がある。底面は平らで完形に復元できる甕や壺がまとまって出土していることから、貯蔵穴と考えられる。埋土は、上層から床面近くまで、親指先～５㎝大の黄褐色砂質シルト塊が非常に多く混じる暗褐色シルトで、埋め戻している可能性が高い。また、調査区西壁際で検出したSK-27では、床面近くから、幅10cm、厚さ１㎝前後の炭化板材が２枚並んだ状態で出土した（写真94）。

さらに、SF-22は、南東部の1/4ほどしか残存していないが、径70～80cmの円形の土壙を復元でき、底面に接するように、厚さ５㎝ほどの焼土がかたまって出土した（写真95・96）。炉跡と考えられるが、野外炉なのか、竪穴式住居に伴う炉なのかは、調査範囲が狭く判然としない。

（２）　Ⅱ区の遺構・遺物（図31、写真97～100）

Ⅱ区の調査では、中央部西よりのCQ-19・20区が攪乱ですべてを破壊されており、東半部のCO・CP-19・20区と、中央部から西側のCR～CT-19・20区に分けて調査を進めた（図31、写真97）。

Ⅱ区東半部のCO・CP-19・20区では、地表下25～30cmでⅡ層、50cmでⅢ層があらわれた。Ⅱ層は、上部の灰黄褐色砂質土層であるⅡ-１層と、下部の黄褐色砂質土層であるⅡ-２層に分層できる。Ⅱ-１層は団地造成以前の水田耕作土層、Ⅱ-２層は床土層である。Ⅲ層は黒褐色砂質土で、褐色みを帯びる。後述するⅣ区のⅢ-１層とほぼ共通する土層である。地表下65～70cm以下はにぶい黄褐色砂質土のⅣ層である（写真98）。

Ⅱ区中央部から西側のCR～CT-19・20区では、地表下25～43cmでⅡ層、50～55cmでⅢ層を検出した。Ⅱ層は、CO～CP-19・20区と同じく、上部の水田耕作土である砂礫混じりの灰黄褐色砂質土層のⅡ-１層と、下部のにぶい黄褐色砂質土Ⅱ-２層に分層できる。Ⅱ-１層からは土器片が出土。Ⅱ-２層の下面には粗砂が薄く堆積する。Ⅲ層は黒褐色砂質土で、きめが細かい。地表下55～65cm以下は、にぶい黄褐色砂質土のⅣ層である。深く掘り込まれた攪乱壁面で観察すると、Ⅳ層の下部は、灰黄褐色粗砂に変化する。

調査区内の攪乱が著しいものの、SC-50、SK-41・44・45、SD-53～55、SP-42・43・46～49・51・52の比較的多くの遺構が出土した。この中で、SD-53～55の３条の溝は、ａ類型の埋土をもつことと出土遺物から、中世の溝と考えられる。また、SP-51・52は、埋土に砂礫が多く混じるｂ類型の埋土をもち、古墳後期の遺構である可能性が高い。以外の遺構は、ｃ類型の埋土をもつが、SP-48は切り合い関係と埋土の特徴から古墳前期～中期。他はいずれも弥生時代、とくに中期後葉～後期前葉の遺構であると考えられる。

その中で、SC-50は、Ⅱ区西端のCT-20区で出土した竪穴式住居である。Ⅲ層上面から掘り込まれ、15～20cmの周壁の立ち上がりを確認できたが、平面形は不明である。底面がほぼ平坦であることから、竪穴式住居と判断した。埋土は黒褐色砂質土で、埋土中と床面から弥生土器片が出土した。また、床面に貼り付いた状態で焼土塊が出土した（写真99）。

また、SD-53は、Ⅱ区西半部のCR・CS-20区に位置する溝で、Ⅲ層上部から掘り込まれ、SD-54を切る。溝幅は、調査区南壁で3.05ｍを測る。西側が断面逆台形に深く30cmほど掘り込まれる。西側の断面逆台形部分の下層には、径３～５㎜の砂礫が多く混じる黒褐色砂質土が堆積し、粘性を帯びた部分が縞状に観察できる。その上位にはきめが細かい黒褐色砂質シルトが堆積し、さらに溝全面を覆う最上層には砂礫混じりの黒褐色砂質土が流れ込む。これに切られたSD-54は、幅1.2ｍの断面逆台形を呈する。埋土上部は灰黄褐色粗砂層、下部はにぶい黄褐色細砂層が堆積する。埋土上部から古代～中世の遺物が出土した（写真100）。SD-55は、Ⅲ層を切り込む幅90cmほどの溝で、中央部には幅25cm、深さ10cmの小溝状の窪みが見られる。その中には、薄いレンズ状の粗砂層や細砂層が縞状に互層堆積する。

（３）Ⅲ区の遺構・遺物（図32上右、写真101）

Ⅲ区の南北両端は、既設の管路で攪乱を受け破壊されていたが、中央部では地表下45cmでⅡ層、80cmでⅢ層があらわれた。Ⅱ層は灰色みを帯びた黄褐色砂質土層で、上部のⅡ-１層と、下部のⅡ-２層に分層できる。Ⅱ-１層は、灰黄褐色砂質土で、径５～10㎜の砂礫が多く混じる。径５㎜の細長い炭化物を少量含む。Ⅱ-２層は、下部を中心として灰色みを帯びたにぶい黄褐色砂質土層。径２～３㎜の砂礫が多く混じる。Ⅲ層は、黒褐色砂質土で、上部は遺構埋土と共通してやや粘性があり、下部はきめが細かくサラサラした土質で黄色みが強くなる。上部から下部への変化は漸移的である。地表下120cm以下はⅣ層である。

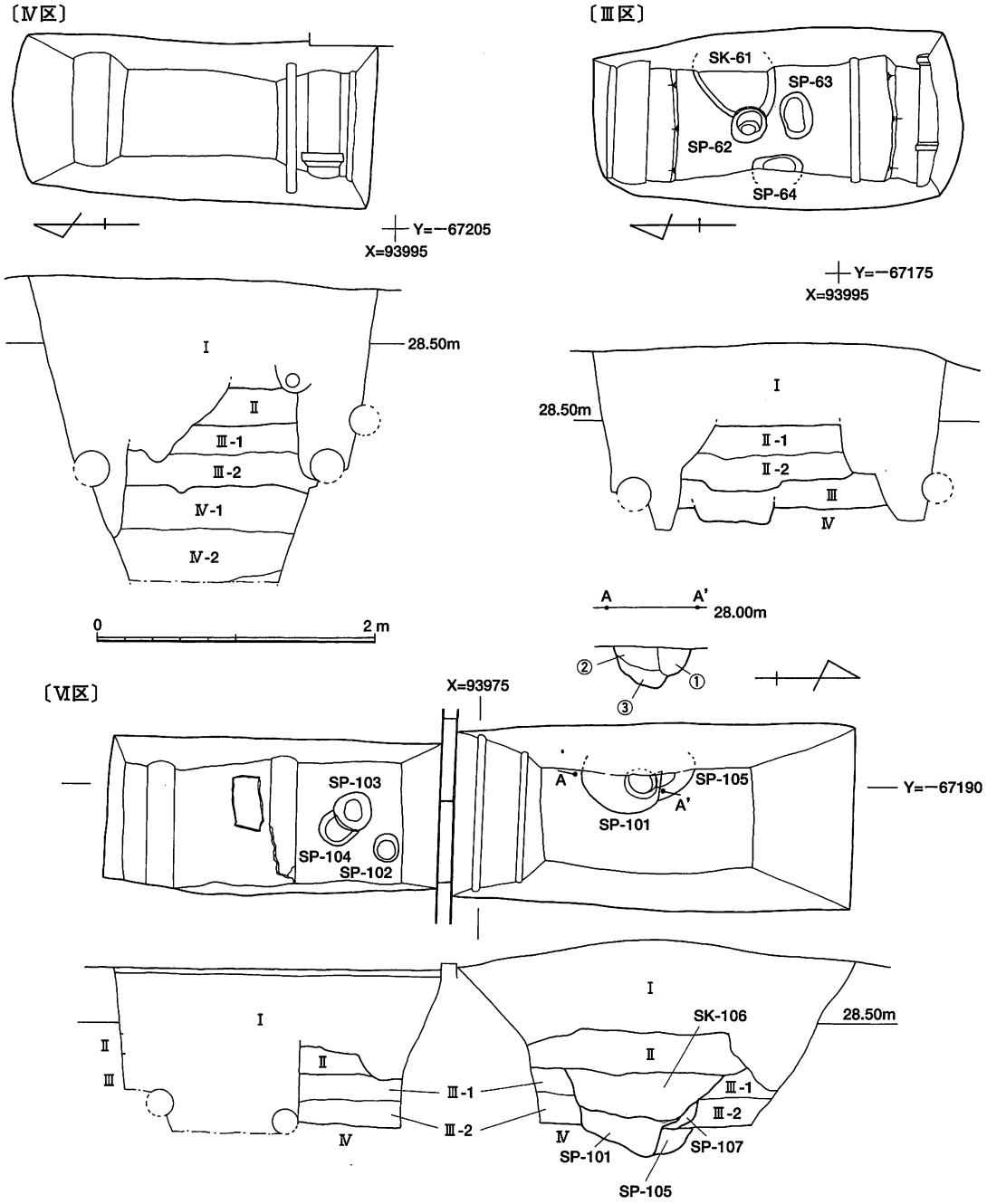

図32　00204調査（文京遺跡26次）Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ区実測図（縮尺 1/50）

Ⅳ層上面で、SK-61、SP-62～64を検出した。調査区壁面の観察で、SK-61とSP-64はⅢ層中位から掘り込まれていることを確認できた。いずれもｃ類型の埋土をもち、弥生時代中期後葉～古墳時代前期の遺構である。

（4）　Ⅳ区の遺構・遺物（図32上左、写真102）

地表下80cmでⅡ層、105cmでⅢ層があらわれた。Ⅱ層は、暗オリーブ褐色砂質土で、下部は褐色みを帯びてくる。Ⅲ層は、40～45cmの厚さで、上部のⅢ-１層と、下部のⅢ-２層に分層できる。Ⅲ-１層は、暗褐色に近い黒褐色砂質シルトで、部分的に粘性を帯びる。径２～３㎜の砂礫が混じる。土器片が出土。Ⅲ-２層は、黒褐色粘質土で、粘性が強い。地表下150cmでⅣ層があらわれた。上層からⅣ-１～Ⅳ-３層に分層できる。Ⅳ-１層は、にぶい黄褐色シルトで、部分的に粘性を帯びる。Ⅳ-２層も、同じにぶい黄褐色シルトで

写真101　00204調査（文京遺跡26次）Ⅲ区
完掘状況（北から）

写真102　00204調査（文京遺跡26次）Ⅳ区
Ⅲ層検出状況（北から）

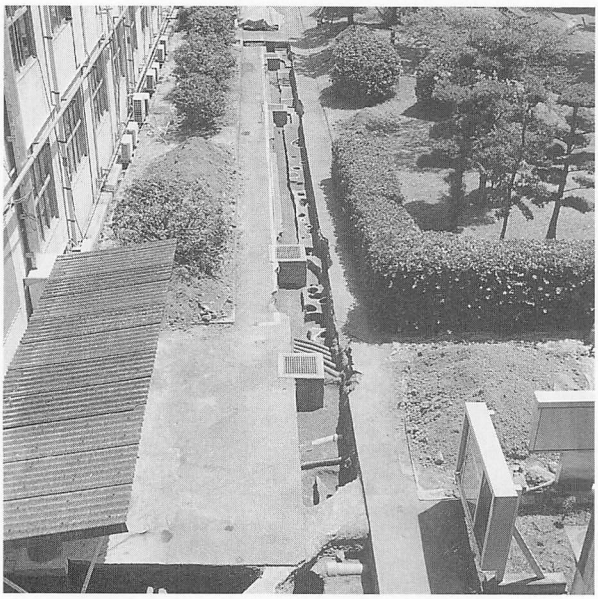

写真103　00204調査（文京遺跡26次）Ⅴ区
東半部完掘（西から）

写真104　00204調査（文京遺跡26次）Ⅴ区
東端部完掘（東から）

あるが、Ⅳ-１層より灰色みを帯びる。Ⅳ-３層は、灰黄褐色細砂層である。

Ⅳ区では、遺構は出土していない。遺物は、Ⅲ層中から弥生土器片が数点出土しているのみである。

（５）　Ⅴ区の調査（図33・34、写真103～105）

Ⅴ区は、CG～CQ-14～16区の旧工学部本館建物の南東側に計画された総延長62ｍほどの管路部分である。既往の99908調査区と一部重複する。また、CM～CO-15区は既設の管路や枡の設置に伴う攪乱が著しく、遺構はすべて破壊されていた。そのため、調査は、東半部のCG～CL-14・15区と、西端部のCP・CQ-15・16区に分けて進めることとした。

Ⅴ区東半部のCG～CL-14・15区では、地表下20～25㎝でⅡ層が、30～35㎝でⅢ層があらわれた。Ⅱ層は灰

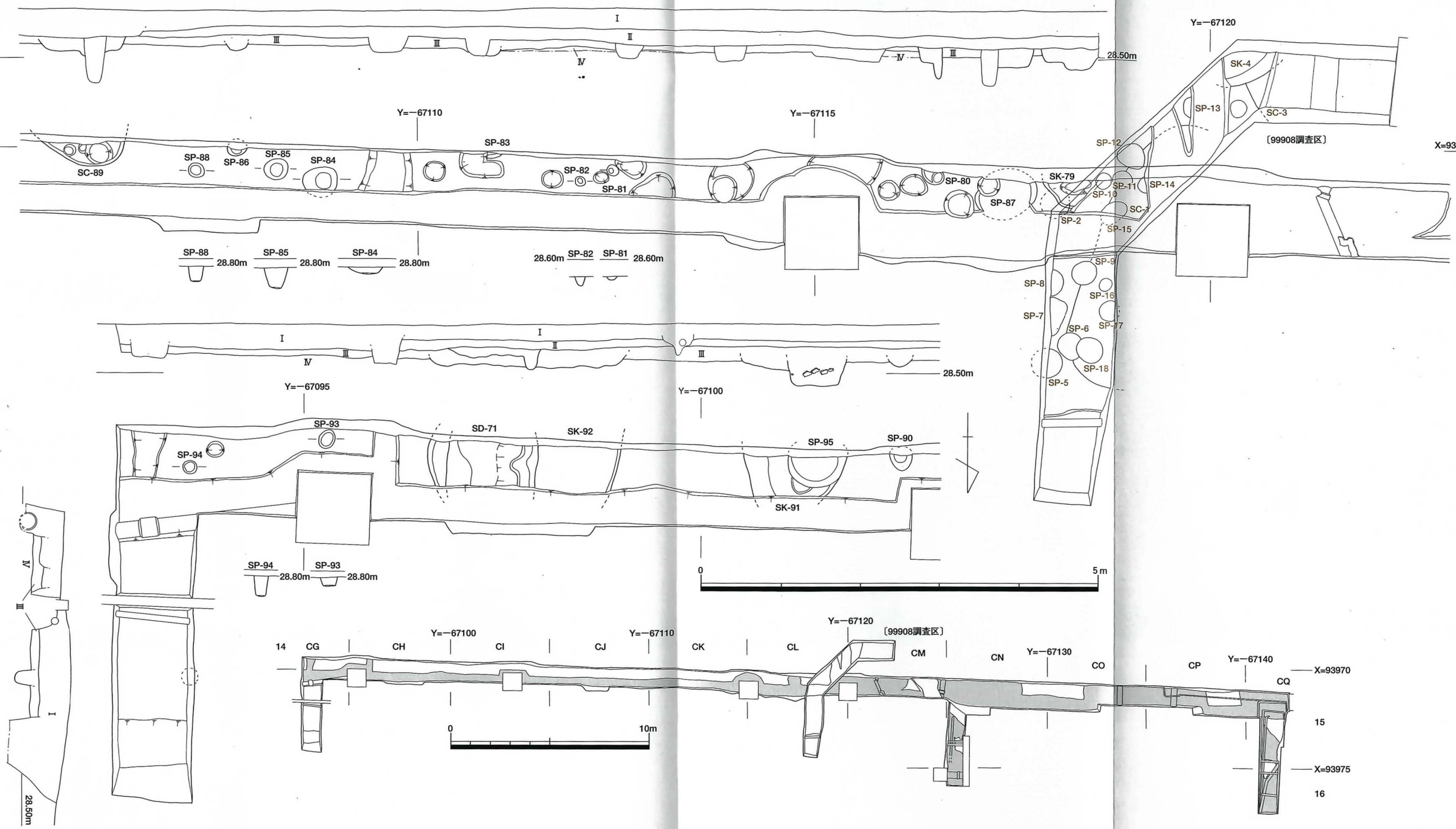

図33　00204調査（文京遺跡26次）Ⅴ区実測図①（縮尺 1/200、1/50）

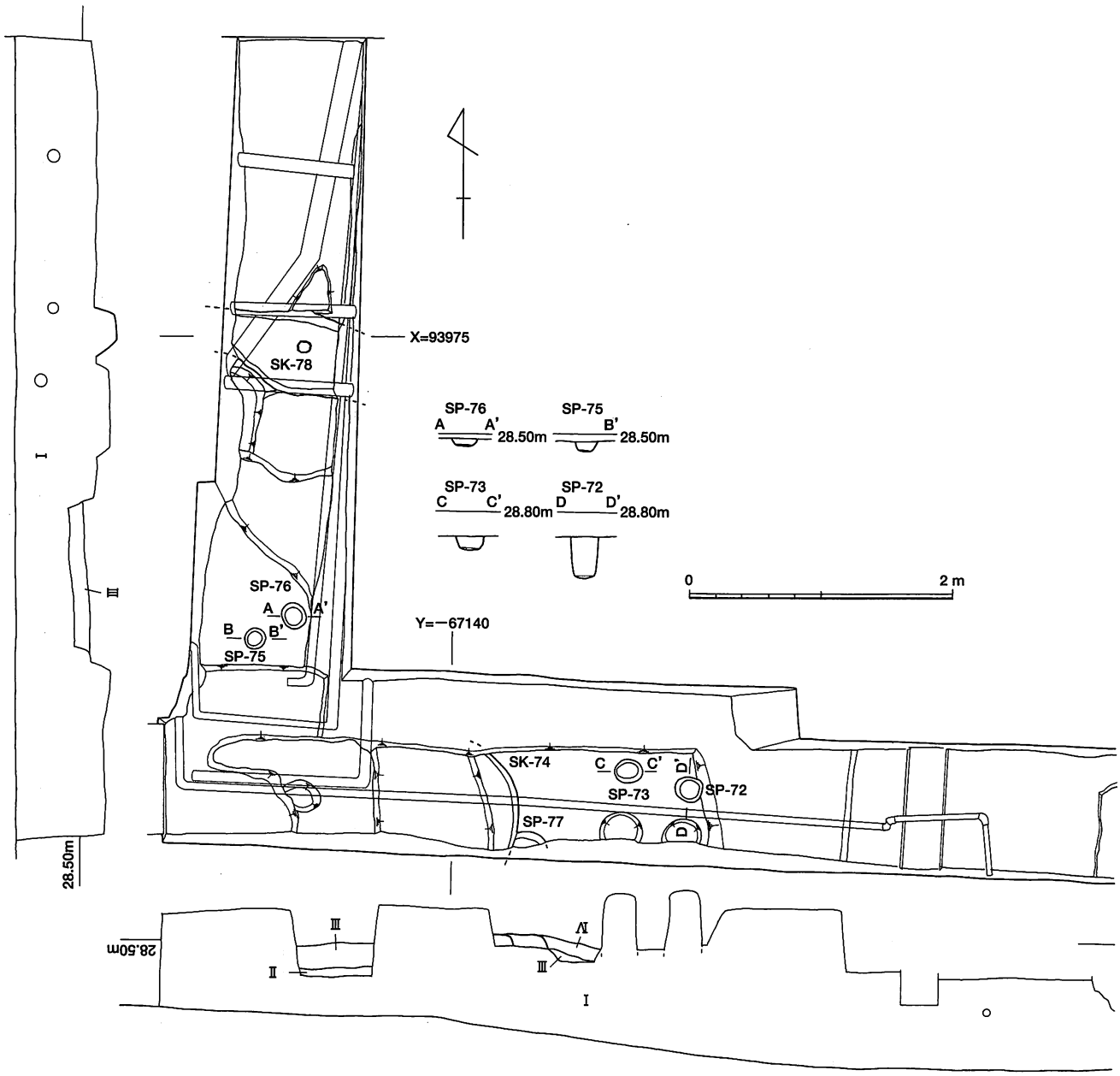

図34　00204調査（文京遺跡26次）Ⅴ区実測図②（縮尺 1/50）

黄褐色砂質土、Ⅲ層は黒褐色砂質シルトである。ただし、この地点のⅢ層は、他地点と比べてやや明るい土色で、砂礫が比較的多く混じる。また、Ⅲ層は厚さ10cm前後と薄く、地表下40～45cmでⅣ層があらわれた（図33、写真103・104）。その西側のCO・CN-15区では、Ⅲ層下にはⅣ層は見られず、暗褐色砂質土や灰色砂礫層、黄褐色細砂層のⅤ層と考えられる土層群が盛り上がる。

Ⅴ区西端部のCP・CQ-15・16区では、既設管路の設置時にかなりの攪乱を受けており、Ⅱ層は残存せず、Ⅲ層も地表下40～45cmで部分的に確認されたにすぎない。この地点のⅢ層は、黒褐色砂質シルトで、上部に砂礫が多く混じるのに対して、下部にはほとんど砂礫は混じらない。地表下55～60cmでⅣ層上面を検出した（図34、写真105）。

Ⅴ区では、攪乱が著しいものの、SC-89、SK-74・78・79・91・92・95・97、SD-71、SP-72・73・75～77・80～88・90・93・94・96・98・99の遺構が出土した。この中で、SD-71、SK-92、SP-84・85・88・93・94は、灰色みを帯びたａ類型の埋土をもち、中世の遺構と考えられる。また、埋土に小礫が混じるｂ類型の埋土のSK-78・91・95・97、SP-72・73・75・

写真105　00204調査（文京遺跡26次）Ⅴ区
西端部完掘（北から）

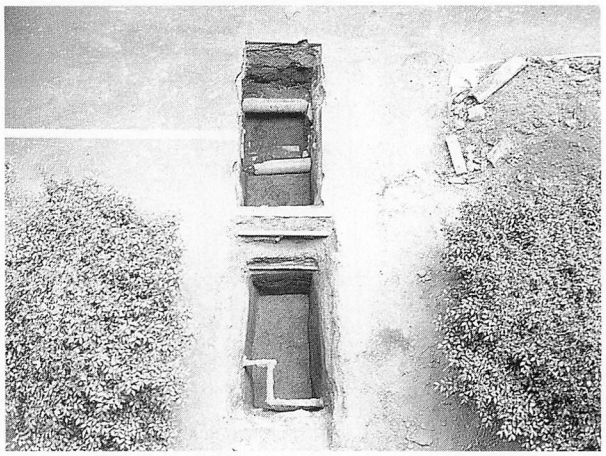

写真106　00204調査（文京遺跡26次）Ⅵ区
遺構検出状況（北から）

77・80～83は古墳時代後期、小礫がほとんど混じらないｃ類型の埋土をもつSC-89、SK-74・79、SP-76・86・87・90・96は、弥生時代とくに中期後葉～後期の可能性が高い。

（６）　Ⅵ区の調査（図32下、写真106）

地表下55～65cmでⅡ層、75～95cmでⅢ層があらわれた。Ⅱ層は砂礫混じりの灰褐色砂質土。Ⅲ層は、上部の砂礫混じりの暗褐色砂質シルトであるⅢ－１層と、下部の黒褐色シルトのⅢ－２層に分層できる。Ⅲ－１層は明るい茶色系の土色で、砂礫を多く含む点がⅢ－２層と異なる。Ⅲ層は37～40cmの厚さで、地表下110～125cmでⅣ層の上面を確認した。

Ⅳ層の上面でSP-101～105、DA-16区壁面でSK-106とSP-107を確認した。これらは、いずれも砂礫混じりのｂ類型の埋土をもつ。古墳時代後期と考えてよい。

3　調査のまとめ

今回の調査は、調査範囲が狭い上に、攪乱が著しかったが、多くの遺構を確認できた。前述した昭和38～40年の旧工学部本館建設時に出土した弥生時代後期を主体とする遺物だけではなく、弥生時代から中世の遺構が周辺に濃密に分布することが考えられる。とくに、Ⅰ区では、弥生時代中期後葉～後期前葉の遺構が密集して出土し、当該期の文京遺跡の大規模集落がこれまで考えられてきた以上に東側に延びることを確認できたのは大きな調査成果と言える。

また、特徴ある遺物として、Ⅱ区CT-20区SC-50の壁際から、線刻絵画土器が出土している。壺の肩部と考えられる破片で、細いヘラ状工具で描かれる。弥生時代中期後葉～後期前葉と考えられるが、これまで文京遺跡で出土している、鹿を描いた線刻絵画土器とは異なる抽象的な表現をとるものである（図35-１）。また、Ⅰ区CI-19区では、Ⅲ層中から分銅形土製品が１点出土している（図35-２）。　（田崎）

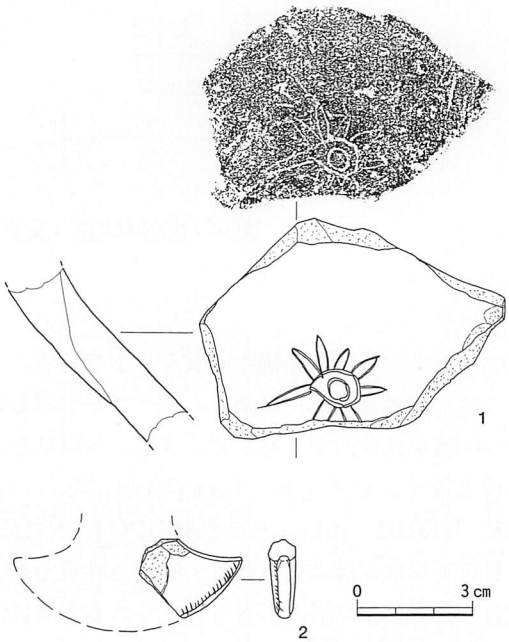

図35　00204調査（文京遺跡26次）出土遺物実測図（縮尺 1/2）

00205（城北）総合研究棟等改修電気設備工事に伴う調査

調 査 地 点　松山市文京町３番
　　愛媛大学城北団地（図１）
調 査 面 積　３㎡
調 査 期 間　2002年10月21日
調査の種別　立会調査
調 査 担 当　田崎博之
調 査 補 助　宮崎直栄
依 頼 文 書　施設部施設課長発事務連絡
　　（平成14年10月16日付）

1　調査にいたる経緯

旧工学部本館である総合研究棟改修に伴い、新たな電線管が城北団地西門付近で構内に引き込まれることとなった。埋蔵文化財調査室と施設部の協議で、既設管路を用いることとされていたが、工学部４号館西側の駐輪場では、配管の都合で既設管路外を掘削する必要が生じたことが、施設部から埋蔵文化財調査室に連絡された。埋蔵文化財調査室では、既往の調査成果から、当初設計の掘削深度では埋蔵文化財に影響があると判断し、施設部と協議の上、掘削深度を浅くするとともに、工事にあたって立会調査を行うこととした。

2　調査の記録（図36）

今回の調査地点は、工学部４号館西側の駐輪場のほぼ中央部にあたる。駐輪場は、工学部４号館建設後に設けられ、40～70㎝の盛土が行われている。駐輪場の南西側の99215調査２トレンチでは道路面から55㎝で、北側の16Ａ次調査区（調査番号：99701）南西端では表土から40㎝で、城北団地基本層序のⅢ層に達する。これらから、工事地点では現舗装面から100～105㎝でⅢ層があらわれる可能性が高い。

電線管路掘削では、地表下80㎝までⅠ層が続き、その下位にはⅡ層が見られる。そして、地表下105㎝でⅢ層があらわれた。Ⅲ層最上部は砂礫が多く混じる黒褐色砂質シルトで、土器の細片が点々と出土した。砂礫の多く混じる最上部は約５㎝続き、黒褐色砂質シルトに漸移的に変化する。こうしたⅢ層の堆積状況は、駐輪場の南西側の99215・99404調査地点とは異なり、北側の16Ａ次調査区南西端と共通する。

3　調査後の対応

既設管路外の掘削深度を、Ⅲ層があらわれた地表下105㎝までに依頼し、調査を終了した。　（田崎）

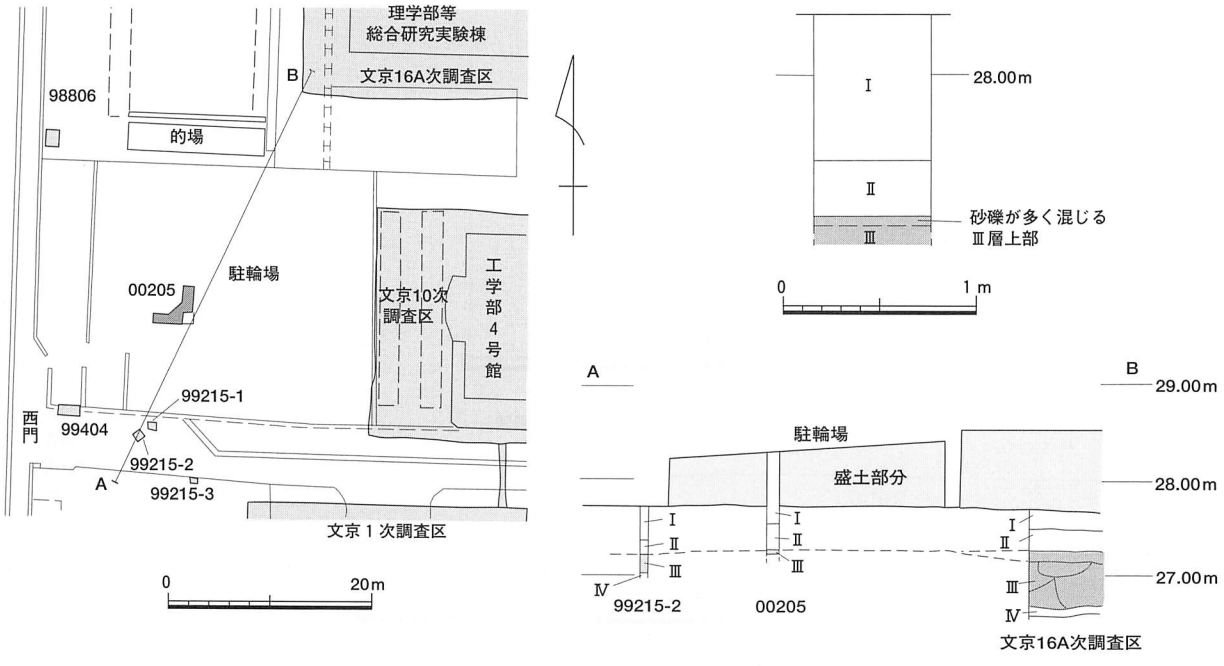

図36　00205調査地点位置図、土層柱状図および周辺土層断面図（縮尺 1/750、1/40、1/750・1/80）

00206 (城北)情報教育棟・放送大学愛媛学習センター新営その他工事（その２）に伴う調査

調 査 地 点　松山市文京町３番
　　愛媛大学城北団地（図１）
調 査 面 積　0.5㎡
調 査 期 間　2002年11月27日
調査の種別　試掘調査
調 査 担 当　田崎博之
調 査 補 助　宮崎直栄
依 頼 文 書　施設部施設課長発事務連絡
　　（平成14年11月27日付）

1　調査にいたる経緯

情報教育棟・放送大学愛媛学習センター新営に伴って、総合情報処理センターの西側の囲障を取り壊し、新たに通用門を設置することとなった。工事地点は、1998年に決定された遺跡保存範囲と隣接することから、周辺における既往の調査成果によって、施設部から提示された計画案を検討した。その結果、ごくわずかであるが、遺跡保存範囲で、城北団地基本層序のⅢ層に掘削の及ぶ可能性が生じた。そのため、試掘調査を行い、その結果を踏まえた上で、施設部と埋蔵文化

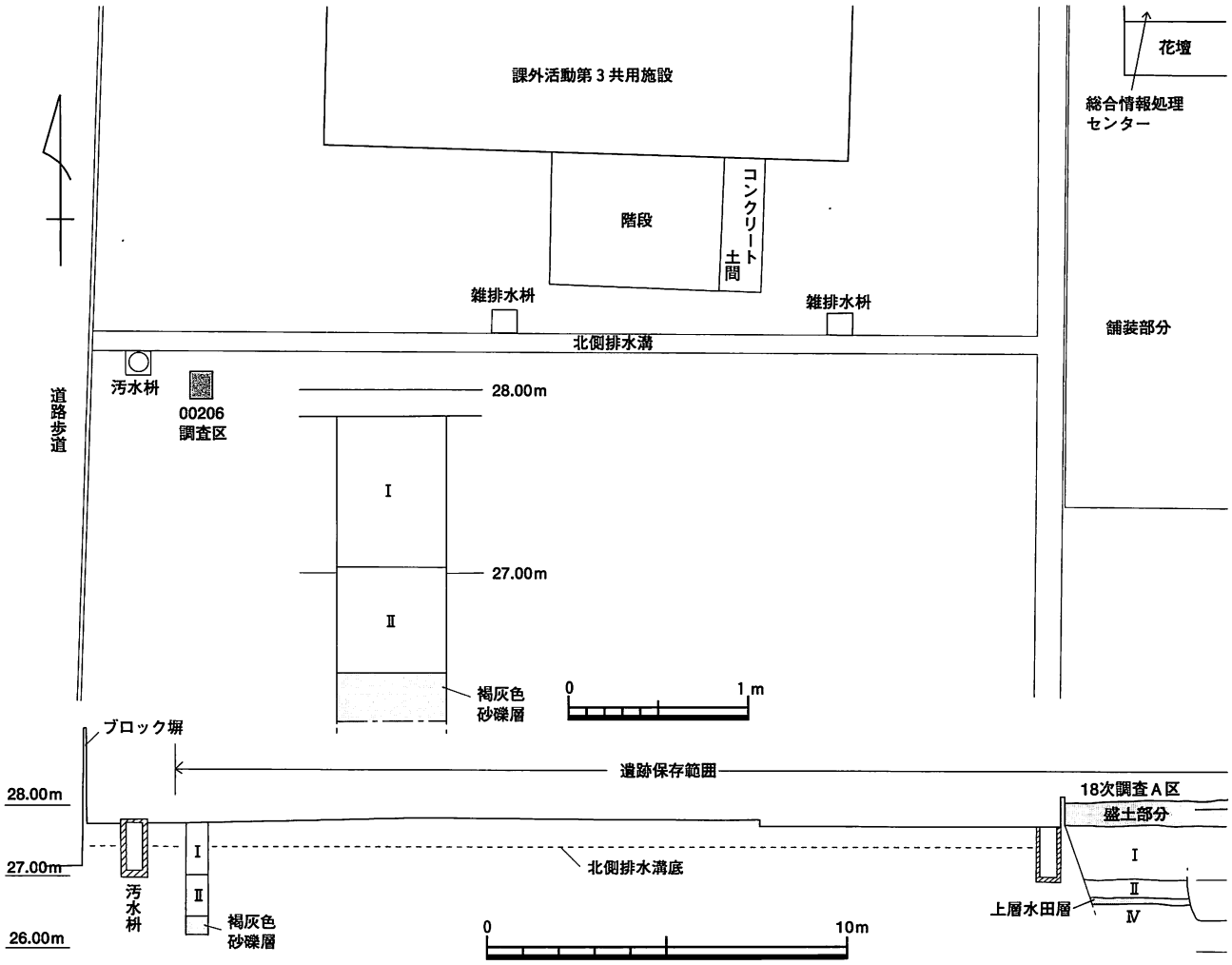

図37　00206調査地点位置図、土層柱状図および周辺土層断面図（縮尺 1/200、1/40、1/200・1/100）

財調査室が協議し、遺跡保存範囲の埋蔵文化財に影響が生じないように、設計を変更することとなった。

2　調査の記録（図37、写真107～109）

工事計画地点は、城北団地西辺のほぼ中央にあたる。既存の汚水管路や電線管路をさけて、囲障から３ｍほど離れた地点に調査地点を設定した（写真107・108）。

表土下80cmまで造成土であるⅠ層が続き、その下層には砂礫混じりの黄灰色砂質シルトが見られる。炭化物片が多く混じり、薄いマンガンの沈着層が何重にも縞状に観察できる。団地造成以前の旧水田層であるⅡ層である。Ⅱ層下からは、地表下140cmで褐灰色砂礫層があらわれた。層厚を確認するために、現地表下165cmまで掘り下げたが、なお砂礫層が続く（写真109）。遺物は出土していない。こうしたⅡ層下の褐灰色砂礫層は、北東側に25ｍほど離れた18次調査（調査番号：99802）Ａ区ではみられない。むしろ、南側に50ｍほど離れた17次調査（調査番号：99715）３トレンチで確認されている、弥生時代後期後半の土器を包含するSR-50の埋土である砂礫層に共通する。

3　調査のまとめと対応

今回の調査では、Ⅱ層下で確認した褐灰色砂礫層は、南側の17次調査３トレンチで確認されている弥生時代後期後半に埋没するSR-50の埋土である砂礫層と対応する。SR-50が団地西辺に沿ってほぼ南北に流れていたことが考えられる。

以上の調査結果をまとめ、施設部と協議を行った。その結果、

① 通用門の新設にあたっての掘削を、団地西側の歩道面から30cmに留めること。

② 外灯工事では、外灯基礎部分では地表下80cm、管路部分では30cmの掘削に留めること。

③ 付け替えが必要となる汚水管路は、既設の管路よりも深くしないこと。

の、遺跡保存範囲の埋蔵文化財に影響がない設計変更を行うこととした。

また、施設部においては、工事の発注時に、施工業者に埋蔵文化財に影響が生じないよう、慎重工事が必要なことを周知徹底する旨、依頼した。　（田崎）

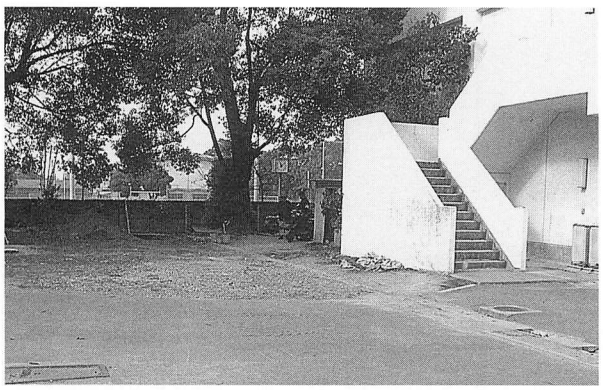

写真107　00206調査地点遠景（東から）

写真108　00206調査地点（東から）

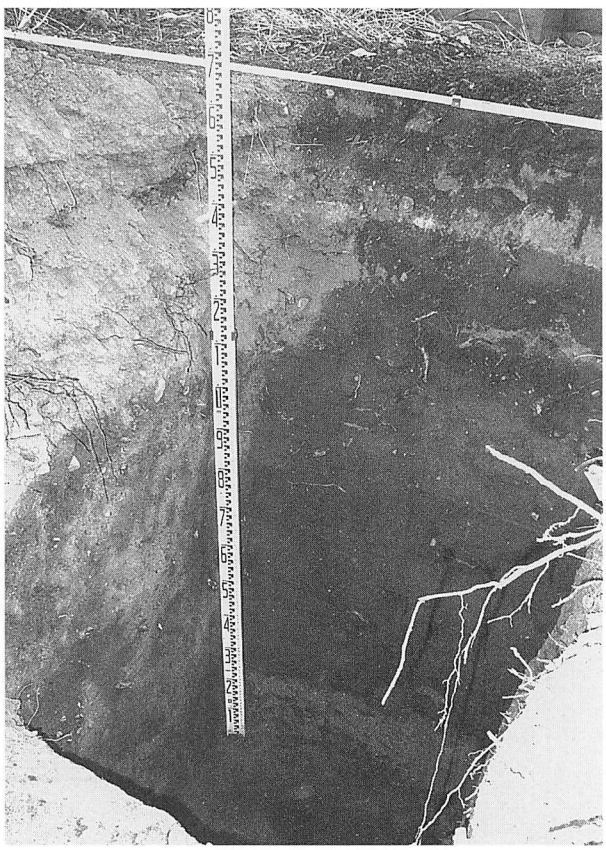

写真109　00206調査西壁土層（北東から）

00207 （城北）総合研究棟新営電気設備工事に伴う調査

調 査 地 点　松山市文京町２番５号
　　愛媛大学城北団地理学部構内（図１）
調 査 面 積　1.5㎡
調 査 期 間　2002年11月29日
調査の種別　立会調査
調 査 担 当　田崎博之
調 査 補 助　宮崎直栄
依 頼 文 書　施設部施設課長発事務連絡
　　（平成14年４月30日付）

1　調査にいたる経緯

理学部構内に建設されている総合研究棟への電気引き込み工事が行われることとなり、先の文京遺跡21・24次調査（調査番号：00003・00105）の成果から、埋蔵文化財へ影響が及ぶことは確実であり、立会調査を実施することとなった。

2　調査の記録（図38、写真110・111）

調査地点は、理学部構内の南東隅に位置する（写真110）。西側の、文京遺跡21次調査Ⅰ区南東部では、東西に延びる古代～中世の溝であるSD-５を確認していたが、その延長部分を、城北団地基本層序のⅣ層上面で確認できた（写真111）。ただし、遺物は出土していない。

3　調査後の対応

文京遺跡21・24次調査では、Ⅳ層上半部には縄文後期、下半部には縄文前期の遺構と遺物が包含されていることが明らかにされている。今回の工事では、周辺が盛土されており、縄文後期の遺構と遺物が包含されるⅣ層上半部まで掘削が及ばないため、慎重工事を依頼し、Ⅳ層上面までで調査を終了した。　（田崎）

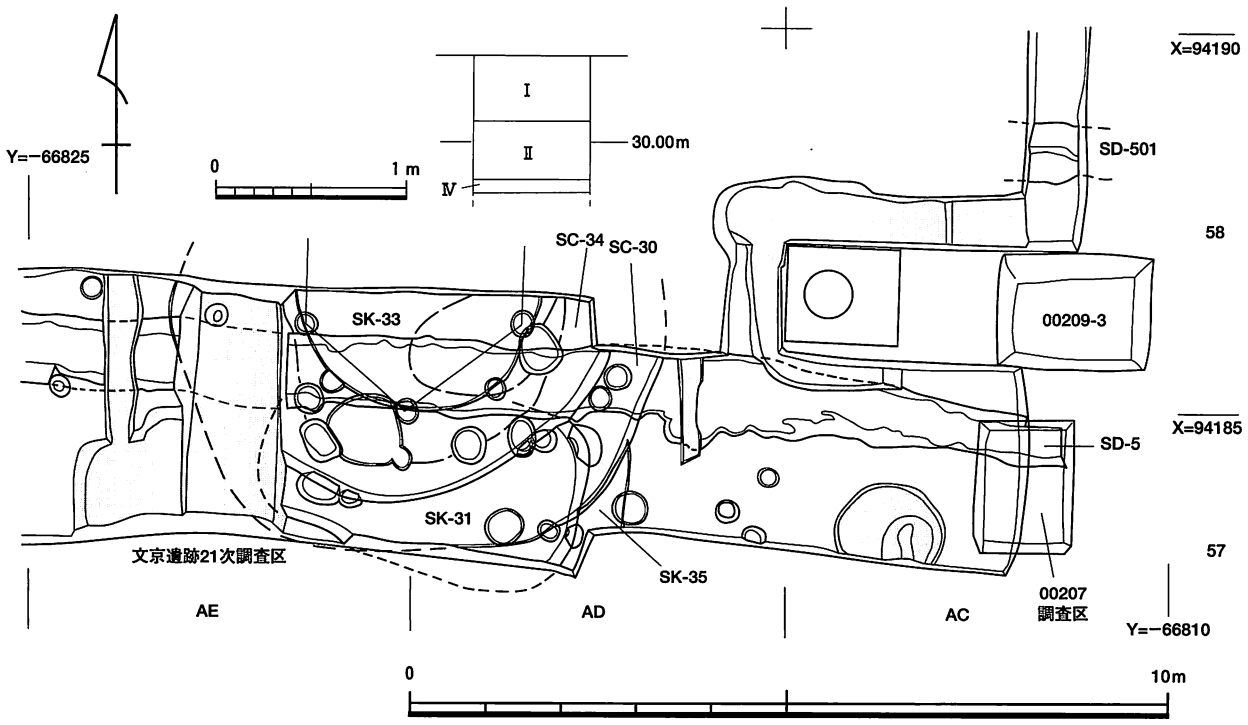

図38　00207調査地点位置図および土層柱状図（縮尺 1/100、1/40）

写真110　00207調査地点（西から）

写真111　00207調査遺構検出状況（北から）

00208　2002年度構内遺跡確認調査

調 査 地 点　松山市山越４丁目11番10号
　　愛媛大学山越団地（図３）
調 査 面 積　65㎡
調 査 期 間　2002年12月25・26日
調査の種別　確認調査
調 査 担 当　田崎博之
調 査 補 助　宮崎直栄
依 頼 文 書　施設部施設課長発事務連絡
　　（平成14年11月19日付）

1　調査にいたる経緯

施設部から、山越団地ラグビー場の防球ネット取設工事について、埋蔵文化財調査の要否及び実施の依頼があった。しかし、山越団地では点的な調査しか行われておらず、工事に対して正確な情報を回答することができない状態にあった。そこで、2002年度の構内遺跡確認調査を山越団地で実施することにより、団地内の埋蔵文化財の分布状況を把握することとした。

2　調査の記録（図39）

調査地点は、ラグビー場防球ネット取設工事が計画されている団地東辺に沿って南北に１～６トレンチ、北辺東側に７・８トレンチを設定し（写真112・119）、遺構の有無や堆積物の観察を行った。各トレンチの堆積土層の対応関係は複雑で、以下のように大別を行い、トレンチごとに堆積土層の特徴を報告する。

①層：表土層。
②層：団地造成以前の旧水田層。
③層：団地東辺の１～４トレンチで確認できた河川堆積物および湿地堆積物。
④層：団地北東隅近くの７・８トレンチで確認できた湿地堆積物。
⑤層：２・４・７・８トレンチで、③・④層下で確認できた河川堆積物。
⑥層：団地北東隅の５・６トレンチで確認できた黒褐色砂質シルト層。
⑦層：５・６トレンチで、⑥層下で確認できたにぶい黄色のシルト～砂質土層。

［１トレンチ］（図39、写真113・114）

団地南東隅に、99205調査２トレンチを既に設定していたので、その北側に１トレンチを設定した。地表下80㎝で②層、110㎝で③層があらわれた。以下は、地表下235㎝まで、③層が続く。１トレンチでは、②層は砂礫混じりの褐灰色粘質シルト層である。

③層上半部は褐～黒褐色の粘質土の湿地堆積物で、下半部は灰褐色砂礫の河川堆積物である。上半部を③-１層、下半部を③-２層とした。③-１層は１a～１d層に分層でき、上層ほど粘性が強く、下層ほど黒みが強い土色となる。③-１a層は褐色粘質土で、粘性は③-１b層よりも強い。上層の②層からしみ込んだ暈管状斑文が見られる。③-１b層は、砂礫混じりの褐色粘質土。③-１c層と比べて灰色みを帯び、粘性が強い。

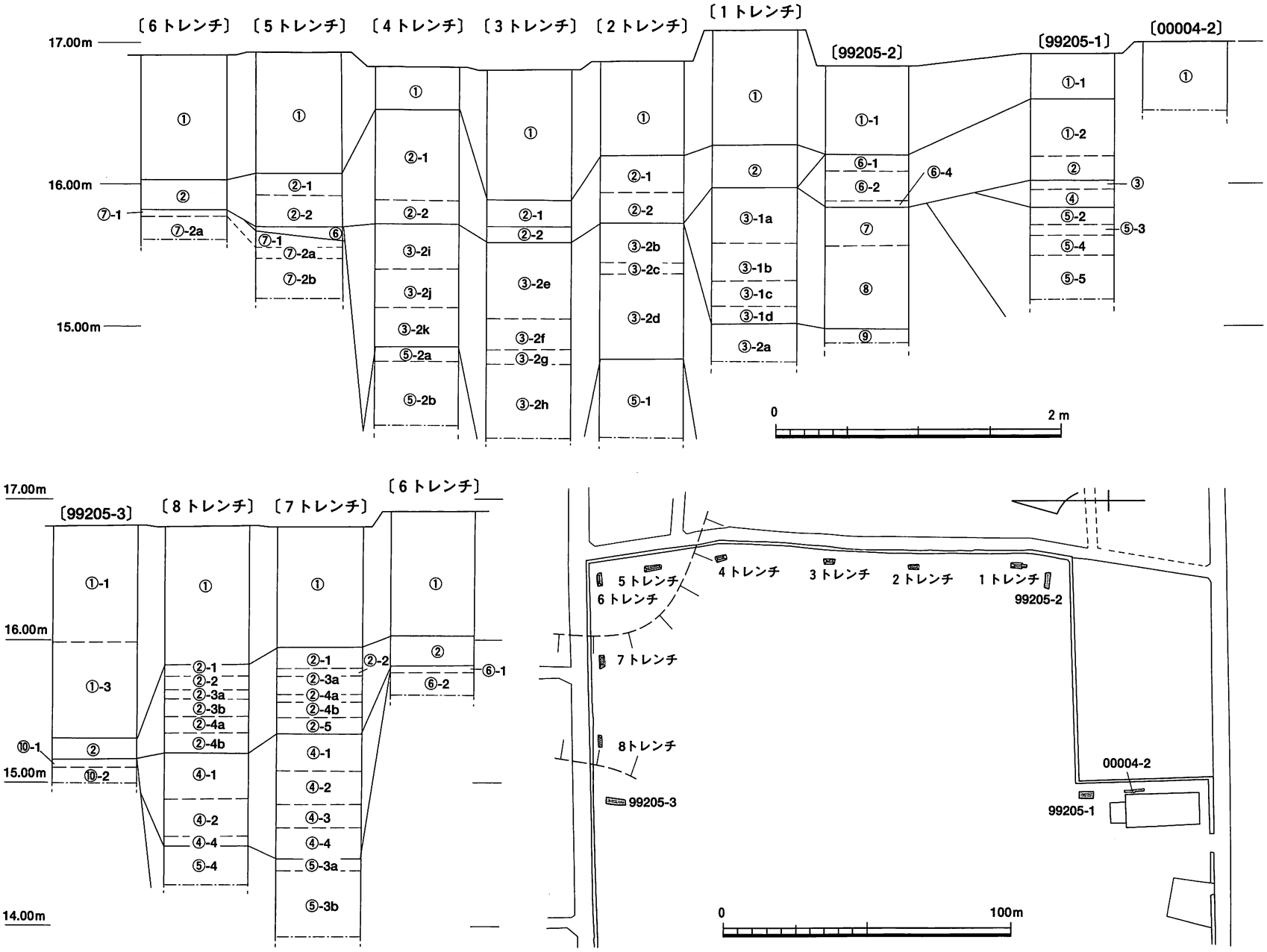

図39　00208調査地点位置図および土層柱状図（縮尺 1/2,000、1/40）

写真112　00208調査２・３トレンチ（北から）

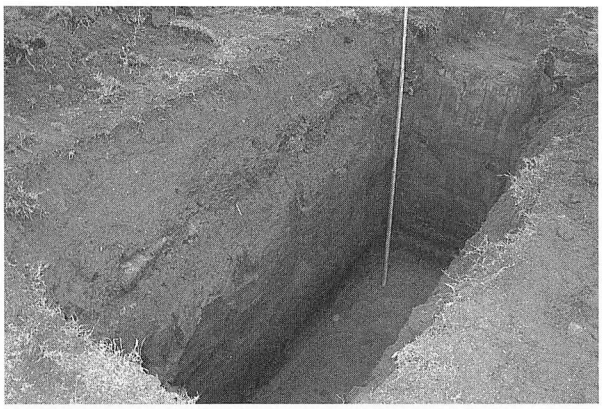

写真113　00208調査１トレンチ（北西から）

写真114　00208調査１トレンチ東壁土層（西から）

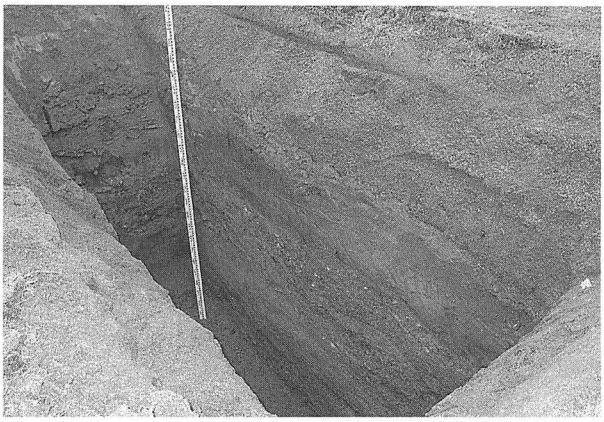

写真115　00208調査２トレンチ（南西から）

写真116　00208調査２トレンチ東壁下部土層（西から）

未分解のアシやヨシが見られる。③-１c層は黒褐色粘質土層で、未分解のアシやヨシ、径５㎝前後の流木が見られる。一部に厚さ２～３㎝のレンズ状の灰褐色粗砂層や細砂層が含まれる。③-１d層は下層の③-２層の砂礫層と③-１c層が混合する土層である。③層下半部の③-２層は灰褐色砂礫層。粗砂・細砂・小礫の薄いレンズ状ブロックが縞状に互層堆積する。２～４トレンチでも、この③-２層に対応する河川堆積物を確認しているので、１トレンチの③-２層を、③-２a層とする。

［２トレンチ］（図39、写真115・116）

１トレンチから北側に30ｍほど離れた位置に２トレンチを設定した。地表下68㎝で②層があらわれた。②層の層厚は50㎝ほどで、上半部の②-１層は砂礫混じりの暗灰色砂質シルト層。下半部の②-２層は、②-１層と比べて、やや灰色みを帯びた灰色粘質土層で、含

写真117　00208調査３トレンチ（南西から）

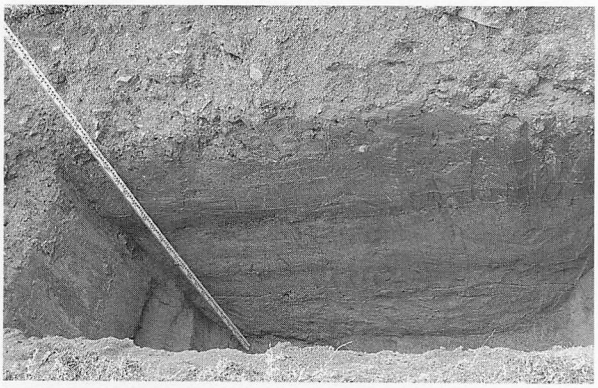

写真118　00208調査３トレンチ東壁土層（西から）

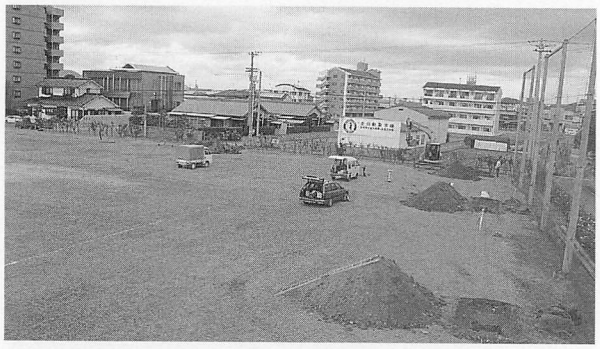

写真119　00208調査４～７トレンチ（南から）

写真120　00208調査４トレンチ（北西から）

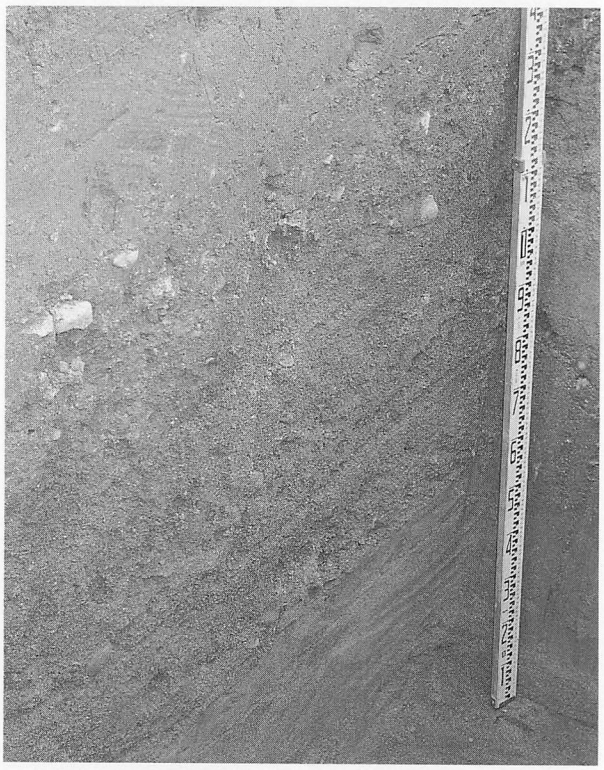

写真121　00208調査４トレンチ東壁下部土層(北西から)

まれる砂礫は少ない。

②層下では、地表下115cm前後で③層を検出した。上半部はほぼ水平に互層堆積した河川堆積物、下半部は北から南に向かって斜めに堆積する河川堆積物である。上半部は堆積状況から、１トレンチの③-２層と対応すると考えられる。下半部は、③層に先行する河川堆積物で、⑤-１層とした。

２トレンチの③-２層は、細砂層・粗砂層・小礫層が縞状にほぼ水平に互層堆積する。１トレンチの③-２a層との対応をはかれないが、③-２層は２b～２d層に分層できる。③-２b層はオリーブ黄色や灰色の粗・細砂で、径２～４cmの小円礫が２～５cmの厚さでそれぞれ縞状に互層堆積する。③-２c層はオリーブ黄色や灰色の細砂が縞状に互層堆積。③-２d層はオリーブ黄色や灰色の粗・細砂、径２～４cmの小円礫が２～５cmの厚さでそれぞれ縞状に互層堆積する。

また、⑤-１層はオリーブ黄色や灰色の粗・細砂、径２～４cmの小円礫が２～５cmの厚さでそれぞれ縞状

に互層堆積する。後述する４トレンチでも、同様な河川堆積物を確認できている。

［３トレンチ］（図39、写真117・118）

団地東辺のほぼ中央、２トレンチから25m北側に設定した。地表下90cmで②層を確認した。②層は、上半部の砂礫混じりの灰色粘質シルト層である②-１層、これと比べてやや灰色みを帯び、砂礫が少ない灰色粘質土層である②-２層に分層できる。地表下120cm以下は、260cmまで③層が続く。３トレンチの③層は、細砂層・粗砂層・小礫層が縞状にほぼ水平に互層堆積した河川堆積物で、２トレンチの③-２層と対応する。

さらに、③-２層は上層から、青灰色細砂層で厚さ１～２cmの微細砂層や細砂層が縞状に互層堆積する③-２e層、オリーブ黄色粗砂層である③-２f層、灰白色粗砂層に灰色粘土の薄いレンズ状のブロックが混じる③-２g層、灰白色の細砂や粗砂の薄いレンズ状ブロックが縞状に互層堆積する③-２h層に分層できる。③-２h層下部には、薄いレンズ状に樹枝がかたまって出土した。

［４トレンチ］（図39、写真120・121）

団地北東隅から南に45m、３トレンチから北側に35m離れた位置に設定した。地表下30cmで②層があらわれる。上半部の砂礫混じりの暗青灰色粘質土である②-１層、砂礫混じりのオリーブ灰色粘質シルト層である②-２層に分層できる。

地表下110～200cmは、河川堆積物である③層が続く。上半部には、細砂層・粗砂層・小礫層が縞状にほぼ水平に互層堆積する。１～３トレンチの③-２層に対応する河川堆積物である。２i～２k層に分層できる。③-２i層は褐灰色砂礫層。薄い粗砂層・小円礫層が縞状に互層堆積する。③-２i層と②-２j層の層界部分から８世紀前半に比定できる須恵器の高台付坏の口縁部片が出土した。③-２j層は褐灰色の粗砂層と砂礫層が縞状に互層堆積する。小円礫は混じらない。③-２k層は褐灰色の粗砂層と砂礫層が縞状に互層堆積し、上層の③-２j層と比べて、砂礫の粒子の大きさが揃う。

地表下200cm以下は、同じ河川堆積物でも、北から南に向かって斜めに落ち込むように、縞状に互層堆積する細砂層・粗砂層・小礫層から構成される。２トレンチの⑤-１層と対応する可能性が高いので、続けて⑤-２層とし、上半部の⑤-２a層と下半部の⑤-２b層に分層した。⑤-２a層は青灰色細砂層。⑤-２b層は、厚さ５～10cmの灰色細砂層・にぶい黄色微細砂層・青灰色細砂層が縞状に互層堆積する。

［５トレンチ］（図39・40、写真122・123）

団地北東隅近くの４トレンチと６トレンチの間に、６トレンチで確認できた⑦層が、どのように南に向かって落ちていくかを確認するために設定した。

地表下85cmで②層を確認できた。②層は、上半部の砂礫混じりの暗青灰色粘質土層である②-１層、下半部の砂礫が多く混じる暗オリーブ褐色砂質シルト層である②-２層に分層できる。

地表下125cmで黒褐色砂質シルト層があらわれた。⑥層である。南に向かって次第に厚さを増す。⑥層上面からSK-１が掘り込まれていることを壁面で確認できた。SK-１の埋土は、砂礫が多く混じる黒みが強い黒褐色砂質土で、弥生土器片が出土し、北側部分には焼土や炭化物が多く含まれる。また、⑥層中位から、

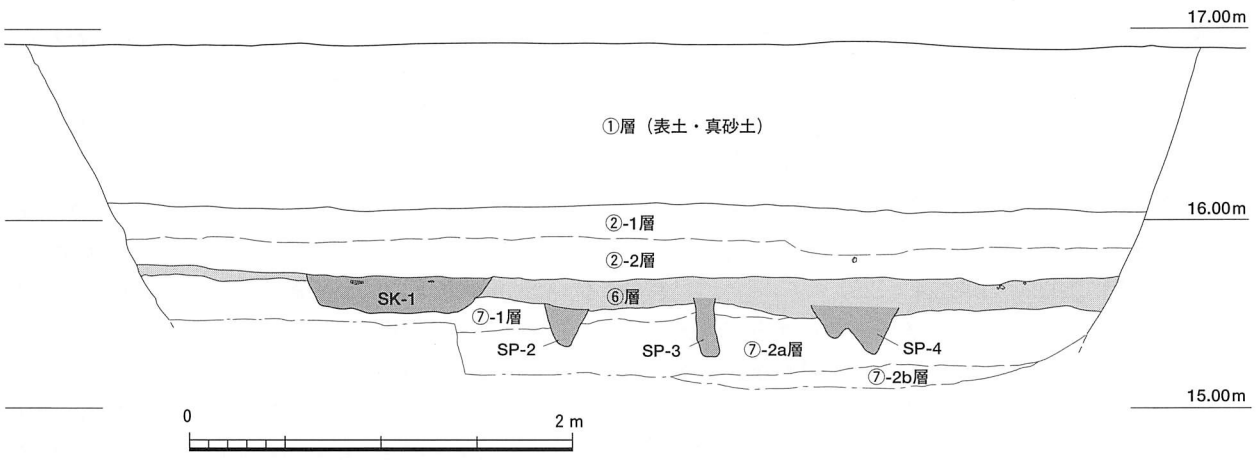

図40　00208調査５トレンチ東壁土層断面図（縮尺 1/40）

写真122　00208調査５トレンチ（北西から）

写真123　00208調査５トレンチ東壁SK-１土層（北西から）

写真124　00208調査６トレンチ（南西から）

写真125　00208調査６トレンチ北壁土層（南西から）

灰色みを帯びて粘性がややある黒褐色砂質シルトを埋土とするSP-３・４、⑥層下面からも、暗灰黄色砂質土と黒褐色砂質土が混合するSP-２が掘り込まれている。⑥層の下には⑦層が堆積する。上から⑦-１層と⑦-２層に分層できる。⑦-１層は暗灰黄色砂質土に黒褐色砂質土の小塊が点々と混じり、⑥層と⑦層が混合した状態である。⑦-２層はにぶい黄色のシルト～砂質土層で、上半部のにぶい黄色シルト層である⑦-２a層と、下半部のにぶい黄色のきめが細かい砂質土層である⑦-２b層に区分できる。

［６トレンチ］（図39、写真124・125）

団地北東隅に設定したトレンチである。地表下87cmで、暗オリーブ灰色砂質シルトである②層が確認できた。さらに、地表下110cmで⑦層があらわれた。上半部は、暗オリーブ褐色砂質シルトで、５トレンチの⑦-１層に対応する。下半部はにぶい黄色シルト層。５トレンチの⑦-２a層と対応する。⑦層の上面から小穴が掘り込まれていることを壁面で確認できた。

［７トレンチ］（図39、写真126～128）

団地東北隅に設定した６トレンチから西側へ25m離れた地点に位置する。地表下85cmで②層があらわれた。７トレンチと後述する８トレンチでは、②層は厚く、幾層かの水田層と、これを覆う流水性の砂礫層が互層となって堆積する状況を確認できる。

②-１層は暗オリーブ灰色砂質シルト層。下層にはマンガンが沈着する床土層である②-２層を確認できる。②-２層直下には、灰褐色砂礫層が堆積する。厚さ１cmほどの灰色粗砂ラミナが見られる。洪水によって運ばれた砂礫層で、後述する８トレンチでは、下層の②-４層との間に水田層が確認され、②-３a層とした。②-３a層下には、灰黄色微細砂層が見られ、その下層に灰黄色細砂を含む暗灰褐色粘質シルト層を確認

した。層界は不整合面をなし、水田層とそれを覆う洪水性の砂礫層と考え、灰黄色微細砂層を②-４a層、下層の灰黄色細砂を含む暗灰褐色粘質シルト層を②-４b層とした。さらに、②-４b層下にも、やはり水田層と考えられる砂礫混じりの灰色粘質シルト層が見られる。②-５層とした。

地表下145cmで、砂礫混じりの暗灰色ないし灰色の粘質土層があらわれた。90cmほどの層厚で、湿地性の堆積物である。下層には１・４トレンチの最下面で確認できた⑤層に対応する土層群が見られることから、④層とした。上層から１～４層に分層できる。④-１層は砂礫混じりの暗灰色粘質土で、厚さ１～２cm灰色粗砂や細砂のラミナが点々と見られる。④-２層は砂礫混じりの暗灰色粘質土。④-１層と比べて、ラミナも見られず、砂礫も少ない。未分解のヨシやアシが見られる。弥生土器の細片が数点出土。④-３層は砂礫が多く混じる灰色粘質土。④-４層は暗灰色粘質土。灰色粗砂や細砂のラミナが点々と見られる。未分解のヨシ、アシ、樹枝が見られる。割材と、その周辺から集中して縄文時代晩期の土器片が出土した(写真128)。

地表下235cm以下には、灰褐～灰白色の砂礫層が、南に向かって落ち込むように、斜めに縞状に互層堆積する。２・４トレンチの⑤層に対応すると考えられ、⑤-３層とした。上半部に堆積する灰褐色粗砂層を⑤-３a層、下半部に見られる灰色や灰白色の粗・細砂が薄く縞状に互層堆積する層を⑤-３b層とした。⑤-３b層には、樹枝や葉がかたまってレンズ状の堆積となっている部分が見られる。

[８トレンチ]（図39、写真129・130）

８トレンチは、７トレンチと99205調査３トレンチの間に設定した。地表下95cmで②層があらわれた。７トレンチと同じく、幾層かの水田層と、これを覆う洪水性の砂礫層から構成される。②-１層は、砂礫混じりの暗青灰色砂質シルト。②-２層は、砂礫混じりのにぶい黄橙色砂質シルトで、②-１層の床土部分。②-３層は、上部の褐灰色砂礫層の②-３a層と、下部のにぶい黄橙色砂質シルト層である②-３b層に分層できる。水田層とこれを覆う砂礫層である。②-３a層では、ほぼ水平に堆積する灰色粗砂ラミナが点々と見られる。②-３b層には砂礫が非常に多く混じる。②-４層も、水田層とこれを覆う砂礫層である。上部の②-４a層は、にぶい黄橙色砂礫層で、ほぼ水平に堆積する灰褐色粗砂のラミナが点々と見られる。下部の②-４b層は、砂礫が多く混じる褐灰色砂質シルトで、下部には暈管状斑文が見られる。②-４a層との層界は不整合面をなし、水路と考えられる溝の断面を確認できた。７トレンチの②-５層に対応する水田層は見られない。

②層下の地表下160～225cmには、灰色粘質土層が堆積する。④層である。上部ほど砂礫が混じり、暗い土色に変化する。７トレンチの④-１・④-２・④-４層を確認できたが、各土層群の層界は漸移的に変化する。④-１層は、砂礫混じりの灰色粘質土層で、部分的に、灰色粗砂や細砂のラミナが見られる。④-２層は、④-１層と同じ砂礫混じりの灰色粘質土層であるが、砂礫は少なく、ラミナも含まれない。未分解のアシやヨシが見られる。④-４層は灰色粘質土層で、部分的に灰色粗砂や細砂のラミナが点々と見られる。未分解のアシやヨシが見られる。

地表下225cm以下には、北から南に向かって斜めに落ち込むように、ほぼ水平に互層堆積する灰色や灰白色の細砂層・粗砂層から構成される河川堆積物が見られる。④-４層との境界部に集中して径５～８cmの樹枝が多く含まれる。⑤-４層とした。

３　調査のまとめ

今回の調査では、点的にではあるが、山越団地の東辺に集中してトレンチを設定し、堆積している土層群の観察を行った。結果、以下のような埋蔵文化財の分布状況を把握できた。『集報Ⅰ』の99205調査の報告に一部訂正を加えながら整理する。

（ａ）　表土下の②層は、団地造成以前の水田層であるが、今回調査の７・８トレンチで検出した②層下半の②-３・②-４層には、さらに古い水田層が含まれる。地点的には、後述する７・８トレンチ付近を南北に流れる旧河道が埋没し湿地化する谷状の窪地に位置する。調査範囲が狭く、出土遺物もないため、水田層の時期は不明だが、洪水性の砂礫層で覆われているため、田面の遺存状況はよい。

（ｂ）　今回の調査では、５・６トレンチで、黒褐色砂質シルト層である⑥層、暗オリーブ褐色砂質シルト層やにぶい黄色シルト層の⑦層を確認し、⑥・⑦層を切り込む弥生時代の遺構を検出した。団地北東隅付近には、当該期の遺構が分布することは明らかである。

（ｃ）　５・６トレンチで検出した⑥層と⑦層に対応す

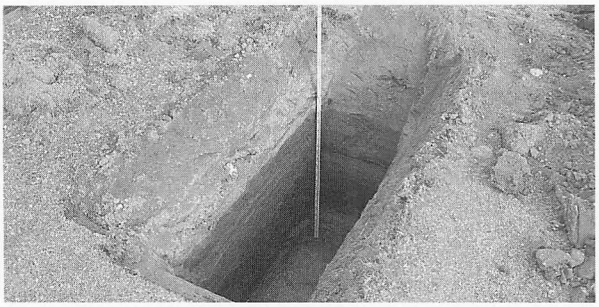

写真126　00208調査７トレンチ（南西から）

写真127　00208調査７トレンチ北壁土層（南西から）

写真129　00208調査８トレンチ（南西から）

写真128　00208調査７トレンチ④-４層遺物出土状況（西から）

写真130　00208調査８トレンチ北壁下部土層（南西から）

る土層群は、団地北東隅から80ｍほど離れた99205調査３トレンチでも確認できている。99205調査で⑩-１層とした土層は今回の⑥層、⑩-２層は今回の⑦層に対応すると考えられる。ただし、⑥層上面の検出レベルは、今回調査の６トレンチと比べて、65cmほど低い。今回調査の７・８トレンチ付近を南北に流れる旧河道を挟み、低い微高地が99205調査３トレンチより西側に広がり、何らかの遺構が営まれている可能性が考えられる。

（ｄ）　団地東辺で南北方向の延長線上に設定した１～６トレンチでは、４・５トレンチ間で⑥・⑦層が南に向かって落ち込み、４トレンチ以南では湿地・および河川堆積物である③層を確認でき、東西にのびる旧河道を想定できる。この旧河道の埋没時期は、４トレンチ③-２i層と②-２層の層界部から８世紀前半に比定できる須恵器の高台付坏の口縁部片が出土したことから、８世紀前半にはほぼ埋没を終わり、１トレンチ③-１層に示されるように、一部が湿地環境に変遷するものと考えられる。

（ｅ）　今回調査の１トレンチ南側に位置する99205調査では、２トレンチの、⑦・⑧層が今回調査の③-１層に対応する湿地堆積物、⑨層が今回調査の③-２層の河川堆積物である。⑥層も、やはり湿地堆積物と考えられる。さらに、99205調査１トレンチの①-２・②層も、この湿地堆積物と対応するものと考えられる。99205調査１トレンチ③層は黄灰褐色砂層、④層はやや灰色みを帯びる暗茶褐色ないし灰黄褐色シルト層、⑤層は砂層および砂礫層で、より南側に旧河道が移動しながら、河畔に湿地が形成されていく過程をトレースできる。

（ｆ）　今回調査の７・８トレンチでは、⑤層の河川堆積物に示される旧河道が流路を南に変えることで湿地環境となり、④層が堆積する。７トレンチ④-２層から弥生土器片、④-４層から縄文時代晩期の土器片が出土することから、かなり長期間にわたり湿地環境が続いたと考えられる。その間で、出土した土器片や割材に示される遺物包含層が形成される。

以上、今回の調査では、団地北東隅付近で弥生時代の遺構が営まれる微高地、その南側で旧河道を確認できた。この旧河道は、次第に南に流れを変え、河畔には湿地が形成される。また、団地北東隅から西側では、旧河道が埋没し湿地化する過程で形成される縄文時代晩期～弥生時代の遺物を包含する土層群を検出でき、さらに上層に水田が営まれることを把握できた。

こうした調査成果から判断して、山越団地東辺部付近で、深い掘削を伴う工事に際しては、発掘調査が必要である。　（田崎）

00209　（城北）総合研究棟新営電気・機械設備工事に伴う調査

調 査 地 点　松山市文京町２番５号
　　愛媛大学城北団地理学部構内（図１）
調 査 面 積　22.6㎡
調 査 期 間　2003年１月23～29日
調査の種別　立会調査
調 査 担 当　田崎博之
調 査 補 助　宮崎直栄
依 頼 文 書　施設部施設課長発事務連絡
　　（平成14年12月26日付）

１　調査にいたる経緯

理学部構内で建設中の総合研究棟に付設される電気設備と機械設備の計画が、施設部から提示された。協議を重ね、文京遺跡21・24次調査（調査番号：00003・00105）の調査成果を考慮して、管路部分は表土層部分におさめること、掘削深度が深い枡部分については立会形式の調査を実施することとした。

２　調査の記録

今回の調査地点は６箇所で、調査順に１～６トレンチの名称を与えた（図41、写真131）。

［１トレンチ］（図42右、写真132～134）

AO-58区に位置する。21次調査Ⅰ区南西隅で確認できた縄文前期の遺物溜まり（SX-417）の南側に接する地点であり、城北団地基本層序のⅤ層上面まで掘り下げて調査を行うこととした。

地表下30cmでⅡ層、53cmで灰黄褐色砂礫層があらわれた。径５～20㎜の砂礫の薄いレンズ状ブロックが縞

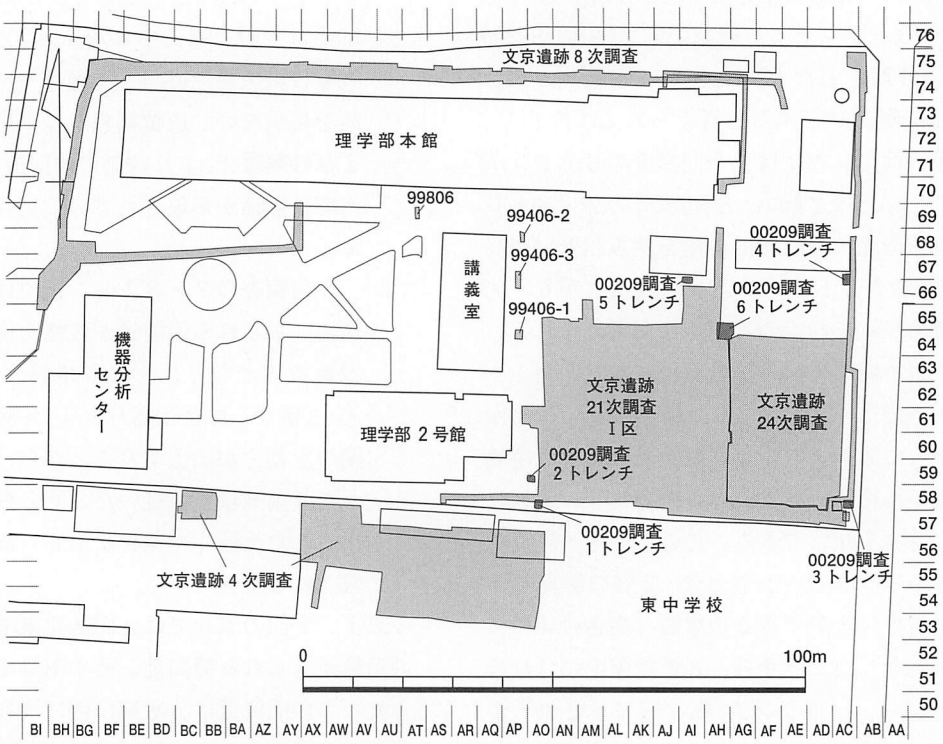

図41　00209調査地点位置図（縮尺 1/1,500）

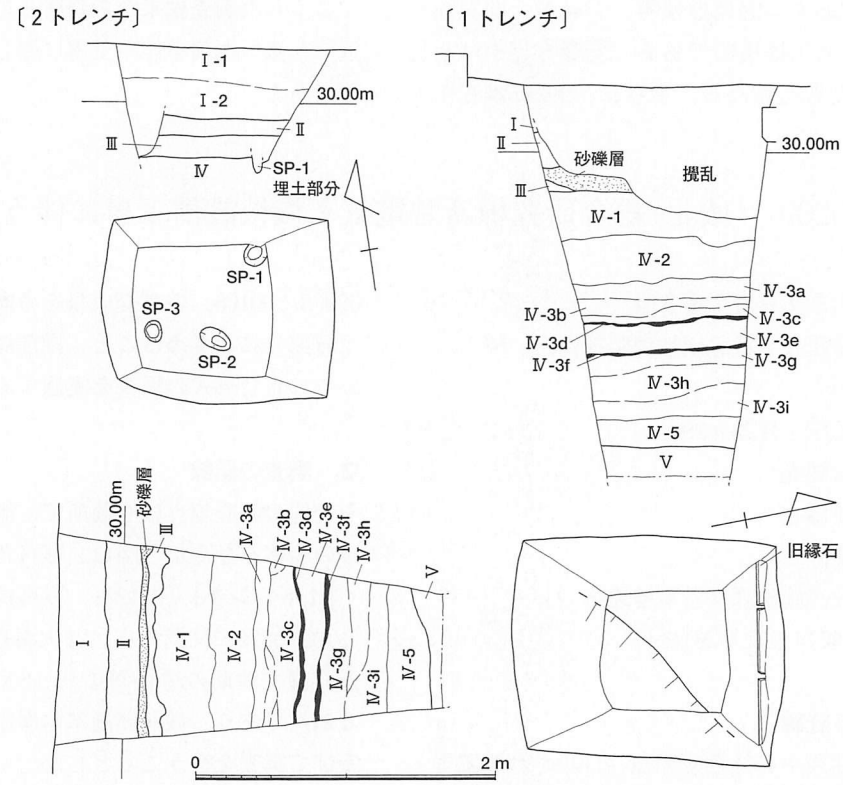

図42　00209調査 1 ・ 2 トレンチ実測図（縮尺 1/50）

写真131　00209調査　調査風景

写真132　00209調査１トレンチ（北東から）

写真133　00209調査１トレンチ南壁土層（北から）

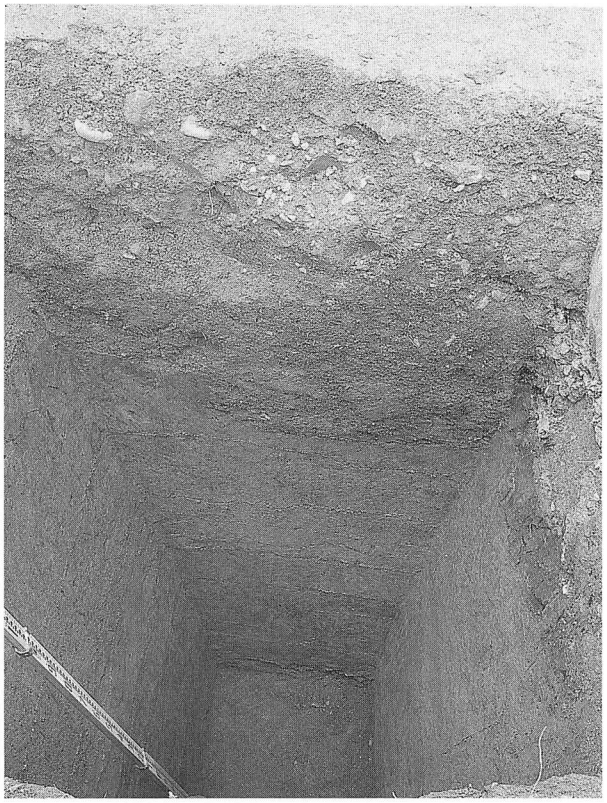

写真134　00209調査１トレンチ西壁土層（東から）

写真135　00209調査２トレンチ遺構検出状況（南西から）

写真136　00209調査２トレンチ東壁土層（西から）

状に重なり、流水によって生じた堆積物である。位置的には、文京遺跡21次調査Ⅰ区南辺で出土したSD-５・６との関係も想定できるが、確実ではない。その下層で、５～12cmの厚さの暗褐色砂質土層である、城北団地基本層序のⅢ層を確認できた。１～２cm大の丸い暗赤褐色シルト塊がまばらに混じる。ただし、北側は攪乱と上層の灰黄褐色砂礫層で削られ、調査区南端で部分的にしか残存していない。Ⅲ層からは土器細片が数点出土したが、遺構は検出できなかった。

地表下60～70cmでⅣ層があらわれた。165～180cmの層厚があり、21次調査の調査成果にあわせて分層を行い、Ⅳ-１・Ⅳ-２・Ⅳ-３・Ⅳ-５層に対応する土層を確認した。Ⅳ-１層はにぶい黄褐色砂質シルト。しまりがある。Ⅳ-２層はにぶい黄褐色砂質土。５㎜大の小さな角礫が多く混じり、ややサクサクした質感である。Ⅳ-3層は黄褐～暗褐色の砂質土～砂礫が縞状に重なる土層群である。３a～３i層に分層できる。Ⅳ-３a層は３～10㎜大の角礫が多く混じるにぶい黄褐色砂質土。わずかに灰色みを帯びる。Ⅳ-３b層は径３～５㎜の砂礫が多く混じる褐色細砂。しまりがある。Ⅳ-３c層はにぶい黄褐色微細砂層。Ⅳ-３d層は暗褐色砂質土。Ⅳ-３e層はにぶい黄褐色の微細砂と暗褐色の微細砂が混じり合う。Ⅳ-３f層は暗褐色砂質土。Ⅳ-３g層は褐色微細砂層とやや灰色みを帯びた微細砂が混じり合う。Ⅳ-3h層は、Ⅳ-３g層と比べて、わずかに灰色みを帯びる。Ⅳ-３i層は、褐色細砂とにぶい黄褐色細砂が混じり合う。Ⅳ-５層は、褐色砂質土からやや灰色みを帯びて白っぽく見える砂層になる。21次調査では、Ⅳ層上半部にあたるⅣ-１・Ⅳ-２層で縄文後期、Ⅳ-５層で縄文前期の遺物溜まりなどを検出したが、今回の調査では、遺構・遺物は出土していない。

Ⅳ層下層では、にぶい黄褐色砂礫層であるⅤ層を確認した。Ⅴ層上面は南東に向かって緩やかに落ち込んでいく。

［２トレンチ］（図42左上、写真135・136）

１トレンチの北側約５ｍのAO-59区に位置する。表土部分のⅠ層は、真砂土のⅠ-1層、オリーブ褐色砂質土層のⅠ-２層が客土されていた。地表下45cmでⅡ層、58cm前後でⅢ層の上面があらわれた。Ⅱ層は角礫や小石混じりのにぶい黄褐色砂質土で、５～10㎜大の黒褐色土塊がまばらに混じる。Ⅲ層は暗褐色砂質土で、やや粘性を帯びる。径５㎜の丸い黒褐色シルト塊が少量混じる。土器片が出土したが、細片化しており、時期・器種は不明。地表下約70cmでⅣ層があらわれる。Ⅳ層は黄褐色砂質シルトで、その上面でSP-１～３の小穴を検出した（写真135）。いずれも、Ⅳ層上面から深さ５～10cmの不整円形の小穴で、埋土はⅢ層と共通する暗褐色砂質土である。SP-１は、調査区壁面の観察では、Ⅲ層下半部分から掘り込まれている。

［３トレンチ］（図43上、写真137・138）

理学部構内南東隅のAC-58区に位置する。地表下48cm前後で、城北団地造成以前の水田層であるⅡ層があらわれた。耕作土層にあたるⅡ-１層と床土層のⅡ-２層に細分できる。３トレンチではⅢ層は見られず、地表下75cmでⅣ層があらわれる。上層部分のⅣ-１層とⅣ-２層を確認できた。Ⅳ-１層はしまりのあるにぶい

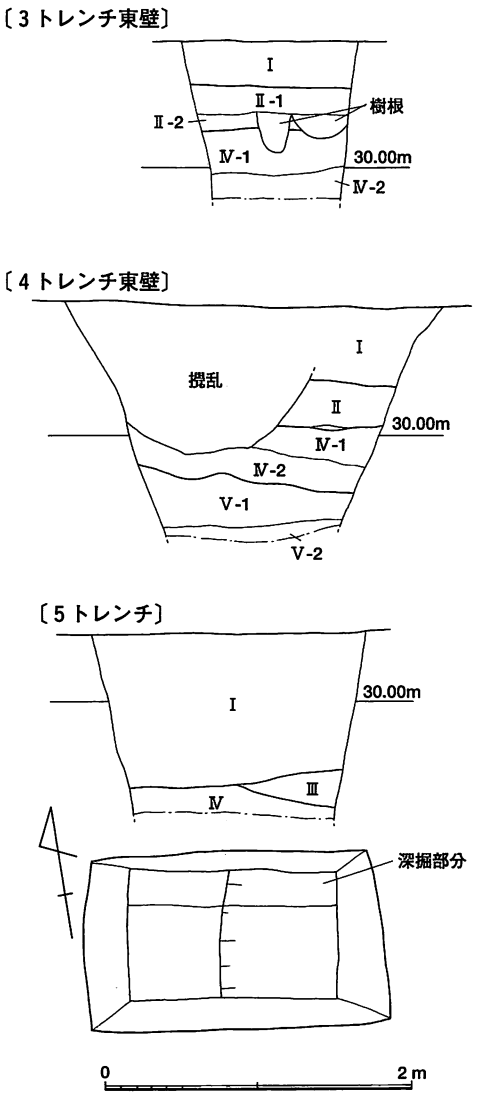

図43　00209調査３・４トレンチ土層断面図および５トレンチ実測図（縮尺 1/50）

写真137　00209調査３トレンチ（西から）

写真138　00209調査３トレンチ東壁土層（西から）

写真139　00209調査４トレンチ（南西から）

写真140　00209調査４トレンチ東壁土層（西から）

写真141　00209調査５トレンチ近景（南西から）

写真142　00209調査５トレンチ（南西から）

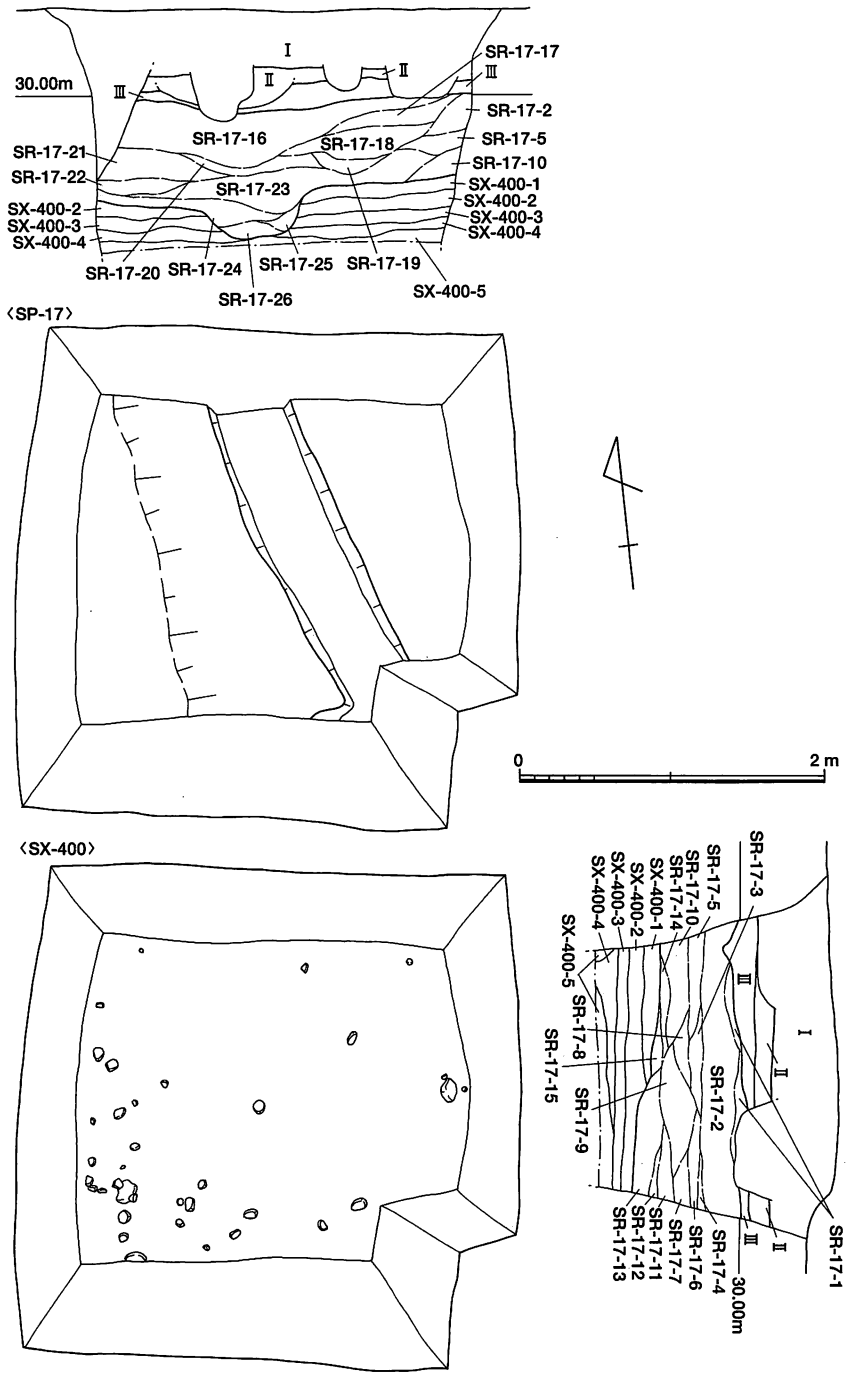

図44　00209調査６トレンチ実測図（縮尺 1/50）

黄褐色砂質シルト。Ⅳ-２層はにぶい黄褐色砂質土である。

３トレンチでは、遺構・遺物は出土していない。

［４トレンチ］（図43中、写真139・140）

理学部西側通用門の南にある温室の南東側のAC-66・67区に位置する。大部分を攪乱されているが、地表下45～50cmで、径３～５㎜の小礫が多く混じるにぶい黄褐色砂質土であるⅡ層を検出した。３トレンチと同じく、Ⅱ層下にⅢ層は見られず、Ⅳ層があらわれる。ただし、層界には、灰白色砂礫の薄いレンズ状ブロックが部分的に見られる。

Ⅳ層は、上部が砂礫混じりのシルト質土のⅣ-１層であるが、下部ほど砂礫および径１～３cmの円礫を含み、Ⅳ-２層に変化する。土質はしまり、二次堆積と

写真143　00209調査６トレンチSR-17（南から）

写真144　00209調査６トレンチSX-400
遺物出土状況（南東から）

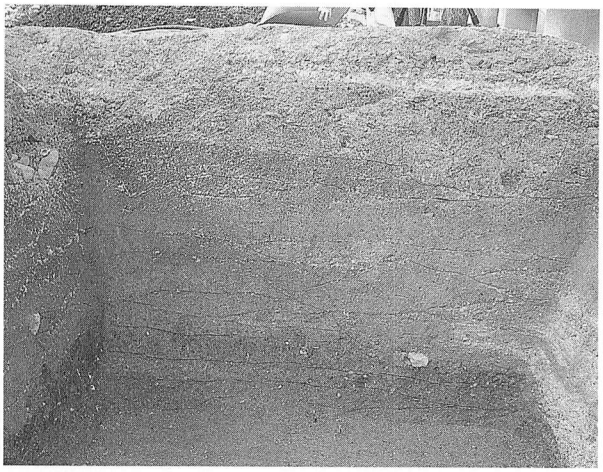

写真145　00209調査６トレンチ東壁土層（西から）

写真146　00209調査６トレンチ北壁土層（南から）

は考えられない。地表下105～120cmでⅤ層を確認した。Ⅴ層の上面は、南に向かって緩やかに落ち込む。Ⅴ層上部のⅤ－１層は灰黄褐色砂礫層。厚さ２～４cmに砂・細砂・砂礫が縞状に互層堆積する。Ⅴ－２層は灰黄褐色砂礫層で、径２～８cmの円礫が多く混じる。

［５トレンチ］（図43下、写真141・142）

動物飼育室の南側のAI-66・67区に位置する。地表下90～100cmまで攪乱が著しいⅠ層が続く。調査区西側では、Ⅰ層直下でにぶい黄褐色砂質シルトのⅣ層があらわれる。Ⅳ層を20cmほど掘り下げると、白っぽくやや砂質が強くなる。このⅣ層上面は、東に向かって緩やかに落ち込み、調査区東半では、その上部に暗褐色粘質シルトのⅢ層が堆積する。Ⅲ層からは土器片などは出土していないが、炭化物片が多く混じる。また、Ⅲ層上部はやや黒みが強い。

［６トレンチ］（図44、写真143～146）

21次調査Ⅰ区北東隅と24次調査北西隅が接するAG・AH-64・65区に位置する。21次調査の成果から、この地点には弥生後期終末に埋没する自然流路SR-17、その下層に縄文晩期終末～弥生前期初頭の土器溜まりであるSX-400の広がりが予想された。

調査では、地表下35cmでにぶい黄褐色砂質土のⅡ層、45cmで３～10mm大の角礫が多く混じる黒褐色質土のⅢ層があらわれ、Ⅲ層直下で21次調査SR-17の広がりを検出した。

SR-17（遺構名は21次調査の遺構名を汎用）は50～82cmの厚さで、下底面には、幅55～60cm、深さ30cmほどの溝状の凹みが南東から北西に向かって延び、その凹みに向かって傾斜する（写真143）。埋土中からは、遺物はほとんど出土していない。埋土は、灰黄褐色・黄褐色・にぶい黄褐色・黒褐色の砂礫や砂質土が薄い

レンズ状となって縞状に堆積する。SR-17埋土は、1～26層に分層できる。

1～15層は調査区東壁で確認した土層群である。1層は5～10㎜大の小礫が多く混じる黄褐色砂礫層。2層はにぶい黄褐色砂質土で、上部は5㎜大の小石が多く混じり、下部はきめ細かい砂質土。3層はやや灰色みの強い灰黄褐色砂層。5㎜大の角のとれた小石が少量混じる。4層はにぶい黄褐色砂細層。5層は暗褐色砂質土。やや粘性があり、下の土層群よりもやや黒みを帯びる。6層はにぶい黄褐色細砂層で、5㎜大の砂礫や小石がまばらに混じる。7層はにぶい黄褐色砂礫層。8層は黒褐色砂質土。やや粘性があり、3㎜大の角ばった小石を少量含む。9層はにぶい黄褐色のきめ細かい砂層。10層はやや粘性を帯びた暗褐色砂質土。11層は5㎜大の小石が多く混じる褐色粗砂層。12層はにぶい黄褐色細砂層。13層は灰黄褐色粗砂層で、1㎝大の角礫や小石をかなり多く含み、下部には5㎝大の円礫が混じる。14層はにぶい黄褐色砂質土で、3～5㎜大の砂礫が多く混じる。15層はにぶい黄褐色粘質土で、下層に堆積する黒褐色粘質土の径5㎝ほどの丸い土塊を含む。

16～23層は、調査区北壁で確認した土層群。16層は小石混じりの黄褐色砂礫層。17層はにぶい黄褐色粗砂層。18層は小石や大きな礫を含むにぶい黄褐色粗砂層。19層は黄褐色細砂層。20層はにぶい黄褐色砂礫層、21層は小石混じりの黄褐色砂礫層。22層は黄褐色細砂層。23層は黄褐色砂質土と小石が混じる砂礫層。24層は西側から流れ込むにぶい黄褐色砂礫層。25・26層はSR-17下底面の溝状の窪みを埋める堆積物で、25層は黄褐色砂礫層。26層は粗砂と細砂が薄いレンズ状になって縞状に重なる。

SR-17の下層では、21次調査で検出できた縄文晩期終末～弥生前期初頭の土器溜まりSX-400（遺構名は21次調査の遺構名を汎用）の広がりを確認した。21次調査で確認していた土層群に分層し精査した。1層は粘性が強い暗褐色粘質土層。2層は粘性が強い黒褐色粘質土層で、3～20㎜大の小石・礫がまばらに混じる。3層はにぶい黄褐色粘質土で、2～5㎜大の角張った小石を少量含み、下部ほど多くなる。4層は2～5㎜大の小石が多く混じる黒褐色砂質土層。5層はにぶい黄褐色砂質土で、5～30㎜大の礫が多く混じる。以上の土層群の中で、1層は調査範囲の西側でSR-17に削り取られ、部分的にしか残らず、出土遺物も少ない。2・3層は比較的厚く、10数点の土器片や円礫が出土した（写真144）。4層からは1点の土器片が出土したのみである。最下層の5層からは、南西部にかたまって土器片と円礫が出土した。しかし、全体に遺物量は少なく、SX-400の東への広がりは、6トレンチでほぼ途切れると考えられる。

3　調査のまとめ

今回は、調査範囲が狭く、調査地点も散在し、出土した遺構や遺物も少ないが、文京遺跡21次調査の成果に補足を加えることができた。

まず、1トレンチでは、21次調査Ⅰ区南西部のAN・AO-58～60区のⅣ-1・Ⅳ-2・Ⅳ-3・Ⅳ-5層に対応する土層を確認した。ただし、いずれの土層からも遺構・遺物は出土していない。とくに、Ⅳ-5層においては、21次調査SX-417に続く縄文前期の遺物溜まりを想定していたが、遺物出土は皆無で、SX-417はAN・AO-58北半部までしか広がらないことが明らかにできた。

4トレンチでは、Ⅴ層の上面が南に向かって緩やかに落ち込んでいくことを確認した。これに対応するⅤ層の北側への落ち込みは、21次調査Ⅲ区AB・AC-69区で確認されており、南北幅13～14ｍの舌状の高まりがあり、これに規制された弥生後期終末に埋没する自然流路SR-17の最大幅を確定できる。また、5トレンチでは、Ⅳ層上面が東に向かって緩やかに落ち込み、調査範囲の東半部には上層に暗褐色粘質シルトのⅢ層が堆積している。21次調査Ⅰ区SR-17の西端部と考えられる。

6トレンチでは、21次調査自然流路SR-17と、縄文晩期終末～弥生前期初頭の土器溜まりであるSX-400の延長部分を把握できた。とくに、今回の調査では、SX-400に対応する土層群からの出土遺物は少なく、調査範囲の西半部に偏った分布を見せる。SX-400の東側への広がりは、6トレンチからそれほど延びないものと考えられる。

なお、6トレンチ出土遺物については、文京遺跡21次調査の報告とともに、詳細を報告したい。

4　調査後の対応

以上の成果をあげ、以後の慎重工事を依頼して、調査を終了した。　（田崎）

00210 （城北）情報教育棟・放送大学愛媛学習センター新営電気設備工事に伴う調査

調 査 地 点　松山市文京町３番
　　愛媛大学城北団地（図１）
調 査 面 積　1.3㎡
調 査 期 間　2003年１月15日
調査の種別　立会調査
調 査 担 当　吉田広
調 査 補 助　宮崎直栄
依 頼 文 書　施設部施設課長発事務連絡
　　（平成15年１月15日付）

1　調査にいたる経緯

埋蔵文化財調査室では、情報教育棟新営工事に先だって、建設範囲について事前に文京遺跡25次調査（調査番号：00202）として、全面調査を行ったところである。ただし、建物建設に伴う掘削深度が地表下300cmに留まることから、それ以下の遺物包含層については調査対象としないまま、調査を終了していた。

ところが、発掘調査終了後着手した情報教育棟・放送大学愛媛学習センター新営電気設備工事において、総合情報処理センターに伴う接地極の更新の必要が生じた。そのため、新営建物基礎部分を外した位置に、現地表下300cmの現状からさらに100cm掘削して、新たな接地極埋設を行うこととなった。埋蔵文化財調査未到達の深度であり、埋蔵文化財調査室では、急遽立会調査を実施することとした。

2　調査の記録（図45、写真147）

調査地点は、総合情報処理センター建物北西コーナーの北東約４ｍ、建物基礎の間になる。既往調査との対応では、18次調査（調査番号：99802）範囲内である。情報教育棟新営基礎工事に併せて、地表下約300cmで整地・砕石敷設した面からの掘削となった。

砕石敷設の厚さは約10cm。その下にまず、径0.5㎜前後の砂粒からなり、しまりの弱い、にぶい黄色砂層（①層）が約30cmある。鉄分の沈着面を挟んで、径0.5～３㎜の砂粒をベースに、１～20cm大の円礫を多数含む、しまりの弱い黄褐色砂礫層（②層）となり、厚さは約30cm。さらに下層には、径１㎜前後の砂粒からなり、しまりの弱い、にぶい黄色砂層（③層）が、25cm以上堆積する。掘削深度はこれまでで標高24ｍを切り、地表下400cmに達している。

25次調査では、未掘のまま残した古代の自然流路内堆積がかなりの範囲で広がっている。ただし、調査地点付近の25次調査区南西隅部では、直上に城北団地基

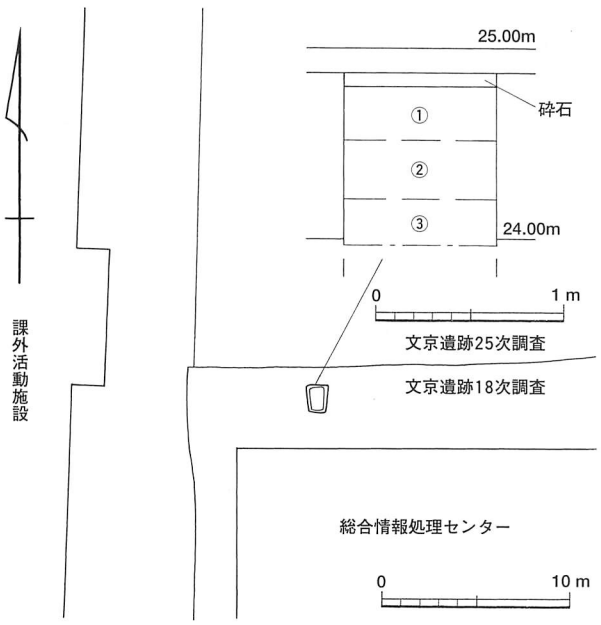

図45　00210調査地点位置図および土層柱状図
（縮尺 1/400、1/40）

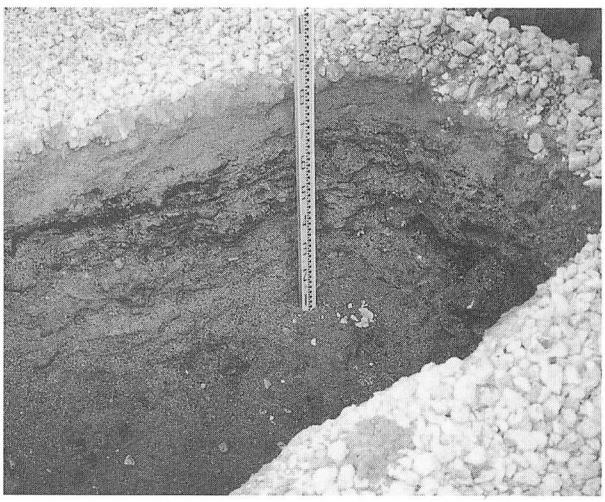

写真147　00210調査地点（北西から）

本層序Ⅲ・Ⅳ層の再堆積が認められる砂礫層の上面を検出し、古代以前の自然流路の川岸と判断していた。①～③層は、この砂礫層より下位にあり、しまりが弱いものの、遺物を出土してない。したがって、砂礫層上面を城北団地基本層序Ⅴ層上面として、①～③層がⅤ層内の細分層である可能が高い。

3　調査後の対応

以後の慎重工事を依頼して、調査を終えた。（吉田）

00211　（城北）総合研究棟等改修電気設備工事に伴う調査

調 査 地 点　松山市文京町３番
　　愛媛大学城北団地（図１）
調 査 面 積　1.9㎡
調 査 期 間　2003年３月３・４日
調査の種別　立会調査
調 査 担 当　田崎博之・三吉秀充
依 頼 文 書　施設部施設課長発事務連絡
　　（平成15年２月24日付）

1　調査にいたる経緯

総合研究棟（旧工学部本館）改修電気設備工事に伴って、統合車庫西側２箇所に外灯を設置することとなった。施設部からは、工事に際して、管路部分が地表下84㎝、外灯基礎部分は130㎝まで掘削が及ぶことが示された。周辺の既往調査（調査番号：98802、99511）成果から、埋蔵文化財に影響が及ぶことが予想され、立会調査を実施することとした。

2　調査の記録

統合車庫南端の西側が１トレンチ、総合研究棟北東コーナー部が２トレンチである（図46）。

［１トレンチ］（図47左、写真148）

トレンチ東半部では、道路面下50㎝で共同溝の上面を検出した。西半部は、予定掘削深度である地表下130㎝まで調査を行ったが、共同溝設置に伴う攪乱が続く。ただし、共同溝設置に伴う攪乱の西端は、調査範囲内で確認できなかった。

［２トレンチ］（図47右、写真149）

トレンチ北端の道路面下50㎝で共同溝の上面を検出した。共同溝設置に伴う攪乱の立ち上がりは、共同溝の南端から南へ約１ｍの地点で検出できた。道路面下70㎝まで調査を行い、城北団地基本層序のⅣ層まで攪乱が及ぶことを確認した。

トレンチ南半部は、瓦礫を伴ったⅠ層が道路縁石を基準として地表下30～50㎝まで続く。城北団地基本層序Ⅱ層はにぶい黄褐色シルトで、丸い黄灰色シルトのブロックが混じる。遺物は出土していないが、既往の調査成果から、近世の水田層と考えられる。地表下40㎝で、城北団地基本層序のⅢ層を確認できた。Ⅲ層は灰褐色系の土色であるが、砂粒の入り具合から、Ⅲ-1層とⅢ-2層に分層が可能である。Ⅲ-1層は灰黄褐色砂質土。きめは細かく、径１㎜前後の砂粒から小指先大の円礫が多く混じる。砂粒、砂礫は薄い層状をなし、面的に広がる。Ⅲ-2層は、灰褐色砂質土。きめが細かく、径１～２㎜前後の砂粒が混じるものの、Ⅲ-1層に比べて砂粒の割合は少なく、不定形の炭化物がごく少量出土。Ⅲ-2層からは弥生土器片がまばらに数点出土しているが、土器の表面が摩滅し、時期の詳細は不明。Ⅲ層の下、地表下65㎝で城北団地基本層序Ⅳ層を確認した。

3　調査のまとめ

２トレンチでは城北団地基本層序のⅢ層を検出したが、Ⅲ-1層は砂粒や砂礫を多く含み、堆積状況から洪水砂である可能性が高い。一方、Ⅲ-2層は、色調などはⅢ-1層に共通するものの、砂粒・砂礫は少ない。城北団地内に網目状に延びる谷状の窪地（旧河道）の最上層に、同様の土層が堆積していることが知られている（調査番号：99602-６）。２トレンチ周辺にも谷状の窪地が延びる可能性が高い。

4　調査後の対応

その後、慎重工事を依頼して、調査を終えた。

（三吉）

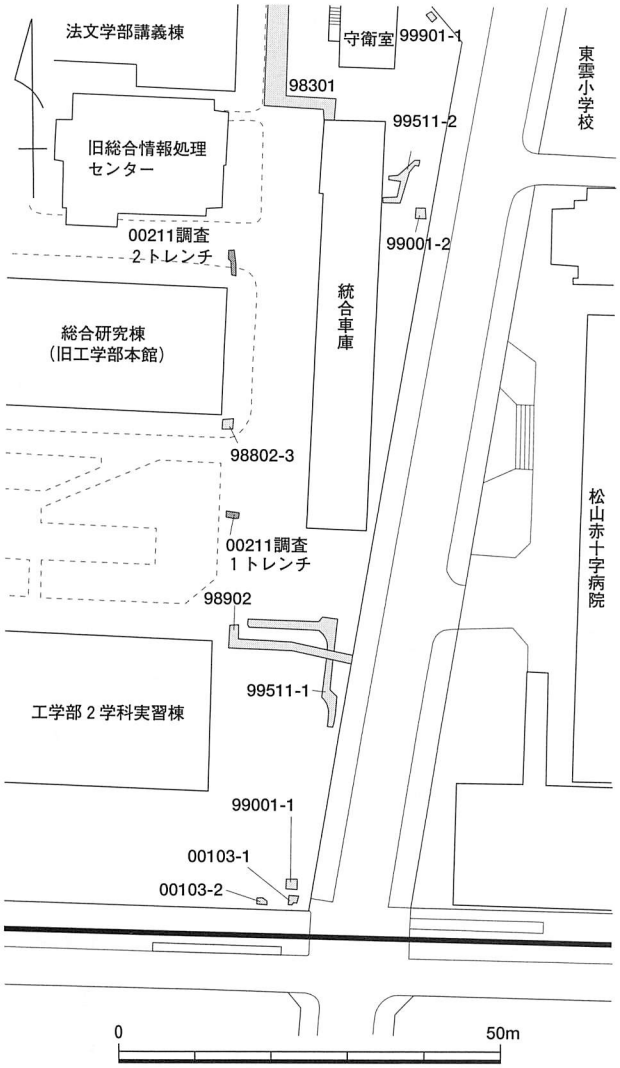

図46　00211調査地点位置図（縮尺 1/1,000）

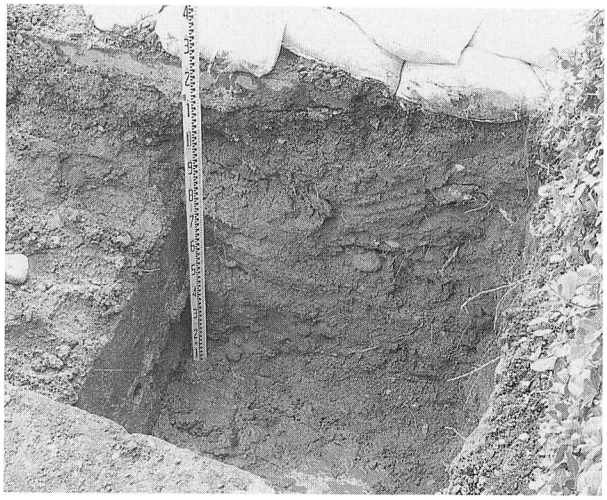

写真148　00211調査1トレンチ（北から）

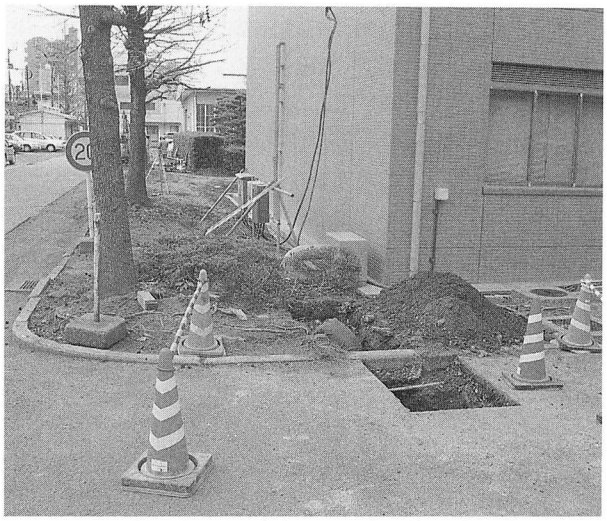

写真149　00211調査2トレンチ（北から）

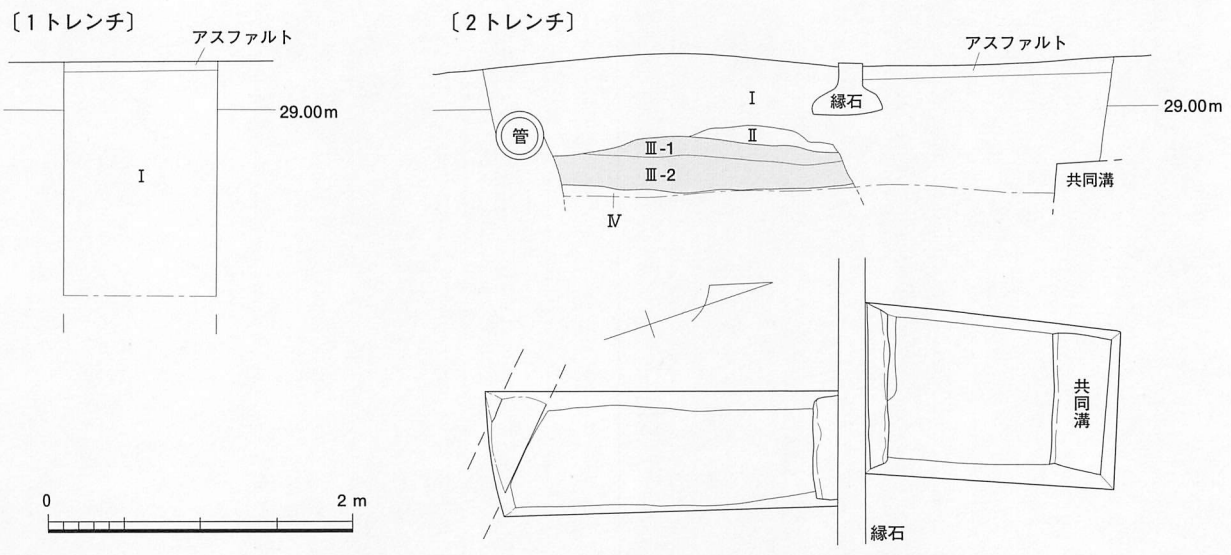

図47　00211調査1トレンチ土層柱状図および2トレンチ実測図（縮尺 1/40）

Ⅳ　構内の遺跡

1　調査の手続き

埋蔵文化財調査室では、愛媛大学構内における地盤掘削を伴う工事について、規模の大小にかかわらず、施設部を通じて工事内容の報告を求めている。通常、年度当初に工事計画の照会を、施設部を通じて行っているが、年度途中で急遽工事計画が持ち上がることも少なくない。これら工事すべてに対して、埋蔵文化財調査室では、周辺の既往調査成果等から、工事が埋蔵文化財に及ぼす影響を判断し、その内容に応じた対応を取っている（図48）。

まず、工事計画段階から連絡調整が図られる場合には、埋蔵文化財へ影響を及ぼさない、あるいは最小限に留める工法変更等を講じることができる。また、埋蔵文化財への影響を判断する材料が乏しければ、事前に試掘調査を行うこともある。埋蔵文化財保護の観点からだけでなく、工事時間・費用の軽減からも、工事計画段階からの連絡調整の意義は大きい。

その上で決定した具体的工法に基づき、埋蔵文化財発掘調査の要否及び実施の依頼を、工事担当部局から埋蔵文化財調査室が受け、調査の要否を判断することになる。

埋蔵文化財に影響がないと判断した場合は、埋蔵文化財調査室から、調査不要として慎重工事の依頼が担当部局に回答され、施工に及ぶ。

一方、調査必要ながら、小規模工事で埋蔵文化財調査にあまり時間を要さないと判断した場合、掘削工事に伴って調査を実施する立会調査を行うことになる。そして、先の依頼に対する回答としては、立会調査結果の報告が、埋蔵文化財調査室から担当部局に提出される。

他方、工事規模が大きく、埋蔵文化財調査にもかなりの時間を要すると判断した場合は、工事に先立ち、本格調査を実施することになる。本格調査にあたっては、具体的発掘調査計画の作成、それに基づく設計・積算・契約、さらには文化財保護法に基づいた発掘調査関係書類の関係官庁への届出がなされて、初めて調査に着手することになる。また、調査終了後にも、発掘調査関係書類の届出や実績報告が関係官庁になされねばならない。そして、調査依頼を受けた担当部局に対しても、先の依頼に対する回答として、調査結果の概要報告が、埋蔵文化財調査室から提出される。

以上で実地の発掘調査は終了するが、発掘調査によって出土した資料の整理・報告が、埋蔵文化財調査室の業務として継続される。記録保存としての発掘調査の終了は、この正式報告書の刊行によって初めて完了するのである。さらに、その後の資料保管も埋蔵文化財調査室が行っており、これに伴った資料公開・利活用についても、埋蔵文化財調査室が対応している。

（吉田）

2　遺跡の把握状況

上記した手続きにより繰り返されてきた愛媛大学構内における調査は、2003年12月末時点で、161件を数える（表８）。これらの結果、愛媛大学構内の遺跡について、各団地毎にかなり具体的に状況を把握することができるようになってきた。と同時に、今後の工事等における埋蔵文化財への影響を判断する有用なデータとして機能し、遺跡の現状保存・保護をはかるグリーンゾーンの範囲指定根拠ともなっている。

以下、各団地毎に、遺跡の把握状況を概述する。

（１）　城北団地

城北団地には、法文学部・教育学部・工学部等が所在する松山市文京町３番と、理学部他の所在する松山市文京町２番５号、そして大学事務局他が所在する松山市道後樋又10番13号が含まれる。

1951年頃から遺物が採集され、文京遺跡として埋蔵文化財包蔵地とされており、大学構内では１～３・５～28次にわたる本格・確認調査と試掘・立会調査で、縄文時代前期から近世に及ぶ集落遺跡・生産遺跡であることが判明している。

とりわけ、文京町３番構内においては、その西南部を中心に、全国的にも有数の弥生時代中期後葉～後期中葉の集落が展開し、一部には古墳時代後期の集落も重なる。またその北側には、古代末から中世（10～13世紀）の水田層が確認されている。この他にも、縄文時代前～後期の遺跡や、中世（14世紀）の水路、近世（18世紀）の水路も確認され、さらには戦前の練兵場

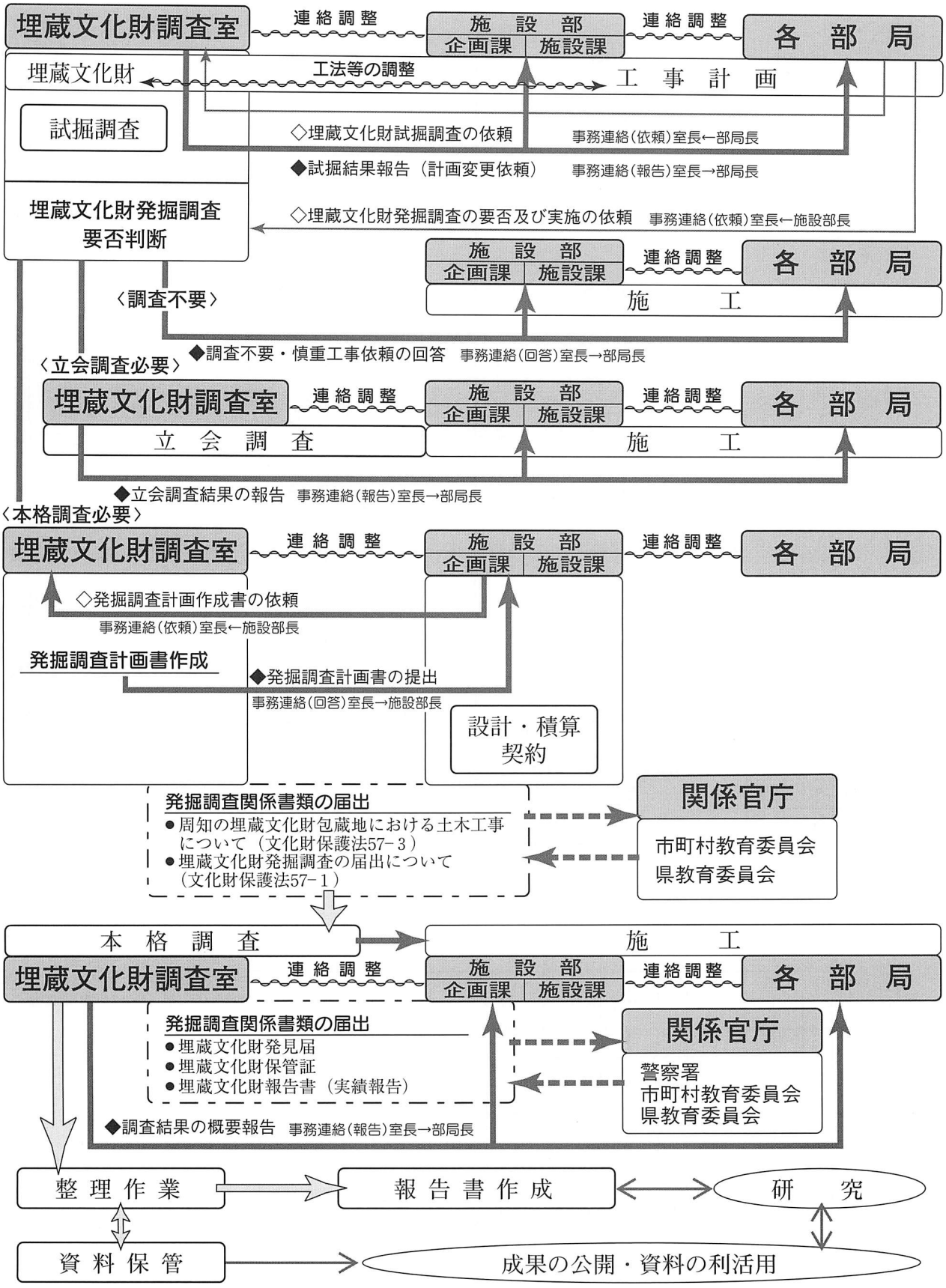

図48　埋蔵文化財調査に関わる手続きフローチャート

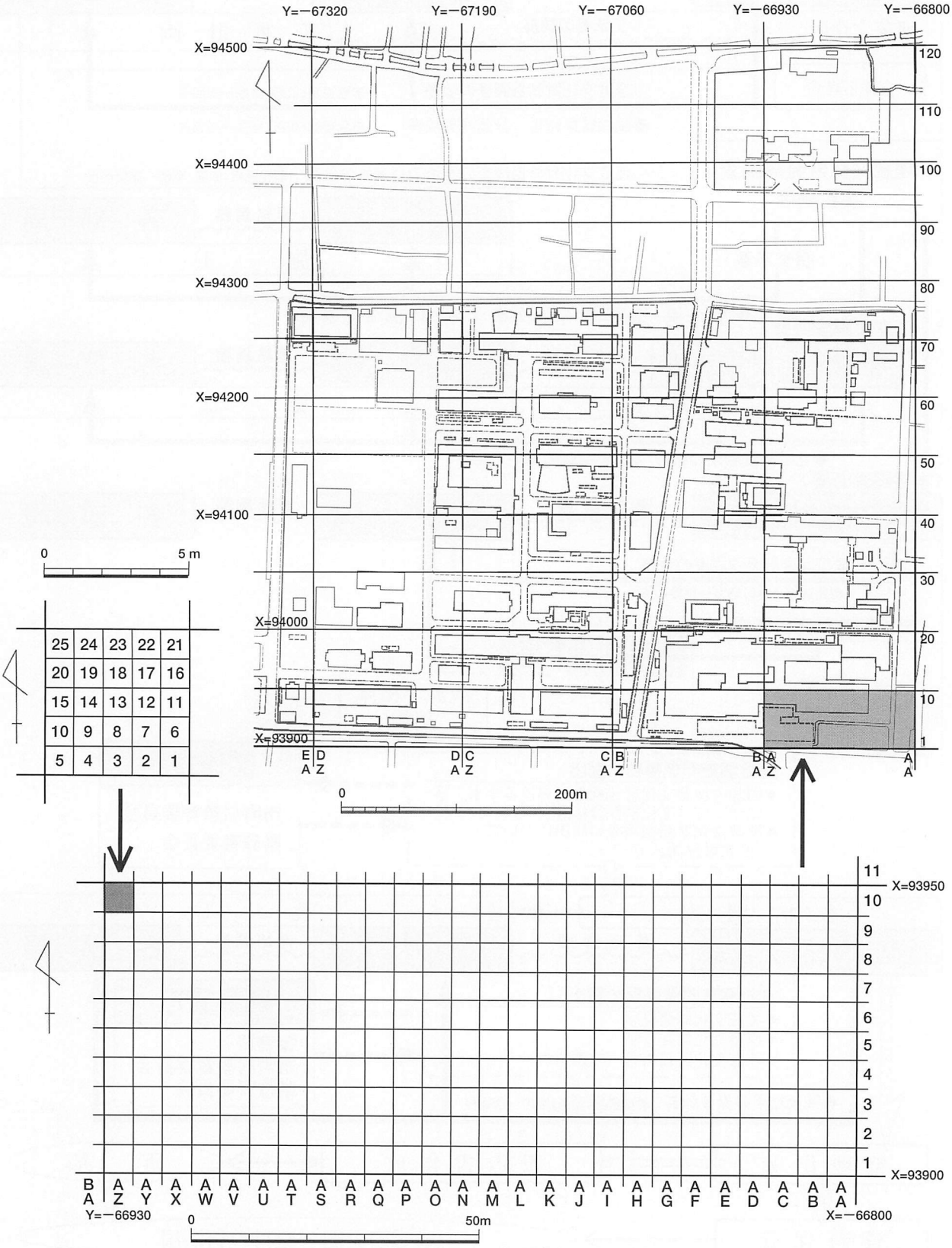

図49　城北団地の区割（縮尺 1/5,000、1/1,000、1/200）

時代の遺構も見出すことができる。他方、理学部構内においては、弥生時代や古代・中世の遺構も存在するが、縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての遺跡が、特徴的に存在する。事務局構内については、これまで数回の調査を行ってきたが、明確な包含層・遺構は確認していない。

なお、このような展開を見せる文京遺跡のうち、弥生時代中期後葉～後期中葉の集落の主要部分について、グリーンゾーンとして積極的に活用を図っていくことが明らかにされている。具体的には、大型掘立柱建物群が確認されている、法文学部本館西側駐車場周辺1,270㎡と、総合情報処理センターと工学部１号館間の旧グラウンド部分5,525㎡である。

城北団地の調査にあたっては、独自の区割と基本層序を設定している。1998年に設定した区割は、日本測地系（Tokyo Datum）平面直角座標系第Ⅳ系の、(X=93900, Y=－66800）を基点として、東から西へ向かって５ｍおきに、AA・AB……AZ・BA・BB……ED・EE・EF、南から北へ向かって５ｍおきに、１・２・３……118・119・120とし、両者を組み合わせた５ｍ方眼の調査区画によるものである。さらに必要に応じて、この区画内を１ｍ方眼に分け、南東隅から西に１～５、そして北側列を６～10と、北西隅に到る25区画に細分する。したがって、この１ｍ方眼を示す場合は、「DC27－14」のように呼称することとなる(図49)。

城北団地内の基本層序については、上位からⅠ～Ⅴ層を設定している。その上で、各調査では大区分を基本層序に準拠し、それを構成する細かな土層ごとに枝番号を付けている。基本層序の内容は以下の通り。

Ⅰ層：表土層にあたる瓦礫を含む造成土部分。
Ⅱ層：造成以前の灰色系の近世～近代の水田層。
Ⅲ層：弥生時代～古墳時代の遺構・遺物を包含する黒色～暗褐色系の土層。
Ⅳ層：黄褐色系のシルト～砂質土層で、下部には礫が混じる。縄文時代の遺構・遺物が確認されている。
Ⅴ層：Ⅳ層下の花崗岩を主体とする砂礫ないし礫層である。

（２）　樽味団地

松山市樽味３丁目５番７号の樽味団地には、農学部・附属高等学校・附属研究施設等が所在する。

団地西部は、樽味遺物包含地として埋蔵文化財包蔵地とされ、1987年の１次調査以降、樽味遺跡として団地内は調査・報告されている。以後７次に及ぶ本格調査と小規模な試掘・立会調査により、弥生前期から中世に及ぶ集落遺跡であることが判明している。

具体的には、まず団地西半部において中世（14～16世紀）の方形区画を有する集落が面的に広がる。さらに団地北西部では、弥生前期の集落と古墳時代後期の集落も確認されており、後者は団地周辺の樽味立添遺跡や樽味高木遺跡と一連の遺跡の可能性が高い。一方、団地南部には、古代末から中世（10～14世紀）に埋没する、西流する自然河道が存在する。附属農業高等学校の所在する団地東部では、４次調査で古代（８世紀）に埋没する、南流する自然河道や、古代末から中世（10～12世紀）の遺物包含層が存在する。団地西半とは若干異なる時代の遺跡が展開している可能性が高い。

樽味団地の調査にあたっては、団地全域にわたる独自の区割設定はしていないが、基本層序は設定している。上位からⅠ～Ⅴ層で、各調査では大区分を基本層序に準拠し、それを構成する細かな土層ごとに枝番号を付けている。基本層序の内容は以下の通り。

Ⅰ層：表土層にあたる瓦礫を含む造成土部分。
Ⅱ層：造成以前の灰色系の近世～近代の水田層。
Ⅲ層：遺物を包含する黒色～黒褐色系の土層。
Ⅳ層：黄褐色系のシルト～砂質土層で、下部には礫が混じる。
Ⅴ層：Ⅳ層下の花崗岩を主体とする砂礫層ないし礫層。

（３）　鷹子団地

松山市鷹子町40番に所在する鷹子団地には、国際交流会館が所在する。

1987年に、国際交流会館建設に先立って、鷹子遺跡１次調査（調査番号：98701）が行われ、弥生時代中期後葉、古代（７・８世紀）、中世（13・14世紀）の遺構・遺物が確認された。この調査によって、団地内の大半を調査したことになるが、建物周辺には、なお遺跡の残存することは間違いない。

（４）　北吉井団地

松山市桑原２丁目９番８号の北吉井団地には、教職員宿舎が所在する。

1994年に東長戸他環境整備（駐車場整備・配管設置）工事による立会調査（調査番号：99401）、1997年に北吉井宿舎屋外排水管改修工事による本格調査（調査番号：99710）と北吉井宿舎屋外ガス管改修工事による立会調査（調査番号：99711）が行われている。その結果、古墳時代中～後期（５～７世紀）、古代（10世紀）の集落遺跡が団地全面に展開することが確認され、上記３次の調査を桑原西稲葉遺跡３～５次調査として報告している。なお、北吉井団地内の基本層序は、北方約150ｍに位置する樽味団地の基本層序が適用できる。

（5） その他の団地

上記した以外の団地では本格調査が行われておらず、確認調査や小規模な試掘・立会調査に留まるか、あるいは全く調査の行われたことのない団地である。

① 持田団地

松山市持田町１丁目５番22号にあたり、教育学部附属中・小・幼・養護学校が所在する。

1996年に、団地北東側の隣接した地点で松山市埋蔵文化財センターが中世（14世紀前後）の水田跡を調査している。大学構内でも、その水田層に相当する土層が持田団地の北半部に広がることが、1993年度の確認調査（調査番号：99309）と1997年度の試掘調査（調査番号：99706）によって確認されている。なお、団地南半部は石手川氾濫原が及んでいる。

② 御幸団地

松山市御幸町２丁目３番15号、学生寄宿舎が所在する。2000年度の立会調査（調査番号：00008）で、団地西半部において、中世（13・14世紀前後）の水田層が広がる可能性の高いことを確認している。

③ 米野団地

松山市米野町乙184番地１号、農学部附属演習林が所在する。調査歴がなく、埋蔵文化財の有無は未確認。

④ 梅津寺団地

松山市梅津寺1861番地、大学課外活動施設が所在する。調査歴がなく、埋蔵文化財の有無は未確認。

⑤ 北持田団地

松山市北持田町128番地１号、職員宿舎が所在する。調査歴がなく、埋蔵文化財の有無は未確認。

⑥ 東長戸団地

松山市東長戸４丁目３番１号、教職員宿舎が所在する。1994年度の立会調査（調査番号：99402）によって、団地東半部を中心として遺跡が営まれている可能性が指摘できる。

⑦ 喜与団地

松山市喜与町１丁目８番８号、教職員宿舎が所在する。調査歴がなく、埋蔵文化財の有無は未確認。

⑧ 山越団地

松山市山越４丁目11番10号にあたり、大学課外活動施設の野球場・馬場・サッカーグラウンド等の施設がある。

1992年度と2002年度の構内遺跡確認調査（調査番号：99205・00208）等によって、団地が丘陵部裾から延びる段丘の落ち際に位置することが明らかとなっている。団地北東隅には、弥生時代の遺構が存在する微高地があり、その南側の旧河道の埋没過程では、縄文時代晩期～弥生時代の包含層が堆積し、その上に水田層が認められる。一方、団地西半部でも、古墳時代に埋没した自然河道が確認されている。

⑨ 中島団地

温泉郡中島町大字小浜字瀬戸木の、理学部附属臨海実験所が所在する団地。調査歴がなく、埋蔵文化財の有無は未確認。

⑩ 重信団地

温泉郡重信町大字志津川の、医学部および附属病院が所在する団地である。これまで数回の試掘調査あるいは確認調査を行ってきたが、遺跡の存在は確認されていない。ただし、団地東北部分には遺跡が残る可能性がある。

⑪ 溝辺団地

松山市溝辺町乙298番地、農学部附属高等学校の校舎がある。調査歴がなく、埋蔵文化財の有無は未確認。

⑫ 横河原団地

温泉郡重信町大字横河原字横川、教職員宿舎が所在する。現在の重信川の氾濫原上にあり、埋蔵文化財は分布していない。

⑬ 北条団地

北条市八反地字伊利甲498番地、農学部附属農場が所在する。調査歴はないが、団地の一部は、萩尾古墳群あるいは八竹山遺跡として埋蔵文化財包蔵地に含まれている。

⑭ 津田山団地

松山市北斎院町津田山の、教育学部附属養護学校施設が所在する団地。２件の試掘調査（調査番号：99102・99411）を実施しているが、埋蔵文化財の分布は確認されていない。

⑮ 伊予団地

伊予市森字下新田729番地、大学課外活動施設が所在する。調査歴がなく、埋蔵文化財の有無は未確認。

⑯ 大井野団地

松山市大井野町乙145番地２号、農学部附属演習林が所在する。調査歴がなく、埋蔵文化財の有無は未確認。

⑰ 東野団地

松山市東野４丁目222番地、農学部附属演習林が所在する。調査はなされていないが、団地および周辺は、お茶屋台古墳群として埋蔵文化財包蔵地とされている。

（吉田）

表８　愛媛大学構内における調査一覧（2003年12月末時点）

調査番号	遺跡名次数	団地	工　事　名	調査種別	調査担当	面積（㎡）	調査期間	文献
EU−97501	文京遺跡１次	城北	工学部海洋工学科校舎新営工事	本格	長井数秋(註1)	750	19750801～19750824	1
EU−98001	文京遺跡２次	城北	工学部資源化学科校舎新営工事	本格	西尾幸則(註1)	600	19800708～19800930	5
EU−98101	文京遺跡３次	城北	法文学部校舎新営工事	本格	西尾	800	19820110～19820325	5
EU−98301	文京遺跡	城北	雨水管･汚水管･ガス管埋設工事	立会	西尾	1,374		
98302	文京遺跡	城北	教育学部校舎建設工事	立会	西尾	−		
EU−98401	文京遺跡５次	城北	工学部危険物貯蔵庫新営工事	本格	西尾	18	19841026～19841028	5
EU−98601	文京遺跡６次	城北	城北地区基幹整備事業	本格	下條信行(註2)	99	19861000	
98602	文京遺跡７次	城北	法文学部校舎増築工事	本格	下條	142	19860800～19860900	
98603	文京遺跡８次	城北	城北団地基幹整備事業	本格	下條	854	19861125～19870218	3
98604	樽味遺跡	樽味	連合農学研究科校舎新営工事	試掘	下條	5	19870109	
98605	鷹子遺跡	鷹子	国際交流会館新営工事	試掘	下條	47	19870116	
EU−98701	鷹子遺跡１次	鷹子	国際交流会館新営工事	本格	宮本一夫	962	19870720～19870920	2
98702	樽味遺跡	樽味	連合農学研究科校舎新営工事	試掘	下條信行	18	19870820～19870821	7
98703	樽味遺跡	樽味	附属高等学校課外活動施設新営工事	試掘	下條	6	19870820	7
98704	樽味遺跡１次	樽味	連合農学研究科校舎新営工事	本格	宮本	684	19871028～19871217	2
98705	文京遺跡	城北	城北地区プール廻り浄化装置増設工事	試掘	宮本	2	19871113	7
98706	文京遺跡９次	城北	城北地区プール廻り浄化装置増設工事	本格	宮本	62	19880111～19880129	3
EU−98801	文京遺跡10次	城北	工学部情報工学科校舎新営工事	本格	宮本	1,075	19880919～19890303	4
98802	文京遺跡	城北	城北地区基準点等設置工事	試掘	宮本	5	19881013	7
98803	文京遺跡	城北	工学部講義棟高圧ケーブル埋設工事(その１)	試掘	宮本	2	19881208	7
98804	文京遺跡	城北	工学部講義棟高圧ケーブル埋設工事(その２)	試掘	宮本	1	19881212	7
98805	文京遺跡	城北	工学部情報工学科校舎排水施設取設工事	立会	宮本	6	19890207	7
98806	文京遺跡	城北	工学部情報工学科校舎給水施設取設工事	立会	宮本	3	19890209～19890210	7
EU−98901	文京遺跡11次	城北	法文学部講義棟身障者用昇高機取設工事	本格	宮本	85	19890801～19890829	3
98902	文京遺跡	城北	城北団地電波障害用の外線工事	立会	宮本	2	19900303	7
EU−99001	文京遺跡	城北	城北団地囲障･教育学部自転車置場新設工事	試掘	宮本	3	19900808	7
EU−99101	樽味遺跡２次	樽味	農学部研究実験棟新営工事	本格	田崎博之	506	19920107～19920228	6
99102		津田山	教育学部附属養護学校日常生活訓練施設建設	試掘	下條	13	19910608	7
99103	文京遺跡	城北	城北団地囲障(Ⅱ期)改修及び外灯改修工事	試掘	下條	36	19910821	7
EU−99201	樽味遺跡	樽味	農学部屋外ガス本管改修工事	立会	田崎	6	19920526	7
99202	文京遺跡	城北	城北地区東側囲障改修工事	試掘	田崎	3	19920730	7
99203	樽味遺跡	樽味	附属図書館農学部分館新営工事	試掘	田崎	1	19920826	7
99204		重信	医学部附属病院病歴室新営工事(その１)	試掘	田崎	3	19920826	7
99202	文京遺跡	城北	城北地区東側囲障改修工事	試掘	田崎	3	19920730	7
99205	樽味遺跡	山越	1992年度構内遺跡確認調査(その１)	確認	田崎	57	19920828	7
99206	樽味遺跡	樽味	農学部拓翠寮他自転車置場新設工事(その１)	立会	田崎	3	19920921	7
99207	文京遺跡	樽味	農学部拓翠寮他自転車置場新設工事(その２)	立会	田崎	2	19920921	7
99208	文京遺跡	城北	城北団地外灯設備改修工事	立会	田崎	2	19930126	7
99209	持田･岩崎遺跡	持田	教育学部附属小学校給水設備工事	立会	田崎	11	19931026	7
99210		重信	医学部附属病院駐車場取設工事	試掘	田崎	40	19921027	7
99211		重信	1992年度構内遺跡確認調査(その２)	確認	田崎	55	19930120～19930121	7
99212	文京遺跡	城北	城北団地情報通信設備工事	立会	田崎	12	19930308～19930309	7
99213		重信	医学部附属病院病歴室新営工事(その２)	試掘	田崎	7	19930322	7
99214	樽味遺跡	樽味	樽味団地自転車置場取設その他工事	立会	田崎	33	19930323	7

調査番号	遺跡名次数	団地	工　事　名	調査種別	調査担当	面積(㎡)	調査期間	文献
EU−99215	文京遺跡	城北	城北団地交通規制遮断機取設工事	立会	田崎	2	19930324	7
EU−99301		重信	医学部看護学科校舎新営工事	試掘	田崎	20	19930524	7
99302	樽味遺跡	樽味	附属図書館農学部分館新営工事(樹木移植)	立会	田崎	14	19930624～19930625	7
99303	樽味遺跡	樽味	農学部自転車置場取設工事	試掘	田崎	81	19930827	7
99304	樽味遺跡３次	樽味	附属図書館農学部分館新営工事	本格	田崎	259	19930823～19931006	8
99305	文京遺跡	城北	城北団地大学会館廻り道路整備(樹木移植)工事	立会	田崎	2	19931109	7
99306	樽味遺跡	樽味	附属図書館農学部分館新営(外灯設備管路)工事	試掘	田崎	3	19931124	7
99307	樽味遺跡	樽味	城北団地他情報通信電気設備工事	立会	田崎	7	19931124	7
99308	文京遺跡	城北	城北団地他情報通信電気設備工事 (2)	立会	田崎	8	19931125	7
99309	持田・岩崎遺跡	持田	1993年度構内遺跡確認調査	確認	田崎	39	19931224～19931225	7
99310	文京遺跡	城北	城北団地情報機器更新電源容量増設工事	立会	田崎	4	19940118～19940119	7
99311	樽味遺跡	樽味	農学部附属図書館新営(排水管埋設)工事	立会	田崎	20	19940208・19940215	7
99312	樽味遺跡	樽味	農学部附属図書館新営(自転車置場)工事(2)	立会	田崎	30	19940208	7
99313	文京遺跡	城北	城北団地基幹整備(屋外環境)工事	試掘	田崎	15	19940209～19940216	7
99314	文京遺跡	城北	工学部研究実験棟建設工事	試掘	田崎	38	19940329	7
EU−99401	桑原西稲葉遺跡３次	北吉井	東長戸他環境整備工事(その１)	立会	田崎	55	19940510～19940518	12
99402		東長戸	東長戸他環境整備工事(その２)	立会	田崎	9	19940517	7
99403	樽味遺跡	樽味	環境整備(附属高等学校他自転車置場)工事	試掘	田崎	8	19940524	7
99404	文京遺跡	城北	城北団地他環境整備(単車置場整備)工事	立会	田崎	1	19940607	7
99405	文京遺跡	城北	城北団地他環境整備(自転車置場設置)工事	試掘	田崎	81	19940608	7
99406	文京遺跡	城北	城北団地他環境整備(自転車置場設置・排水管設置)工事	立会	田崎	5	19940610	7
99407	文京遺跡	城北	城北団地他環境整備(排水枡及び管路取設)工事	試掘	田崎	6	19940801	7
99408	文京遺跡	城北	城北団地他環境整備(電気配管路取設)工事	試掘	田崎	3	19940801	7
99409	文京遺跡	城北	工学部岩盤切削試験機設置工事	立会	田崎	1	19940927	7
99410	文京遺跡12次	城北	工学部校舎新営(Ⅰ期)工事	本格	田崎	1,183	19941110～19950726	概7
99411		津田山	教育学部附属養護学校野外施設(東屋)設置工事	試掘	田崎	33	19950127	7
EU−99501	文京遺跡	城北	教育学部運動場内鉄棒移設工事	立会	田崎	48	19950411～19950412	10
99502	文京遺跡	城北	教養部テニスコート(事務局北側)改修工事	試掘	田崎	9	19950801	10
99503	文京遺跡	城北	工学部南側囲障工事	立会	田崎	3	19950801	10
99504	文京遺跡	城北	理学部構内井戸工事	試掘	田崎	4	19950802	10
99505		山越	山越団地防球ネット取設工事	試掘	田崎	7	19950802	10
99506	文京遺跡13次	城北	地域共同研究センター新営工事	本格	田崎	890	19951017～19960412	概10
99507	樽味遺跡	樽味	公共下水道枡設置工事	試掘	田崎	2	19951114	10
99508	桑原西稲葉遺跡	北吉井	北吉井宿舎公共下水道設置工事	試掘	田崎	2	19951115	10
99509	文京遺跡	城北	城北団地北西通用門改修工事	立会	田崎	3	19951116	10
99510	文京遺跡	城北	埋蔵文化財調査室改修工事	立会	田崎	1	19960131	10
99511	文京遺跡	城北	城北団地基幹整備(電線管等)工事	試掘	田崎	34	19960213～19960220	10
99512	文京遺跡	城北	城北団地事務局ガス管改修工事	立会	田崎	2	19960311	10
EU−99601	文京遺跡14次	城北	工学部校舎新営（Ⅱ期）工事	本格	吉田広・三吉秀充	1,349	19960520～19970331	10
99602	文京遺跡15次	城北	1996年度構内遺跡確認調査	確認	田崎	225	19961113～19961209	10
99603	樽味遺跡	樽味	附属農業高等学校舎新営工事	試掘	田崎	22	19961128～19961211	10
99604	樽味遺跡	樽味	附属農業高等学校温室新営工事	試掘	田崎	5	19961129	10
99605	樽味遺跡	樽味	農学部構内光ケーブル敷設工事	試掘	田崎	1	19961129	10
99606	持田・岩崎遺跡	持田	教育学部附属中学校プール改修その他工事	立会	田崎	4	19970204	10
EU−99701	文京遺跡16A次	城北	工学部校舎新営（Ⅲ期）工事	本格	田崎	1,384	19970428～19971222	概11
99702	文京遺跡16B次	城北	工学部校舎新営（Ⅲ期）工事	本格	吉田・三吉	627	19970409～19970729	概11
99703	樽味遺跡	樽味	ATMネットワーク工事	立会	田崎	131	19970414～19970417	11
99704	文京遺跡	城北	事務局案内板取設工事	立会	吉田・三吉	3	19970804	11
99705	持田・岩崎遺跡	持田	持田団地構内光ケーブル敷設工事	立会	吉田・三吉	5	19970804	11

調査番号	遺跡名次数	団地	工　事　名	調査種別	調査担当	面積(m²)	調査期間	文献
EU−99706	持田・岩崎遺跡	持田	持田団地北側囲障改修その他工事	試掘	吉田・三吉	6	19970805～19970806	11
99707	樽味遺跡	樽味	農学部附属農業高等学校校舎新営工事	試掘	吉田・三吉	12	19970806～19970807	11
99708	樽味遺跡	樽味	樽味地区(拓翠寮)の公共下水道桝設置工事	立会	吉田・三吉	2	19970807	11
99709	文京遺跡	城北	工学部校舎新営電気設備工事（その２）	立会	吉田・三吉	12	19970818～19970821	11
99710	桑原西稲葉遺跡４次	北吉井	北吉井宿舎屋外排水管改修工事	本格	吉田・三吉	100	19971008～19971031	12
99711	桑原西稲葉遺跡５次	北吉井	北吉井宿舎屋外ガス管改修工事	立会	吉田・三吉	32	19971112～19971118	12
99712	樽味遺跡４次	樽味	農学部附属農業高等学校校舎新営工事	本格	吉田・三吉	1,168	19971125～19980204	12
99713	樽味遺跡	樽味	附属農業高等学校運動場東側防護ネット及び第３棟東側フェンス増設工事	試掘	吉田・三吉	6	19971218	11
99714	樽味遺跡	樽味	附属農業高等学校校舎埋蔵文化財調査に伴う支障建物整備工事（農機舎及び車庫）	立会	吉田・三吉	187	19980204～19980206	11
99715	文京遺跡17次	城北	1997年度構内遺跡確認調査	確認	田崎・吉田・三吉	154	19980302～19980310	11
99716	樽味遺跡	樽味	附属農業高等学校運動場東側防護ネット及び第３棟東側フェンス増設工事	立会	吉田・三吉	21	19970311～19970312	11
99717	文京遺跡	城北	工学部校舎新営に伴う外表施設整備工事	立会	吉田・三吉	−	19980217	11
EU−99801	文京遺跡	城北	「大正天皇お手植えの松」移植工事	立会	田崎・吉田	1	19981104	11
99802	文京遺跡18次	城北	総合情報処理センター新営工事	本格	田崎・三吉	1,192	19981214～19990802	概11
99803	文京遺跡	城北	工学部本館等事務室改修機械設備工事	立会	吉田	1	19981214	11
99804	樽味遺跡	樽味	遺伝子実験施設新営その他工事	試掘	吉田	22	19990128～19990129	11
99805	文京遺跡	城北	教育学部２号館南消火用水漏れ改修工事	立会	田崎・吉田	3	19990311	11
99806	文京遺跡	城北	理学部本館南消火栓管路改修工事	立会	田崎		19990316	11
99807	樽味遺跡５次	樽味	遺伝子実験施設新営その他工事	本格	吉田		19990316～19990721	12
99808		重信	医学部附属病院病棟建設工事	試掘	田崎・三吉	979	19990331～19990401	11
99809	文京遺跡	城北	学生会館ガス管改修工事	立会	吉田		19980631	11
EU−99901	文京遺跡19次Ⅰ区	城北	理工学等総合研究実験棟新営電気設備工事	本格	吉田	31	19990907～19990913	13
99902	文京遺跡19次Ⅱ区	城北	理工学等総合研究実験棟新営電気設備工事	本格	田崎・三吉	94	19991201～19991217	13
99903	樽味遺跡	樽味	農学部附属農業高等学校校舎新営電気・機械設備工事（１期）	立会	吉田	1	19991006	13
99904	樽味遺跡	樽味	農学部附属農業高等学校校舎新営電気・機械設備工事（２期）	立会	吉田	25	19991025～19991029	13
99905	樽味遺跡	樽味	農学部附属農業高等学校校舎新営電気・機備工事（３期）	立会	吉田	31	19991124～19991128	13
99906	樽味遺跡	樽味	農学部附属農業高等学校校舎新営電気・機械設備工事（４期）	立会	吉田	3	20000128	13
99907	文京遺跡	城北	「大正天皇お手植えの松」移植工事に伴う調査	立会	田崎・吉田	20	20000125	13
99908	文京遺跡	城北	理工学等総合実験棟新営電気設備工事(その２)	立会	田崎	8	20000201	13
99909	文京遺跡	城北	総合情報処理センター新営電気設備工事	立会	田崎・吉田	8	20000208	13
99910	文京遺跡20次	城北	サテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー新営工事	本格	吉田・三吉	588	20000214～20000620	概13
99911	文京遺跡	城北	大学会館改修工事	試掘	田崎	9	20000216	13
99912	文京遺跡	城北	電灯移設工事	立会	田崎	1	20000216	13
99913	樽味遺跡	樽味	農学部冬期間における水田の貯水状態での生態観察実験のための仮説水田の設置	立会	田崎	1	20000310	13
99914	文京遺跡	城北	埋蔵文化財調査室情報通信設備工事	立会	田崎	19	20000313	13
99915	文京遺跡	城北	法文学部講義棟空調電源工事	立会	田崎	1	20000313	13
99916	樽味遺跡	樽味	農学部附属農業高等学校校舎新営工事	立会	吉田		19990507	13
EU−00001	文京遺跡	城北	大学会館改修機械設備工事	立会	田崎	9	20000829～20000830	13
00002	文京遺跡	城北	教育学部クレイテニスコート改修工事	試掘	吉田・三吉	2	20000913	13
00003	文京遺跡21次	城北	（城北）総合研究棟新営（Ⅰ期）工事	本格	田崎・吉田・三吉	1,870	20010115～20010909	概13
00004	文京遺跡	山越	山越運動場上水管修理工事	立会	吉田・三吉	7	20010115	13

調査番号	遺跡名次数	団地	工　事　名	調査種別	調査担当	面積(㎡)	調査期間	文献
EU−00005	文京遺跡22次	城北	2000年度構内遺跡確認調査	確認	吉田・三吉	33	20010123～20010124	13
00006	文京遺跡	城北	教育学部クレイテニスコート改修工事	立会	吉田・三吉	1	20010123～20010124	13
00007	文京遺跡	城北	法文学部掲示板設置工事	立会	吉田・三吉	5	20010315	13
EU−00101	文京遺跡	城北	同窓会連合会による五葉松移植工事	−	吉田・三吉	3	20010509	本書
00102	樽味遺跡	樽味	農学部寄附建物新営予定	試掘	吉田・三吉	16	20010607	本書
00103	文京遺跡23次	城北	四国電力による城北団地構内高圧線敷設工事	本格	吉田・三吉	17	20010626～20010709	概本書
00104	文京遺跡	城北	工学部屋外給水管布設替工事	立会	吉田・三吉	1	20010801	本書
00105	文京遺跡24次	城北	(城北)総合研究棟新営(Ⅱ期)工事	本格	吉田・三吉	640	20011001～20020326	概本書
00106	樽味遺跡６次	樽味	農学部寄附建物新営工事	本格	田崎	1,205	20011115～20020206	概本書
00107	文京遺跡	城北	事務局構内外灯設備移設工事	立会	吉田	6	20011121～20011127	本書
00108	文京遺跡	城北	教育学部４号館便所改修電気設備工事	立会	田崎	2	20020326	本書
EU−00201	樽味遺跡７次	樽味	農学部２号館改修工事	本格	田崎	170	20020403～20020523	概本書
00202	文京遺跡25次	城北	(城北)情報教育棟新営工事	本格	吉田・三吉	1,022	20020603～20021218	概本書
00203	文京遺跡	城北	(城北)情報教育棟用地埋蔵文化財調査に伴う土木工事	立会	吉田・三吉	1	20020515～20020517	本書
00204	文京遺跡26次	城北	(城北)総合研究棟等改修工事	本格	田崎	145	20020719～20020809	概本書
00205	文京遺跡	城北	(城北)総合研究棟等改修電気設備工事	立会	田崎	3	20021021	本書
00206	文京遺跡	城北	(城北)情報教育棟・放送大学愛媛学習センター新営その他工事(その２)	試掘	田崎	1	20021127	本書
00207	文京遺跡	城北	(城北)総合研究棟新営電気設備工事	立会	田崎	2	20021129	本書
00208	山越遺跡	山越	2002年度構内遺跡確認調査	確認	田崎	65	20021225～20021226	本書
00209	文京遺跡	城北	(城北)総合研究棟新営電気･機械設備工事	立会	田崎	23	20030123～20030129	本書
00210	文京遺跡	城北	(城北)情報教育棟・放送大学愛媛学習センター新営電気設備工事	立会	吉田	1	20030115	本書
00211	文京遺跡	城北	(城北)総合研究棟等改修電気設備工事	立会	田崎・三吉	2	20030303～20030304	本書
EU−00301	文京遺跡27次	城北	(城北)総合研究実験棟新営工事	本格	吉田・三吉	703	20030529～20031024	
00302	文京遺跡	城北	(城北)総合研究実験棟新営工事	立会	吉田・三吉	39	20030527	
00303	文京遺跡	城北	放送大学愛媛学習センターサイン取設工事	立会	田崎	3	20030905	
00304	文京遺跡28次	城北	理学部総合研究棟改修工事	本格	田崎	45	20031201～20031216	

註１　1975～1984年までに行われたEU-97501～EU-98401の調査は、松山市教育委員会が担当。
註２　1986年に行われたEU-98601～EU-98605の調査は、法文学部人類考古学研究室による。

[文献]

１．森光晴･大山正風ほか 1976：文京遺跡．松山市文化財報告書，11
２．宮本一夫編 1989：鷹子・樽味遺跡．愛媛大学埋蔵文化財調査報告，Ⅰ
３．宮本一夫編 1990：文京遺跡第８・９･11次調査．愛媛大学埋蔵文化財調査報告，Ⅱ
４．宮本一夫編 1991：文京遺跡第10次調査．愛媛大学埋蔵文化財調査報告，Ⅲ
５．栗田茂敏編 1992：文京遺跡－第２・３・５次調査．松山市文化財報告書，28
６．田崎博之編 1993：樽味遺跡Ⅱ．愛媛大学埋蔵文化財調査報告，Ⅳ
７．田崎博之編 1996：愛媛大学構内遺跡調査集報Ⅰ．愛媛大学埋蔵文化財調査報告書，Ⅴ
８．田崎博之編 1996：樽味遺跡Ⅲ．愛媛大学埋蔵文化財調査報告書，Ⅵ
９．愛媛大学埋蔵文化財調査室編 1998：文京遺跡シンポジウム－弥生大集落の解明－
10．吉田　広編 2001：愛媛大学埋蔵文化財調査室年報－1995・1996年度－．愛媛大学埋蔵文化財調査報告書，Ⅶ
11．田崎博之編 2002：愛媛大学埋蔵文化財調査室年報－1997・1998年度－．愛媛大学埋蔵文化財調査報告書，Ⅷ
12．吉田　広編 2003：樽味遺跡Ⅳ．愛媛大学埋蔵文化財調査報告書，Ⅸ
13．田崎博之編 2003：愛媛大学埋蔵文化財調査室年報－1999・2000年度－．愛媛大学埋蔵文化財調査報告書，Ⅹ

愛媛大学埋蔵文化財調査室年報

—— 2001・2002年度 ——

愛媛大学埋蔵文化財調査報告　XI

2004年2月27日

発　行　愛媛大学埋蔵文化財調査室
〒790-8577　松山市道後樋又10－13
TEL 089-927-9127

印　刷　セ　キ　株　式　会　社
〒790-8686　松山市湊町7－7－1
TEL 089-945-0112

R100 本文には古紙配合率100%の再生紙を使用しています。